

WAI 技法を用いた 自我の実証的研究 (2)

1. はじめに.....	5
2. 基準書の作成.....	21
3. 基準書による反応頻度の分析.....	29
4. WAI 反応の反応パターンの分析.....	41
5. 研究の総括と今後の展望.....	65
6. 引用文献.....	71
7. 資 料.....	75

本研究では、データの収集において、たくさんの被験者の方々をはじめ、諸学校の先生方、企業の方々、横田ゼミナールのOB、OGの方々に御協力をいただきました。その方々に心より御礼を申し上げます。特に、退職公務員連盟の鈴木虎秋氏と安間君哉氏、放送大学の星薫先生、東京都老人クラブ連合会の渡辺満明氏には、われわれのデータの収集のために格別のご尽力をいただきました。ここに記して感謝の気持ちを表します。

慶應義塾大学文学部人間科学専攻横田ゼミナールの第14期生(1984年卒)から21期生(1991年卒)の皆さんには、数千にも及ぶ膨大なデータの整理、分類評価、集計をしていただきました。特に、20期生と21期生の皆さんには、この研究で新たに分析された約6,800ものデータの分類評価をしていただきました。ゼミ長の斉本憲志君、竹内直規君をはじめ、ゼミ員の皆さんに心より御礼を申し上げます。また、この研究プロジェクトの当初から現在に至るまで参加していただいている西村麻由美さんと、データの分類評価をお手伝いいただいた大学院のパーソナリティ実習の受講生の皆さんに御礼を申し上げます。そして、研究の過程の様々な点において御支援、御協力をいただいた伊藤隆一氏と兼高聖雄氏に心より感謝いたします。

執筆者紹介

●いわくま しろう (慶應義塾大学新聞研究所研究員)

●まきた ひとし (慶應義塾大学文学部教授)

1

はじめに

1. 自我・自己理論の流れ	5
2. 自我・自己の実証的研究	8
3. 研究の目的	15

われわれは、WAI 技法による自我の実証的分析を数年にわたって続けている。本稿はその成果をまとめたものであるが、1988年度までの成果については、既に「組織行動研究, No. 16」(楨田・岩熊, 1990) にモノグラフとして掲載されている。そこで本稿では、1989年度以降の成果を中心に述べることにする。この章では、既存の自我・自己についての理論、実証的研究の成果、われわれの研究の目的について述べるつもりであるが、これは前述のモノグラフの内容とも大きく重なるため、簡略にまとめて触れるにとどめる。

1. 自我・自己理論の流れ

自我・自己についての考察は、多くの研究者によって為されてきた。その中でも特に大きな影響を与えた理論としては、社会心理学的自己論、精神分析学的自我心理学、現象論的自己論などが挙げられる。まず、これらの理論について概観してみよう。

社会心理学的自己論は、James の自己理論を、Cooley や Mead などが発展させたものである。James (1890, 1892) は、自我 (self) を知者また

は主体としての自我、即ち、主我 (the I) と、被知者または客体としての自我、即ち、客我 (the Me) とに分けて分析を行なっている。彼は、特に客我に注目し、それらが喚起する感情や情緒、それが人々にとらせる行為、さらには様々な客我間の階層性についても言及している。Cooley (1902) や Mead (1934) は、James の主我と客我の分類を継承し、特に、社会的側面に注目して分析を進めている。Cooley (1902) は、反映的あるいは鏡映的自己 (reflected or looking glass self) という概念を用い、自己と他者との関連についても考察を加えている。Mead (1934) は、James の主我と客我の考え方を発展させ、人が、他の人々を彼の対象とするように、自分自身を自分にとっての客体とすることによって、社会の一員として合理的で効果的な活動を為し、適切な態度をとることができると考えた。また、広い社会での様々な態度や行動の組織体を、一般化された他者 (the generalized other) と呼び、これが、個人の中に自己という統一体をつくると考えた。

精神分析学的自我心理学には、Freud をはじめ、A. Freud, Hartmann, Erikson などの理論が含まれる。精神分析学の始祖である Freud

(1923, 1933)の自我論は、それぞれ独自の役割や機能を持った自我、エス、超自我という3つの基本概念に基づき構成されているが、自我は、エス、超自我、現実の3者の要求の調整役として受動的に振舞うものとされている。しかし、Freud以降は、自我をより自立的なものとする傾向が強くなる。例えば、A. Freud (1936)は、防衛機制に注目し、自我の防衛的側面について明確に系統立てて論述している。また、Hartmann (1939)は、自我がエスから発達するわけではなく、自我もエスも共に共通の母胎から分化すると考えた。

Erikson (1950, 1959)は、心理・社会的側面からの自我の発達に注目して理論を構成している。彼は、人間の誕生から死に至るライフサイクルを8つの発達段階に分け、人生の中で発達させられるべき精神的健康の構成要素を8つ挙げている。各構成要素は、対応する発達段階において発達させられるべきものである。これらは、対応する発達段階に至って初めて優勢になり、その危機に直面し、永続的解決を見出す。この精神的健康の構成要素の中で特に重要なのは、同一性 (identity)あるいは自我同一性 (ego identity)の感覚である。この同一性の感覚とは、内的な不変性と連続性を維持する能力が、他者に対する自己の意味の不変性と連続性に合致する経験から生まれた自信のことである。自我同一性は、それ以前のすべての同一性の漸新的な統合から発達し、青年期の終わりに確立される。そのため、最終的な同一性は、すべての重要な同一化を包括するが、それらの同一化群から独自で適切なまとまりを持った全体を形成している。発生的な見地から見ると、同一性形成過程は、生得的、体質的要因、その個体特有なリビドー欲求、恵まれた能力、重要な同一化、効果的な防衛、成功した昇華、一貫した役割などを統合して行く構造化の過程と言うことができる。従って、自我同一性の形成過程は、自我を統合していく過程と見ることも可能であろう。

現象的自己論としては、RogersやAllportの理論などが挙げられる。Rogers (1951)のパーソナリティあるいは行動についての理論においては、現象の場 (phenomenal field)における自己構造 (self structure)あるいは自己概念 (self-

concept)が大きな意味を持っている。自己の構造は、「私」の特質や関係についての知覚が組織化された、流動的だが首尾一貫した概念のパターンである。そして、これらの概念に結び付けられている価値も自己の構造の中に組織化されている。ところが、経験が自己の構造と矛盾すると、経験は象徴化を拒否されるか、あるいは、歪曲されて象徴される場合がある。これには意識的な知覚の拒否の場合もあるが、Freudの言う抑圧 (repression)にあたる場合がある。このような場合には、有機体としての経験はあるが、この経験の象徴化が存在しないか、あるいは、歪曲された象徴だけが存在すると考えられる。心理的不適応は、このように有機体が重要な官能的・肉体的経験を意識することを拒否し、そのような経験が象徴化されず、自己構造のゲシュタルトへと組織化されない時に存在する。自己の構造と矛盾・対立するあらゆる経験は、何らかの脅威として知覚され、このような知覚が多くなるほど、自己構造はそれ自体を維持するように強固に組織化される。それに対し、自己の構造に対しての基本的に何らの脅威も含まない条件のもとでは、自己構造と矛盾・対立する経験は、知覚され、検討されるようになり、自己構造は、このような経験を同化し包含するように修正されるようになる。つまり、このような条件のもとで自己構造の再組織化が行なわれるのである。そして、個人が自分の官能的・肉体的経験の一切を知覚し、それを首尾一貫した統合された1つの体系へ受容するならば、必然的に他の人々をより一層理解し、独立した個人として受容できるようになるのである。

Allport (1955)は、自我・自己の概念が“何でも屋”としていい加減に使用され、結果として自我・自己の研究に害を及ぼすことを憂慮した。また、心理学が最初にやるべきことは、個人にとって重要なことを弁別することであると主張している。Allport (1943)は、自我の概念の整理を行なっているが、さらにこの概念の整理を進展させ、プロプリウム (proprium)という概念を用いることにした (Allport, 1955)。これは、われわれが特に自分のものだとみなす、われわれの生活のすべての領域を指す。プロプリウムは、①身体感覚

(bodily sense), ②自己同一性 (self-identity), ③自我高揚 (ego-enhancement), ④自我拡大 (ego-extension), ⑤合理的な対処者 (rational agent), ⑥自己像 (self-image), ⑦固有的希求 (proprie striving), ⑧知者 (the knower) の8つに分けられている。後に, Allport (1961) は, プロプリウムを①から⑦までとし, ⑧の知者を除いて考えている。そして, プロプリウムに被知者としての客我の位置を与えている。これは, 知者を含めた主動者としての自己を, パーソナリティの内部の固有の体系から切り放して考えることを心理学においては避けるべきだと彼が考えていたためと思われる。また, 7つのプロプリウムの要素を発達の段階に従って提示し, ①身体感覚, ②自己同一性, ③自己高揚は誕生から3才までの間にあらわれ, ④自我拡大と⑥自己像は4才から6才までの間にあらわれる。その後12才までの間に⑤合理的な対処者があらわれて, ⑦固有的希求は青年期にあらわれるとしている。全体的に見ると, プロプリウムは, 他の自我・自己の理論を参考にして, 包括的な視点から導き出されたものと言える。しかしこれは, 単なる理論の寄せ集めではなく, 概念的というよりも感覚的な統一を持っている。彼が自己のことを「生活の暖かい, 中心的な, 私的な領域」(Allport 著 今田監訳, 1968, p. 137) と述べていることからわかるように, このような統一は, 生身の個人の視点から考察を行なうことによって得られたものと言えるであろう。

このように, ここに挙げた理論だけを見ても, 自我・自己が人間の理解において重要であり, しかも, それに関しては多様な考え方があることがわかる。この場でこれらの理論を総合して, 何らかの結論を得ることは不可能であるが, これらの理論から, 自我・自己について考える上での視点を導くことは可能である。そこで, これらの理論を参考にしながら, このような視点について考えてみたい。

まず, 自我や自己は, 広い領域, あるいは, 多くの側面を持っているものと思われる。これは, 多様な理論が存在しており, それらが様々な自我・自己の側面を扱っていることにもよく現れて

いる。一方, 個々の理論を見ると, James (1892) の理論では, 客我に身体, 衣服, 直接近親の家族, 住居, 財産, 周囲の他者から受ける認識, 様々な意識状態, 心的能力, 諸傾向など, 広範囲に及ぶものが含まれているだけでなく, それらが喚起する感情や情緒としての自己評価や, それらが個人にとらせる行動としての自己追求や自己保存など, 自我・自己には多くの側面があることも示されている。Freud (1933) の理論では, エス, 自我, 超自我という3つの領域を仮定している。自我・自己を広く捉える場合には, この3者を含めて考えるべきであろう。また, Erikson (1950) も, 8つの精神的健康の構成要素を挙げている。さらに, それまでの多くの自己理論を参考にし, 広く自我を考察した結果とも言える Allport (1955) のプロプリウムが, 多くの領域を含んでいることは, 自我・自己が広範囲に及ぶものであることを端的に物語っている。このように自我・自己を考える上では, 広範囲の領域や多様な側面を考慮すべきと言えるであろう。

さらに, それらの領域や側面は, 個々独立に存在しているのではなく, 相互に関連し合い, 全体として1人の人間の自我・自己を構成している。つまり, 自我・自己は構造を持っていると考えられる。James (1892) は, 客我間に階層性があると述べている。この階層性は, 上位の客我の自己追求や自己保存が下位の客我のそれより優先されるという関係を表している。Freud (1933) のエス, 自我, 超自我の間には, 密接な相互関係が存在している。この関係は, James の階層性とは異なり, それぞれが独自の機能を持ち, 相互に影響し合うという力動的な関係を意味している。一方, Rogers (1951) の理論では, 自己の構造が重要な意味を持っている。自己の構造は, 「私」の特質や関係についての知覚や, それらに結び付いた価値が組織化されたものであり, この構造と感覚的・内臓的経験との関係が, 心理的不適応を引き起こすと考えられている。また, Erikson (1950) は, 同一性形成過程を, 生得的, 体質的要因, その個体特有なリビドー欲求, 恵まれた能力, 重要な同一化, 効果的な防衛, 成功した昇華, 一貫した役割などを統合して行く構造化の過程としてい

る。このように、多くの理論は自我・自己に何らかの構造があると仮定している。しかし、構造を考える時の視点が理論によって様々であり、自我・自己の構造と一概に言えないような質的な違いを持っている。そういう意味では、様々な視点から構造の分析を行ない、さらに、分析の結果得られた構造を理論的に比較・統合していく作業が必要となるであろう。

最後に残された問題として、自我・自己の機能の問題がある。Freud (1933) の理論は、機能的な側面に焦点をあてたものと言える。エスは、快感原則のもとに欲動や欲求を満足させようとし、超自我は、良心、自己監視、自我理想という機能を持っている。一方、自我は、知覚-意識体系を通じて外界を観察し、運動性への通路も支配している。また、エスや超自我の要求はすべて自我に突きつけられることになる。つまり、自我の機能は、エス、超自我、外界の間の調整役ということになる。その後の精神分析学的自我心理学では、自我機能についての詳細な検討が行なわれている (e.g., Freud, 1936; Hartmann, 1939)。例えば、自我機能を測定・評価する試みをしている Bellak と Sheehy (1976) は、自我機能の構成要因として、現実検討、判断、現実感覚、衝動統制、対象関係、思考過程、適応的退行、防衛機能、刺激障壁、自立的機能、総合-統合機能、支配-有能性の12の機能を挙げている。ところで、James (1892) は、自我全体を知者としての自我 (主我) と被知者としての自我 (客我) とに分けて考察している。彼は、主我を「考える主体」としており、認知的な機能をこの主我に帰属させていると見ることができる。ただし彼は、主我を意識の流れと考え、その背後に不変的な実体や行為者を想定することを自然科学的見地の範囲内では避けるべきだと主張している。Allport (1961) も、知者を含めた主動者として自己を、パーソナリティの内部の固有の体系から切り放して考えることを心理学においては避けるべきだと主張している。ところがその一方で、James (1892) は、客我が個人にとらせる行為として自己保存や自己追求を挙げている。これらは自我・自己の動機づけの側面と行うことができるが、Allport (1955) も、同じように、自

我高揚、自我拡大、固有的希求を挙げている。このような動機づけは、直接、自我・自己の機能として見ることはできないにしても、自我・自己の機能とも密接に関連している。これらについては、自我・自己の内容としての側面と、機能的な側面との両面性を考えるべきかも知れない。

以上のように、自我・自己をその領域・範囲、構造、機能などの視点から考えることが可能であろう。そして、自我・自己の理解には、これらの視点から捉えられた自我や自己を総合的に考察することが必要であろう。自我・自己については、心理学だけではなく、哲学をはじめとする様々な領域で理論的に考察されてきた。そして、このような理論的考察は、益々盛んになる傾向を示している。そういう意味では、今後、自我の理論的な研究も大きく発展するものと期待される。

2. 自我・自己の実証的研究

自我・自己に関する実証的研究は、第2次世界大戦以降、心理学の様々な領域で盛んに行なわれるようになった。例えば、実験社会心理学では、社会心理学での重要な領域である態度研究において、自我・自己を問題としたものや (e.g., Bem, 1967; Nel, Helmreich, & Aronson, 1969)、自我・自己に関する新たな個人差の変数を見出したものなどがある (e.g., Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975; Snyder, 1974)。また、発達的な研究では、Erikson (1950) の自我同一性に関する理論を実証的に分析したものや (e., Marcia, 1966; Marcia, 1976; Waterman, Geary, & Waterman, 1974; Waterman & Goldman, 1976; Waterman & Waterman, 1971)、自己概念の発達的な変化を分析したものなどがある (e.g., Goebel & Brown, 1981; Haan, 1981; 加藤, 1977; 加藤, 1987; 加藤・高木, 1980; Katz & Zigler, 1967; Kifer, 1975; 間宮, 1974; Ryff & Heincke, 1983; 下仲・村瀬, 1976)。

自我・自己に関する実証的研究では、自己概念や self-image が測定・分析されることが多い。自己概念 (self-concept) は、個人が自分自身に対して抱いている考えのことを指す。これには、

自分の生物学的な属性、社会的な属性、能力、性格、態度などの広範なものが含まれる。また、現実の自分だけではなく、「自分はこうありたい」とか「自分はこうあるべきだ」といった“理想的な自己 (ideal self)”もこれに含まれる。つまり、その個人が自分自身をどのように見ているかということの全般がこれに含まれることになる。self-image (自己像) もほとんど同じ様な意味で用いられており、自己概念と明確に区別することはむずかしいが、自己概念は、より恒常的で、より抽象化されたものを指して用いられているようである (e.g., 梶田, 1988)。しかし、どの程度の恒常性や抽象性があれば自己概念と言えるのかは程度の問題であり、明確な境界があるわけではない。いずれにしても、これらは、すべて個人によって主観的に捉えられた“自分”を扱ったものである。自我・自己の問題は、必ずしもこれらに限定されるものではないが、その中で重要な位置を占めている領域の1つと言えるであろう。

自己概念や self-image を実証的に捉えるための技法がいくつか考案されているが、それらは、評定法またはチェック・リスト法、Q分類技法、自由回答法の3つに大きく分けることができる。この中で最も一般的なものは、評定法とチェック・リスト法である。これに属する技法は非常に多いが、基本的な手続きは類似している。これらの技法では、いくつかの項目が質問紙で示され、被験者はその項目が自分にどれくらいあてはまるかを評定する。項目は、形容詞のような単語で示される場合もあるし (e.g., Gouth & Heibrun, 1980; Sarbin & Rosenberg, 1955)、行動や性格特性の記述のような文章で示される場合もある (e.g., Fittes, 1964)。また、被験者の反応の仕方にもバリエーションがある。1つは、「よくあてはまる」とか「全くあてはまらない」というような選択肢が数段階の尺度で示されて、被験者はその間のいずれかを選択するというものもある。 (e.g., Fittes, 1964)。もう1つは、チェック・リストと呼ばれるもので、項目があてはまる場合のみ項目にチェックを付けるというものである。 (e.g., Gough & Heibrun, 1980; Sarbin & Rosenberg, 1955)。そのほかに、SD (semantic

differential) 法を用いたものがある。これは、項目を反対の意味を持つ形容語の対で示して、被験者は2つの形容語のどちらが自分にあてはまるかを何段階かで評定するというものである (e.g., 長島他, 1966)。一方、Q分類技法は、Stephenson (1953) や Butler と Haigh (1954) によって使用されている。これは、被験者が行動や性格特性についての記述の書かれた100枚のカードを、それらが自分にどのくらいあてはまるかに従って、9つの群 (パイル) に分類するというものである。この時各パイルに分類されるカードの数は予め決められていて、分類されたカードの数が正規分布するようになっている。

上記の2種類の技法は、研究者が項目を予め用意するという共通点を持っている。しかし、項目を予め決めて被験者に呈示することにはいくつかの問題がある。その1つは、被験者の self-image や自己概念を測定するのに、どのくらいの数の項目が必要なかということである。項目数は数十から数百に及ぶものまでであるが、個人の持つ膨大な self-image・自己概念の数に比較すれば、いずれにしても十分な数とは言えない。かと言って膨大な項目数のテストを施行することは、被験者の負担を考えれば不可能と言わざるを得ない。従って、被験者に呈示される項目が、何らかの基準で選択されることになる。そして、この項目の選択に第2の問題がある。予備的に収集されたデータに基づいて帰納的に項目の選択を行なっている研究者もいるが、研究者の関心や研究者の考える重要性に従って恣意的に項目選択が為されていることも少なくない。第3の問題は、これらの技法において被験者は与えられた項目に対し受身的に反応しているだけで、その個人にとって重要な self-image や自己概念を得られる保証が全くないということである。例えば、「自律性のある人間」という自己概念をもっている個人は、テストに自律性に関する項目が含まれていればそれに反応することができるが、もしなければ、その個人にとってそれがいかに重要な自己概念であっても、テストには反映されない。またその反対に、自分の自律性についてまるで考えたこともない個人は、自律性に関する項目に一時的で信頼性のない反応し

かできないであろう。つまり、そのような個人の自己概念や self-image において、自律性はほとんど意味を持っておらず、自律性に関する項目のあること自体が問題なのである。

このように考えると、研究者が予め用意した項目を用いる限りは、被験者にとって意味のある自己概念や self-image が得られる保証はないことになる。むしろ、被験者が自発的に反応内容を選択する場合にのみ、適切な自己概念や self-image を捉えられると言えるであろう。McGuire と Padawer-Singer (1976) も、個人が実験者によって示された次元のどこに自分を位置づけるかということよりも、その個人が自分を記述するのにどんな次元を選ぶかということに、自己概念についての興味深い情報があると述べている。彼らは、このような視点から、自発的な反応を得るために、自由回答法を用いた自己概念の把握を行っている。自由回答法では、研究者が項目を用意するのではなく、被験者が自発的に自分の言葉で自己記述を行なう。そのため、研究者の視点によって被験者の反応が左右されることは少なく、被験者の自己概念・self-image において全く意味を持たないような反応が出ることもない。このような点を考慮すると、自己概念・self-image の測定には、評定法、チェック・リスト法、Q分類技法よりも自由回答法の方が望ましいと言えるであろう。

自由回答法を用いた自己概念・self-image 把握のための技法で一般的に用いられているものとしては、W-A-Y 技法、WAI 技法、“Tell Us about Yourself” テストが挙げられる。W-A-Y 技法は、Bugental と Zelen (1950) が考案したもので、自由回答法を用いた自己概念・self-image の研究技法の先駆けとなったものである。この技法では、被験者に対して「あなたは誰ですか？ (Who are you?)」という質問をして、それに対する 3つの答えを被験者自身の言葉で記述させる。回答は、文でも、節でも、単語でも構わない。Kuhn と McPartland (1954) が考案した WAI 技法は、20 答法 (TST: Twenty Statements Test) とも呼ばれ、W-A-Y 技法とも多くの共通点を持っている。ただし、W-A-Y 技法が「あなたは誰です

か？ (Who are you?)」という問いに対する回答を求めるのに対し、WAI 技法では「私は誰でしょう？ (Who am I?)」という問いに被験者が自問自答して回答を記述する点と、回答数が 20 答である点が、W-A-Y 技法と異なっている。この技法は、W-A-Y 技法に比べて、多くの反応を得られるという利点を持っている。また、WAI 技法の教示によって多様な反応が得られることを示唆する報告もある (菊地, 1970)。最後の “Tell Us about Yourself” テストは、McGuire を中心としたグループによって考案されたものである (e.g., McGuire & McGuire, 1981; McGuire, McGuire & Winton, 1979; McGuire & Padawer-Singer, 1976)。この技法は、「私たちにあなた自身のことについてを教えてください。(Tell us about yourself.)」という教示を被験者に与え、5 分間口頭で答えさせるか、あるいは、7 分間筆記で答えさせるというものである。この技法では、回答の単位が示されないため、上記の 2つの技法よりも自由な反応が可能となる。その一方で、分析の単位が不明確なことや、反応が冗長になりがちであるなどの問題もある。

自由回答法で得られた反応の分析手続きとして一般的なものは、反応カテゴリーを作成し、それ

表 1-1 Bugental と Zelen (1950) の反応カテゴリーとその言及率

カテゴリー	言及率 (%) N=134
Name.....	83.3
Personal pronoun.....	12.3
Nonindividualized reference	
(a) Social-scientific.....	27.6
(b) Metaphysical.....	3.8
Sex.....	61.9
Age.....	8.0
Occupation.....	62.3
Family status.....	10.1
Social status.....	6.3
Neutral descriptive reference	
(a) Geographic, political, temporal location.....	40.3
(b) Nationality, Race, or Religion.....	11.2
(c) Appearance.....	5.2
(d) Undesignated.....	2.1
Affective toned reference	
(a) Favorable.....	13.3
(b) Unfavorable.....	10.5
(c) Ambivalent.....	2.1
Miscellaneous.....	3.8

に基づき反応を分類し、各カテゴリーの反応頻度を分析するというものである。反応カテゴリーは、研究の対象や目的の違いによって様々なものが作成されている。例えば、Bugental と Zeln (1950) は、大学生 134 名に W-A-Y 技法を施行し、予備調査の反応から作成された 17 の反応カテゴリーの言及率を算出した (表 1-1 参照)。言及率とは、そのカテゴリーに分類される反応を、被験者の何パーセントが少なくとも 1 回行っているかを算出したものである。彼らの分析の結果、〈名前 (Name)〉、〈職業 (Occupation)〉、〈性別 (Sex)〉のカテゴリーは言及率が 60% を越えており、カテゴリーによって言及率が異なることや、被験者の性や年齢によってカテゴリーの言及率が異なることなどが示された。

Kuhn と McPartland (1954) は、反応を consensual な言及と subconsensual な言及に分類して分析を行なっている。consensual な言及とは、「その成員性の制限や条件が常識 (common knowledge) であるような、グループやクラスについて言及している記述」(Kuhn & McPartland, 1954, p. 69) である。これには、「学生である」、「女の子である」、「夫である」というような反応が分類される。それに対し、subconsensual な言及とは、「正確にするため、あるいは、他者との比較をするために、反応者自身による解釈を必要とするであろう、グループ、クラス、属性、特性、その他の事柄に言及している記述」(Kuhn & McPartland, 1954, p. 69) である。これには、「幸せだ」、「退屈している」、「かなり良い学生である」というような反応が分類される。彼らは、被験者の 20 の回答を見ると、初めに consensual な言及が続けて出現し、その後 subconsensual な言及がまとめて現れる傾向があることに気づいた。そこで、consensual な言及から subconsensual な言及に移行する回答数を “locus score” と呼び、それを分析指標として用いた。locus score は、社会システムとのつながりや、そこでの自己確認 (self-identification) の強さを示すとされている。彼らは、宗教への態度と locus score との関連を分析し、その結果、両者の間に有意な関連があることを示した。例えば、ローマ・カト

リックを好む者は locus score が 11.89 で最も高く、無宗教を好む者は 5.57 で最も低かった。

反応カテゴリーとして広く用いられているものとしては、McLaughlin (1966) と Gordon (1968) のカテゴリーがある。両者とも WAI 技法の反応の分類を目的として作成されている。McLaughlin は、コンピュータによる内容分析の手法を WAI 技法の分析に用いるために、“WAI Dictionary” を作成した。これは、約 3,000 の単語と 50 の熟語で構成されており、8 つの次元に整理された 30 のカテゴリーを持っている (表 1-2 参照)。“WAI Dictionary” は、先行研究や理論、特に、自己概念の次元に関する Rogers (1959) の理論と、200 人の被験者から得られた WAI 反応を参考にして構成されている。彼は、243 人の

表 1-2 McLaughlin (1966) の反応カテゴリー

カテゴリー
a. Roles
1. Male-Role
2. Student-Role
3. Intellectual-Role
4. Family-Role
5. Interpersonal-Role
6. Social-Group-Role
b. Value and Interests
7. Religious-Reference
8. Political-Reference
9. Economic-And-Status-Reference
10. Aesthetic-Reference
11. Physical-Reference
12. Recreation-And-Sports-Reference
c. Temporal and Spatial Orientations
13. Past-Orientation
14. Future-Orientation
15. Place-Orientation
d. Cognitive and Behavior Orientations
16. Acceptance-Orientation
17. Rejection-Orientation
18. Action-Orientation
19. Cognitive-Orientation
20. Achievement-Orientation
e. Self-Evaluations
21. Positive-Self-Evaluation
22. Negative-Self-Evaluation
23. Neutral-Self-Evaluation
f. Psychological States
24. Sign-Content
25. Sign-Discontent
26. Sign-Need
g. Expressive Modes
27. Overstate
28. Understate
29. Negative
h. Consensual Human Identity
30. Consensual

大学1年生のWAI反応をこのカテゴリーで分析し、被験者ごとに各カテゴリーの反応数を算出した。そして、それを因子分析した結果、対人関係の領域に関する因子と、過去と個人の背景・達成に関する因子を得ている。

Gordon (1968) は、それまでに作られたカテゴリーの特徴を統合し、社会的同一性 (social identity) という視点からカテゴリーを作成した。彼のカテゴリーでも、30のカテゴリーが8つの主要な項目のもとに整理されている (表 1-3 参照)。彼のカテゴリー特徴は、社会学的な視点を多く取り入れている点で、例えば、ParsonsのAGILモデルが4つの自己の感覚 (sense of self) に対応づけられている。表 1-3 の言及率は、高校生 157

表 1-3 Gordon (1968) の反応カテゴリーとその言及率

カテゴリー	言及率 (%) N=157
A. Ascribed Characteristic	
1. Sex	74
2. Age	82
3. Name	17
4. Racial or National Heritage	7
5. Religious Categorization	11
B. Roles and Memberships	
6. Kinship Roles	17
7. Occupational Role	5
8. Student Role	80
9. Political Affiliation	1
10. Social Status	1
11. Territoriality, Citizenship	16
12. Membership in Actual Interacting Group	17
C. Abstract Identifications	
13. Existential, Individuating	29
14. Membership in an Abstract Category	41
15. Ideological and Belief References	18
D. Interests and Activities	
16. Judgements, Tastes, Likes	27
17. Intellectual Concerns	1
18. Artistic Activities	4
19. Other Activities	27
E. Material References	
20. Possessions, Resources	5
21. Physical Self, Body Image	36
F. Major Senses of Self	
22. Sense of Competence	36
23. Sense of Self-Determination	23
24. Sense of Unity	5
25. Sense of Moral Worth	22
G. Personal Characteristics	
26. Interpersonal Style	59
27. Psychic Style	52
H. External References	
28. Judgements Imputed to Others	18
29. Situational References	9
30. Uncodable Responses	4

名の反応を分析した結果得られたものである。この中で、最も言及率が高いのは、〈年齢 (Age)〉で、その他に〈学生の役割 (Student Role)〉、〈性別 (Sex)〉の言及率が高くなっている。表 1-1 の Bugental と Zelen (1950) の結果と比較すると、〈学生の役割〉、〈性別〉については類似した結果を得ている (Bugental らの〈職業 (Occupation)〉には「学生である」という反応も分類されている)。しかし、〈年齢〉は、Bugental らの結果では 8.0% に過ぎず、Bugental らの結果で最も言及率の高かった〈名前〉は、Gordon の結果では 17% に過ぎない。この違いは、W-A-Y 技法と WAI 技法の違い (e.g., 回答数, 教示), 被験者の違い (e.g., 年齢, 施行時期), あるいは、施行状況, 分類評価の仕方などの違いによるものと考えられる。ところで、Gordon はこのカテゴリーによる分類以外の分析も行なっている。その 1 つは、反応を性別, 人種, 宗教などの “category” の反応か、あるいは、「恥ずかしがり屋」とか「知的」などの “attribute” の反応かで分類するものである。もう 1 つは、反応の時制を分析するものである。時制の分析では、過去から現在につながるものが約 75% を占めることが示されている。さらに、彼は、各反応を、被験者自身にとって「非常に否定的 (negative) なもの」から「非常に肯定的 (positive) なもの」までの 5 段階で評定させた。その結果、はっきりと肯定的、あるいは、否定的とみなされる反応は学生で約 40% であったのに対し、アルコール中毒患者では 52%、分裂病患者では 70% であり、これらの患者で感情負荷的 (affect-laden) な反応が多いことを示した。

Montemayor と Eisen (1977) は、10 才から 18 才までの被験者に WAI 技法を施行し、Gordon (1968) の反応カテゴリーを用いて分析を行なっている。表 1-4 は、各年齢ごとにカテゴリーの言及率を算出したものである。これを見ると、Gordon (1968) が高校生の反応を分析した結果 (表 1-3 参照) とは異なる点もある。例えば、〈年齢 (Age)〉を比較すると、Gordon の結果では、82% の言及率があるのに対し、Montemayor らの結果では、高校生にあたる 16 才と 18 才を見

表 1-4 カテゴリーの年齢別言及率 (%) (Montemayor & Eisen (1977) より作成)

カテゴリー	年齢(N)					全体 (262)
	1 0 (53)	1 2 (50)	1 4 (55)	1 6 (65)	1 8 (30)	
1. Sex	45	73	38	48	72	54***
2. Age	18	35	30	25	41	29
3. Name	50	10	8	11	31	22***
4. Racial or National Heritage	5	4	2	13	15	8
5. Religion	7	0	4	5	10	5
6. Kinship Role	37	28	18	25	57	32**
7. Occupational Role	4	12	29	28	44	23***
8. Student Role	67	59	37	54	72	57**
9. Political Affiliation	0	0	4	3	5	3
10. Social Status	4	0	0	2	3	2
11. Territoriality, Citizenship	48	16	21	13	11	23***
12. Membership in Actual Interacting Group	57	39	34	38	57	45
13. Existential, Individuating	0	34	19	28	54	25**
14. Membership in an Abstract Category	2	80	31	45	52	42**
15. Ideological and Belief References	4	14	24	24	39	21***
16. Judgements, Tastes, Likes	69	65	80	45	31	58**
17. Intellectual Concerns	38	28	40	24	23	31
18. Artistic Activities	23	36	30	28	18	28
19. Other Activities	63	62	82	75	60	70
20. Possessions, Resources	53	22	24	14	8	25**
21. Physical Self, Body Image	87	57	46	49	16	53**
22. Sense of Competence	36	37	44	48	36	41
23. Sense of Self-Determination	5	8	26	45	49	27***
24. Sense of Unity	0	0	15	17	21	11***
25. Sense of Moral Worth	4	23	17	28	28	20*
26. Interpersonal Style	42	76	91	88	93	78**
27. Psychic Style	27	42	65	81	72	58**
28. Judgements Imputed to Others	23	23	24	28	57	30**
29. Situational References	9	7	20	20	10	14
30. Uncodable Responses	19	15	10	8	8	12

※右側のアスタリスクは、 χ^2 検定の結果を示す (* : $p < .05$; ** : $p < .01$; *** : $p < .001$)。

ても、25%と41%である。また、《Interest and Activities》の4つのカテゴリー(16~19)は、Gordonの結果の方がかなり低い。このような違いには、研究の行なわれた時期が違う点や、被験者の居住地域の違いが影響していると思われるが、それだけでなく、分類を行なう時点でのカテゴリーの解釈に違いがあることも考えられる。ところで、Montemayorらの結果から、反応の年齢による違いを見ると、いくつかの発達の特徴が認められる。1つは、《Possessions, Resources》と《Physical Self, Body Image》の言及率が、年齢とともに下がる傾向があることである。Gordonは、この2つのカテゴリーを《Material References》と呼んであり、これは、James (1892)の物質的客我と対応づけて考えることもできるであろう。この結果は、発達に伴って、自

己概念、あるいは、self-imageから具体的で物質的な側面が希薄になる傾向があることを示唆している。もう1つの特徴は、《Interpersonal Style》と《Psychic Style》の言及率が、年齢とともに上昇する傾向があるということである。この2つのカテゴリーは、《Personal Characteristics》とされており、いわゆる“性格”についての記述が分類される。これは、年齢とともに自己概念・self-imageにおいて“性格”が顕在化する傾向があることを示唆している。

McGuireらの“Tell Us about Yourself”テストの分析では、体系的な反応カテゴリーによる分類を行なう一方で(McGuire & Padawer-Singer, 1976)、被験者の属性と、反応の中でのその属性への言及との関係を分析している。性別についての分析では(McGuire & McGuire,

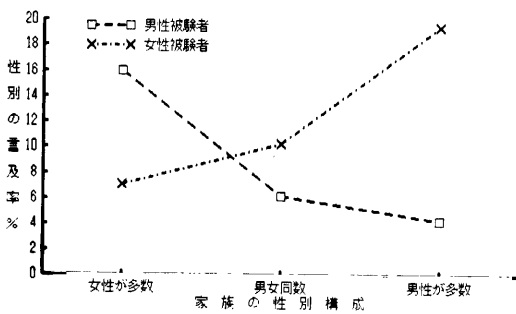


図 1-1 家族構成と性別の言及率との関係 (McGuire & McGuire, 1981)

1981; McGuire, MdGuire, & Winton, 1989), 小学校1年生から中学校3年生の560名に“Tell Us about Yourself”テストを施行し、その反応の中で自分の性別に言及しているかどうかを評定した。そして、これと被験者の家族構成との関連を調べた結果、女性が多数を占める家庭の男子は、男性が多数を占める家庭の男子よりも、性別について言及する割合が高いことと、女子ではそれと逆の傾向があることが示された(図1-1参照)。彼らの仮説は、準拠集団において、ある特徴を共有する人の数が少ないと、その特徴の顕在性が増すというもので、この結果はこの仮説を支持している。

その他の分析法としては、自由回答法で得られた反応の心理的負荷を分析するものがある。これは、被験者の自由回答法での反応を被験者自身に示し、反応の好悪や重要度などを評定させるというものである。例えば、西村・星野(1964)は、WAI技法を施行し、各反応の適合性(自分にぴったりしているかどうか)、好悪カセクシス(気に入っているかどうか)、重要性(大切かどうか)を評定させている。その結果、〈家族家庭〉のカテゴリーに分類される反応はpositiveに価値づけられることが多く、〈行動性格特性〉の反応はnegativeに評価されることが多かった。高垣(1974)は、反応の際にスラスラ出てきたもの、自分の日頃の行動に強く影響しているもの、日頃しばしば意識するものなどを、被験者のWAI反応の中から挙げさせている。その結果、〈人間〉、〈女性〉、〈学生〉、〈国籍〉、〈姓名〉、〈私は私〉の各カテゴリーに分類される反応は、「スラスラ出

てきた」と評定されることが多かった。〈私は私〉を除くとこれらのカテゴリーは、KuhnとMcPartland(1954)が反応の最初に現れると言うconsensualな言及にあたり、Kuhnらの説を別の指標を用いて支持していると言える。また、高垣(1975)は、明瞭度(どの程度ハッキリしているか)、意識度(どの程度意識するか)、中心度(自己イメージにどの程度ウエイトを置いているか)、重要度(どの程度大切であるか)、好悪度(どの程度気に入っているかあるいはいやであるか)を尋ねている。彼は、反応を「主観による評価を媒介にしない記述を内容とする反応」と「主観による評価を媒介にした記述を内容とする反応」とに分類して、後者が前者よりも、明瞭度が低く、意識度、中心度、重要度が高く、negativeな感情を帯びる傾向が強いと述べている。

自由回答法は、応用的な研究にも用いられている。臨床的な研究では、Grossack(1960)が、様々な精神病患者にWAI技法を施行し、その反応の事例を紹介している。McPartlandとCummingら(McPartland & Cumming, 1958; McPartland, Cumming, & Garretson, 1961)は、精神病院の入院患者にWAI技法を施行し、患者の病棟での行動との関連を分析した。彼らは、WAI反応を“A. Concrete”(免許証や身分証明書に書かれるような属性)、“B. Status”(社会的に定義・確認される地位についての言及)、“C. Stylistic”(“situation-free”な行動スタイルの記述)、“D. Extravagant”(あまりにも漠然としていて、その個人の行動の予測に役立たない記述)の4つのカテゴリーに分類し、さらに、各個人の反応が主にどのカテゴリーに分類されるかによって、被験者を上の4つのカテゴリーに分類した。その結果、“A”に分類される患者は行動が過少で、“D”に分類される患者は行動が過多であることを示した。また、健常者を調べた結果、その60%近くは“B”に分類され、患者は健常者に比べて、“B”に分類される者が少なく、“A”や“D”に分類される者が多かった。加藤(1964)は、肢体不自由者に対し、WAI技法を文章完成法形式に変更したものを施行している。これには、「私は……です。」という現在時制のものと、「私は……

でした。」という過去時制のものがあり、現在時制のものは、健全な中学生にも施行している。反応を Kuhn と McPartland (1954) の consensual—subconsensual な言及に分類した結果、全反応に対する consensual な反応の割合は、身障者の現在時制が 7.5%、過去時制が 2.7% であるのに対し、中学生の現在時制が 19.6% であった。彼はこの結果から、身障者の地位、役割に関する自我関与が薄いと考察している。また彼は、細かい反応内容の分類を行ない、身障者の過去時制には、〈身体の叙述〉が多く、〈特性・態度〉が少ないことも示している。

教育に関する研究では、学業成績と WAI 反応との関連を調べたものがいくつかある。例えば、Gustav (1962) は、大学生に WAI 技法を施行して、学業成績との関連を調べている。その結果、学業成績の優れた者には、学業に関する言及が多い傾向があり、しかも、それが subconsensual な言及として現れる傾向があった。しかし、この結果は明確なものではなく、彼女自身は、WAI 技法が、学生の学力を識別するのには有効でないと結論づけている。それ以外の研究でも、自由回答法の反応と学力との間に明確な関連は見出されていないが (e.g., Jones & Strowig, 1968; Mason, Adams, & Blood, 1968), このような研究では、反応の分析に用いるカテゴリーの適切さが問題となるであろう。その他の研究としては、社会階層との関連を分析したものや (e.g., McPartland, Cumming, & Garretson, 1961; Wellman, 1971), ソシオメトリーを併用して対人関係との関連を分析したもの (e.g., 松本, 1967; Zelen, 1954) もある。また、宇宙飛行士の適性を調べるのに用いられたという報告もある (Ruff & Levy, 1959)。

以上、自由回答法を用いた実証研究を見てきた。これらの研究を見ると、自由回答法の特徴が理解される。まずその 1 つは、自由回答法を用いることによって、多様な反応が得られるということである。例えば、McLaughlin (1966) や Gordon (1968) のカテゴリーを見ると、性別・年齢・氏名などの人口学的な属性、所属や役割、身体、価値・関心・好みなどの指向的な側面、自己評

価、性格など多様な反応があることがわかる。James (1892) や Allport (1955, 1962) は、自我あるいは自己が広い領域に及び、多様な側面を持つことを示唆している。そういう意味では、自由回答法は、より包括的に自我・自己を捉えるのに有効な技法となる可能性を持っていると言えるであろう。もう 1 つの特徴は、多様な分析が可能なことである。ここに挙げた多くの研究は、反応を何らかのカテゴリーで分類するというものであった。しかし、カテゴリーには研究の目的によって様々なものがあり、カテゴリーの違いによって様々な分析が可能となる。また、カテゴリー分類を行なわなくても、被験者の反応を現象学的に分析することによって、被験者の全体像を捉えることも可能である (e.g., Grossack, 1960)。特に、自由回答法の場合、反応の収集と分析が比較的独立しているため、ある被験者の反応を様々な視点から分析することができる。場合によっては、ある研究者の収集した反応を、別の研究者が全く異なる視点から分析することも可能であろう。ただし、現在のところ、分析技法が十分発達しているわけではない。従って、自由回答法が有効性を発揮できるかどうかは、今後の分析技法の発展にかかっていると言っても過言ではない。

3. 研究の目的

自我・自己に関する理論的な検討においては、自我・自己が多くの側面を持ち、広い領域にわたるものであることが示唆されている。自我・自己の領域あるいは内容については、James (1892) Allport (1961) やの理論が包括的に示していると言えるであろう。James (1892) の客我に関する理論によれば、自我・自己は、身体、所有物、家族、あるいは、国家などの物質的なもの、他者から受ける認知などの社会的なもの、意識状態、心的能力、諸傾向などの精神的なものにまで及ぶ。また、Allport (1961) のプロプリウムを見ると、身体感覚、自己同一性、自我高揚、自我拡大、自己像、合理的対処者、固有的希求などの領域が挙げられている。このような自我・自己の領域や内容は、自我・自己について考察を加えていく上で

の出発点となる。“自分”というものが具体的に何を指し示しているかを知ることによって、それらの構造や機能も分析可能となるのである。

従って、自我・自己が具体的にどのような領域や内容を持っているのかを、実証的に解明していくことが最初の課題となる。このような具体的な領域や内容の実証的な分析において、特に有効と考えられるのが、自己概念あるいは *self-image* である。これらは、自分自身を個人がどのようなものとして見ているのか、あるいは、その個人の目に写った自分の姿を指している。この2つの概念の内容は非常に類似しており、明確に区別することはむずかしいが、この2つの概念を比較すると、自己概念の方が、より抽象的で恒常的なものを指しているのに対し、*self-image* は、そのような限定が少なく、広範囲のものが含まれているようである。本稿においては、幅広く自我・自己を捉えるという立場から、*self-image* という術語を用いることにする。*self-image* とは、ひとりひとりの個人によって捉えられた自分自身の姿である。これを実証的な手続きで捉えて分析することによって、各個人にとっての“自分”がどのような領域に及ぶかが明らかになると考えられる。ところが、*self-image* によって、自己・自我のあらゆる側面を捉えられるとは言えない。それは、自我・自己のあらゆる領域が、個人によって意識化されているとは言えないからである。例えば、Freud (1933) の言う無意識過程は意識化され得ないし、Rogers (1951) も意識化されない経験があると述べている。また、自我関与の識閾が自己認知の識閾よりも低いという研究もある (Huntley, 1940; Wolff, 1932)。このように、*self-image* による実証的な研究には限界があると言わざるを得ない。従って、最終的には意識化されていないものを把握するための方法も用いて、総合的に分析を進めていく必要がある。しかし、*self-image* は個人によって認められた“自分”そのものである。それ故、*self-image* に現れたものは、すべて、自我・自己の領域に含まれるものである。しかも、自己概念や *self-image* がかなり広い範囲に及ぶことが、自由回答法を用いた実証的な研究によっても示されている (e.g., Bugental &

Zelen, 1950; Gordon, 1968; McLaughlin, 1966)。そういう意味では、*self-image* を実証的に分析することは、自我・自己の領域あるいは内容を明らかにする最初の段階において有効なものと言えるであろう。

しかも、自我の様々な領域や内容は相互に関連を持っており、何らかの構造を成していると考えられる。このような構造を捉えることも実証的な分析の課題と思われる。ところが、自我・自己の構造を問題とする場合、分析の視点の違いによって、その内容は大きく異なることがある。例えば、James (1892) は、客我の階層性について述べているが、その場合の階層性とは、上位のものご自己保存や自己追求のために、下位のものご自己保存や自己追求が断念されるという優先順位を指している。Freud (1933) は、エス、自我、超自我という3つの領域を仮定しているが、それらの間の構造を機能的な連関から説明している。Rogers (1951) も、自己の構造について述べている。それによると、自己の構造とは、“私”の特質や関係についての知覚が組織化された。流動的だが首尾一貫した概念のパターンとされている。つまり、この場合の構造は、主観的で認知的な構造を指していると言えるであろう。

以上のような構造は、個人の内部に想定される構造である。それに対し、個人の内部に想定されるのではなく、むしろ、個人をその中に位置づけるような構造もある。これは、ある要素や特徴を持つ個人が、別の特徴や要素を持つ傾向があるというような、共変関係や相関関係に基づいて想定される構造である。このような構造は主に、因子分析などの統計的な手法によって見出されることが多い。このような構造分析は、要素や特徴を何らかの“まとまり”として呈示することを可能にする。そしてこのような“まとまり”は、1人の個人の中に同時に見出され易い要素や特徴で構成される。結果として個人は、このような要素群や特徴群をどのくらい多く、あるいは、強く持つかによって、この構造の中に位置づけられることになる。このような分析の例としては、加藤と高木 (1977) のチェック・リストで得られた反応を因子分析したものや、McLaughlin (1966) の

WAI 技法の反応を因子分析したものなどが挙げられる。以上のように、自我・自己の構造を問題とする場合、その構造が意味するところは、視点の違いによって様々である。従って、自我・自己の構造を扱う場合には、その分析視点を明確にしておく必要がある。また、自我・自己の総合的な理解のためには、1つの視点から得られた構造だけでなく、様々な視点から得られた多くの構造を考慮することが必要であろう。

さらに、自我・自己に関する重要な問題として、自我・自己の機能についての分析がある。自我あるいは自己がどのような働きをしていて、それによって個人がどのような影響を受けているのかを解明することは、実証的な研究の重要な課題の1つと言えるであろう。既に、自我・自己の担っている多くの機能が指摘されている。例えば、Bellak と Sheehy (1976) は、精神分析的な視点から、自我機能の構成要因として、現実検討、判断、現実感覚、衝動統制、対象関係、思考過程、適応的退行、防衛機能、刺激障壁、自立的機能、総合統合機能、支配-有能性の12の機能を挙げている。また、実験社会心理学では、態度に関して自己概念が及ぼす影響や (e.g., Nel, Helmreich, & Aronson, 1969)、自己に関する情報の処理過程の分析も為されている (e.g., Markus, 1977)。また、既に指摘されているもの以外にも、多くの自我・自己の機能が存在し、それらは今後さらに明らかにされていくものと考えられる。ただし、自我・自己の機能を問題とする場合、その機能に関与したり対象となるものを同定しておく必要がある。そして多くの場合、その中に自我・自己の要素や内容が含まれている。例えば、Markus や Nel らの研究では、「私は～である」という自己概念あるいは self-image を事前に測定して、実験を行なっている。従って、機能の分析は、自我・自己の内容や領域の分析と平行して進められていく必要があると思われる。

このように、自我・自己に関する実証的な研究の課題は多い。われわれは、WAI 技法を用いて、自我・自己に関する探索的な実証研究に取り組んでいるが(槇田・岩熊, 1988a; 槇田・岩熊, 1988b;

槇田・岩熊, 1990)、特に自我・自己の領域や内容に注目して、個人の self-image 分析を行なっている。

われわれの第1の目的は、実証的な方法で個人の self-image を具体的に捉え、それがどのような範囲に及ぶかを把握することである。ひとりひとりの個人は、様々な self-image を持っている。そして、それはすべて、個人の“私”あるいは“自分”を表している。このような self-image を具体的に集めて分析することによって、self-image にどのようなバリエーションがあるのかが明らかになってくる。しかも、このように集められた image の全体は、自我あるいは自己の内容や領域をも反映することになる。もちろん、self-image に自我・自己のあらゆる側面が現れるというわけではないが、self-image に現れるものはすべて、自我・自己の領域に含まれるものであり、しかも、その主要な側面を反映するものと考えられる。従って、self-image を具体的に収集し、分析することは、自我・自己の理解において大きな意味を持つものと思われる。

第2の目的は、様々な self-image がどのような頻度で現れるかを分析することである。具体的に集められた self-image の中には、多くの個人に共通して現れるものもあれば、非常に稀にしか現れないものもある。このような self-image の分布を調べることによって、self-image の一般的な傾向が理解されるのである。しかも、self-image の中には、ある集団では一般的であっても、他の集団ではそうでないものもある。集団に分けて self-image の頻度を分析することによって、集団の特徴も明らかになる。特に、性別や年齢によって集団を分けることによって、self-image に現れる性差や、self-image の発達のな変化も捉えられるであろう。

第3の目的は、WAI 技法に現れる self-image 間の相関関係あるいは共変関係を分析し、それに基づき self-image の分類や被験者の分析を行なうことである。WAI 技法を用いることによって多様な self-image が得られるが、それらの中には、1人の被験者の反応の中に同時に出現しやすいものや、あるいは、1人の被験者の反応の中に

同時に現れることのあまりないものがある。このような self-image 間の相関関係を体系的に分析することによって、self-image の全体的な構造を知ることができる。この構造には、多様な self-image がそれらの間の相関関係を反映するように位置づけられ、それに基づいて self-image を分類することも可能となる。ただし、この場合の構造とは、個人内に想定される構造と言うよりも、むしろ、個人をその中に位置づけるような構造となる。と言うのも、この構造には、多くの個人の多様な self-image が含まれており、各個人の self-image は、その構造の一部分に位置づけられることになるからである。結果として、このような構造から、自我・自己の領域や範囲の問題や、self-image の個人差についても体系的な理解が進むものと思われる。

第4の目的は、self-image が個人内で相互にどのような関連を持っているかを分析することである。個人の持つ様々な self-image は、個々に独立して存在しているのではなく、相互に関連し合い、1人の個人の“私”を構成している。つまり、このような関連性から、個人の self-image の構造を捉えようというものである。この場合の構造とは、Rogers (1951) の言う自己の構造に近いもので、個人がそれぞれの self-image をどのように認知的に関連づけているかというものである。このような構造の把握は、個人のパーソナリティを理解する上でも有効なものとなるであろう。一方、個人が持つ self-image の内容は人様々であり、従って、それらから構成される構造も多様なものと考えられる。しかし、このような構造を個人間で比較することにより、多くの個人に共通する特徴が抽出できれば、self-image がどのように構造化されているかについての、一般的な理解が進むものと思われる。

そして、第5の目的は、WAI 技法をパーソナリティ診断を行なうための技法として確立することである。これは、上に挙げた目的の達成とも大きく関わっている。まず、WAI 技法によって個人の何を知り得るのかということを確認しておかなければならないが、これは、WAI 技法にどのような範囲の self-image が現れるかを知るこ

とによって、自ずと明らかになるであろう。そして、WAI 技法を用いて個人を理解しようとする場合、その個人の反応が一般的なものであるのか、それとも、特異な反応であるのかということ判断できなければならない。これは、性別や年齢も考慮した反応の一般的な傾向を把握することによって、ある程度可能になるものと思われる。しかし、このようなことだけからでは、WAI 技法をパーソナリティ診断に利用する上での十分な情報は得られない。そのためには、WAI 技法を実際に個人に施行し、それを基にパーソナリティ診断を行なうとともに、他の技法で得られた情報も含めて比較検討して、WAI 技法の特性をよく理解する必要があるだろう。

われわれは、以上のような目的に従って、自我・自己の実証的分析を進めているが、本稿では、そのうち第1の目的から第3の目的までに対応する研究成果について述べる。

最後に、この研究で用いられている WAI 技法の特徴について、若干触れておくことにする。WAI 技法では、「私は誰でしょう? (Who am I?)」という質問に被験者が自問自答して反応する。つまり、被験者は、自分自身にとっての“私”あるいは“自分”というものを考えて、それを反応することになる。このようにして得られた反応は、個人によって認識された自分の姿を指しており、まさに self-image そのものと言うことができる。従って、WAI 技法によって得られる反応は、この質問に対する回答である以上、その被験者の self-image にほかならないのである。ただし、WAI 技法によってあらゆる self-image が得られるわけではない。WAI 技法の施行時に意識化されていないものや言語化されないものは反応に現れないし、20 答という回答数を越える反応は得られない。従って、このような限界を考慮して WAI 技法を用いるべきであるが、self-image を収集する上で、WAI 技法は有効な技法の1つと言える。

WAI 技法の重要な特徴として、自由回答法を用いていることが挙げられる。つまり、この技法においては、被験者が自分自身の言葉で反応する

ことになる。従って、被験者の自由で自発的な反応が得られ、それは、個人が自分自身の言葉で表現した具体的な self-image となる。しかも、WAI 技法では「私は誰でしょう? (Who am I?)」という質問が与えられるだけなので、研究者の分析視点にあまり制約されない反応が得られることになる。ところで、このような自由で、自発的で、具体的な self-image を得られるということが、われわれの研究目的に対し、大きな有効性を持つことになる。われわれの目的の1つは、self-image の内容のバリエーションを調べることであるが、自由回答法以外の方法においては、予め研究者がそのバリエーションを制限せざるを得ない。例えば、選択肢の形で示した場合、選択肢にない反応は絶対に出現し得ない。その点、自由回答法の反応のバリエーションは、理論的には無限ということになる。もちろん、人間が答える以上、反応には共通するものや類似したものがあり、結果としては、いくつかの種類にまとめることができるであろう。そして、このようにして得られた反応の種類が、self-image のバリエーションを表すことになるのである。ただし、WAI 技法には前にも述べたような限界があるため、このバリエーションがあらゆる self-image を含むとは言えない。しかし、WAI 技法を多くの個人に施行することによって、かなり広範囲の self-image が得られるものと思われる。

さらに、WAI 技法で得られた反応に対しては、

多様な分析が可能となる。前節でも述べたように、反応を何らかの категория で分類するにしても、多様な categoria の設定の仕方があり、それ以外にも、WAI 反応の心理的負荷を分析するものや因子分析を用いるものもある。また、反応の現象学的な分析を行なっている例もある。しかも、分析手続きは、心理的負荷の分析は別として、WAI 施行時に必ずしも決まっている必要はない。反応を収集した後で、分析手続きを変更することも可能である。特に、反応 categoria による分類を行なう場合、この特性が有効性を持つ。つまり、反応に対し、複数の categoria による分類を行なうことができるのである。例えば、1人の研究者が収集したデータを、他の研究者が全く別の視点から分析することも可能となる。また、反応 categoria を分析結果に合わせて変更した場合、新たにデータを収集する必要がなく、既に集められたデータを再び用いることができる。さらに、その結果を基に再び categoria を変更することも可能となる。つまり、このようなプロセスを通じて、反応 categoria の精緻化とデータの蓄積を同時に行なっていくこともできるのである。一方、心理的負荷の分析や多変量解析を用いた分析については、まだ未開拓な部分があり、新しい分析技法の開発の余地がある。また、現象学的な分析については、WAI 技法がパーソナリティ診断に用いられることが多くなるに従って、その重要性を増していくものと思われる。

2

基準書の作成

1. 目的	21
2. WAI 技法の施行と反応の分析	22
3. 1983 年度版基準書の作成と改訂	24

1. 目的

WAI 技法は、自由回答法を用いた **self-image** 収集のための技法である。被験者は、「私は誰でしょう?」という問いを自分自身に対して行ない、それに対する回答を自分自身の言葉で記述する。そのため回答の内容は、性別や年齢などの基本的な属性、職業などの社会的な役割、対人関係、家庭、身体、能力、性格、希望、願望、態度など広範囲に及ぶ。また、回答の形式にも、文となっているもの (e.g., 「私は明るい性格です」)、節となっているもの (e.g., 「子煩悩の父親」)、単語だけのもの (e.g., 「男」) など、様々なバリエーションがある。つまり、WAI 技法には、被験者自身が捉えた“私”あるいは“自分”についての様々なイメージが、被験者自身のスタイルで表現されるのである。

問題は、このようにして得られた多様な回答をどのように分析していくかということである。例えば、臨床的な目的のために1人の個人を理解する上では、回答を読むことによって、その個人がどのような **self-image** を持っているかを理解で

きる。ところが、多数の個人に WAI 技法を施行し、そこから一般的な結論を引き出すためには、ある程度計量的に反応を分析する必要がある。もちろん、WAI 反応のような自由記述のデータを直接計量的に分析することはできない。一般的には、このような反応を計量的に分析する場合、反応カテゴリーを作成し、反応をそのカテゴリーで分類し、カテゴリーの反応頻度に基づき分析を行なうという方法がとられる。前章でも述べたように、WAI 反応のためのカテゴリーは既にいくつか作成されている。これらのカテゴリーは、分析の目的によって、作成する時の手続きも、内容も異なる。例えば、Kuhn と McPartland (1954) は、個人の社会システムとのつながりや、そこでの自己確認を分析するために、**consensual** な言及と **subconsensual** な言及とに分類している。また、最も一般的に用いられている Gordon (1968) のカテゴリーも、社会的同一性という視点から設定されている。このようなア・プリオリな分析枠組みに従って設定されたカテゴリーは、その枠組みの中での分析に対しては有効であっても、それ以外の目的に用いる場合には、意味のある結果が得られないこともある。従って、WAI

技法を用いて分析を行なう場合は、分析の目的に合った反応カテゴリーを使う必要がある。また、分析の目的に合ったカテゴリーがない時には、新たに反応カテゴリーを作成する必要がある。

前章でも述べたように、われわれ (e.g., 榎田・岩熊, 1988a; 榎田・岩熊, 1988b; 榎田・岩熊, 1990) の第1の目的は、個人の持っている self-image の具体的な内容やバリエーションを把握することである。そして、それがどのような頻度で現れるかを把握することを目的としている。ところが、既存の反応カテゴリーは、ア・プリオリな分析枠組みに基づいて設定されているため、このような目的にはあまり適していない。ア・プリオリな枠組みに従えば、必要なカテゴリーはそこから演繹的に決定され、カテゴリー数も少なくなる。ところが、このようなカテゴリーを用いて反応を分類すると、枠組みにない反応内容が無視されたり、あるいは、枠組みに合わせて反応内容が歪曲される可能性が高くなる。そこで、われわれは、ア・プリオリな分析枠組みを導入せずに、WAI 技法で得られる反応そのものから、帰納的に反応カテゴリーを作成することにした。このように反応カテゴリーを帰納的に作成すれば、カテゴリーそのものが反応のバリエーションを反映することになり、さらに、それに基づいて反応頻度を分析することによって、WAI 反応の一般的な傾向、すなわち、self-image の一般的な分布を把握することが可能となる。

われわれはこのような考察に基づき、「基準書」と呼ばれる WAI 反応の帰納的なカテゴリーを作成する試みを続けている。基準書は、1983 年度に最初の版が作成されて以来、分類上の問題や反応頻度の分析結果に基づき、数回の改訂が行なわれている。本章では、WAI 技法の施行と基準書の作成・改訂の手続きについて述べることにする。

2. WAI 技法の施行と反応の分析

[WAI 用紙]

実際に WAI 技法を施行するにあたっては、被験者の反応を得るための用紙が必要となる。そこ

で、中学生以上の被験者を対象とした「一般用 WAI 用紙」と、小学生を対象とした「小学生用 WAI 用紙」が作成された。「一般用 WAI 用紙」には、B4 版の紙が用いられ、左半分にはフェイス・シートと被験者への教示が印刷され、右半分に被験者が反応を記入するスペースが設けられている。左半分のフェイス・シートには、氏名、性別、調査日時、生年月日、年齢、現住所、未婚・既婚、職業、学歴を記入する欄があり、その下には、以下のような被験者への教示が印刷されている。

「私は誰でしょう?」(Who Am I?) という問いに対し、あなたのことについて、20 通りの異なる答えを右のページの 1 番から順に書いていってください。思いつくままに、自由に書いていってください。書き終わったら、1 から 20 までの答えを見て、特に自分らしいと思われる答えの番号を○で囲んでください。○はいくつつけてもかまいません。もし、どうしても最後 (20 番) まで答えを思いつかない場合は、思いつくところまで結構ですので、そこまでの内容で、自分らしいと思われる答えの番号を○で囲んでください。

用紙の右半分の反応を記入する欄は、20 本の野線が引かれ、各行の先頭に 1 から 20 の番号が付けられただけのものである。被験者は、これらの各行に 1 答ずつ反応を記入していき、最終的に 20 の回答を記入することになる。

「小学生用 WAI 用紙」は、一般用と同じ大きさの紙を用い、形式もフェイス・シートと教示を除いて同じになっている。小学生用のフェイス・シートの項目は、氏名、性別、調査日時、生年月日、年齢、現住所、親の職業、学校名、学年である。教示は、以下のように、一般用よりも平易なものになっている。

「私はだれでしょう?」という問いを自分にしてみてください。そして、その問いに対する、20 通りのそれぞれちがう答えを、右のページの 1 番から順番に書いていってください。思いつくままに、自由に書いていって下さい。もし、20 番ま

で答えを思いつかないときは、思いつくところまででかまいません。答えを書きおえたら、あなたがかいた答えを見て、特に自分らしいと思う答えの番号を○でかこんでください。○は、いくつつけてもかまいません。

他の用紙としては、老人を対象とした「老人用 WAI 用紙」がある。これは、字を大きくして縦書きに印刷したもので、大きさは B4 版であるが、フェイス・シートと反応の記入欄の 2 枚綴りになっている。また、フェイス・シートの記入欄を年齢と性別だけに限った「無記名 WAI 用紙」も作成した。

【被験者】

1980 年前後から組織的にデータの収集を始め、1989 年度までに 14,324 名分の有効データを収集した。被験者の性・年齢別の内訳は次章で詳述するが、被験者の年齢は 9 才（小学校 3 年）から 90 才以上にまで及んでいる。被験者の居住地域は、関東地方が中心であるが、それ以外の地域の被験者も含んでいる。学生は、小学校、中学校、高校、大学のいずれも複数校の被験者を含んでいる。社会人の場合は、会社員と主婦が中心であるが、自営業、公務員、自由業の者もいる。老人のデータは、老人クラブ等の団体に収集したものが多く含まれている。

【施行の手続き】

施行に際しては、原則として、被験者や施行状況に合わせ、上の WAI 用紙の中から適切なものを選択した。小学生の被験者（3 年生以上）に対しては小学生用を用い、それ以上の被験者に対しては一般用を用いたが、老人の一部には老人用を用いた。また、記名式の WAI 用紙では施行がむずかしい場合に限り、無記名の WAI 用紙を使用した。データの収集は、3 つの手続きのいずれかで行なわれた。その 1 つは集団施行によるものである。この手続きは、学生を対象とする場合の大部分や老人クラブ等の会合において施行する場合に用いられた。この場合に、用紙を配布し、被験者全員に対し口頭で教示を行ない、その後、被験

者からの質問を受けつけた。反応に要する時間には個人差があるため、各自が自分のペースで反応するよう数示し、特に時間制限は設けなかった。20 分から 40 分程度の時間をとって施行したが、時間内に書き終えなかった被験者については、可能な限り、自宅で記入して後日提出するよう求めた。2 つめの手続きでは、個人的に被験者に依頼して WAI への反応を求めた。その場合、用紙を手渡して口頭で教示を行ない、自宅で記入して提出するよう求めた。そして、3 つめの手続きは、大学の教員、企業の人事担当者、大学の学生・卒業生などの調査協力者に、データの収集を依頼するというものである。この場合、調査協力者は上の 2 つの手続きに従ってデータを収集した。

【反応の分類と集計分析の手続き】

WAI 技法で得られた反応は、反応カテゴリーである基準書で分類されてから、集計分析される。この分類作業においては、評価者が回答の内容を見て、等価あるいは最も内容的に近いカテゴリーのコードを各回答に割り当てていく。分類は、原則として回答単位で行なわれる。つまり、被験者の 20 の回答をそれぞれ独立に分類するのである。ただし、1 つの回答だけからでは分類ができない場合、その被験者の前後の回答を参考にして分類する。また、1 つの回答の中に、複数の内容が含まれている場合は、それぞれの内容を 1 つの反応として分類を行なう。そのため 1 人の被験者の反応数が 20 を越える場合もある。

反応の分類には、評価者として十数人程度の大学生があたる。評価者は、分類に先立ち 3 ヶ月程度のトレーニングを受けている。トレーニングでは、同一の反応を全員がそれぞれ分類し、その結果について全員で討議を行なう。このような討議を通じて、評価者全員が同一の基準で反応を分類できるようにするのである。実際の分類は、評価者が分担して行なうが、評価者が 1 人では判断できないものについては、全員で討議して判断するようにしている。

反応が基準書で分類された後、各被験者のデータは大型計算機に入力される。その際には、被験者の属性（年齢、性別、職業など）、各回答に対

する基準書のカテゴリー・コード，各回答に“自分らしさの○”が付けられていたかどうかが入力される。入力されたデータに対しては，様々な分析が行なわれるが，性・年齢別のカテゴリーの反応頻度を中心に分析が行なわれている。

3. 1983 年度版基準書の作成と改訂

われわれは，帰納的な手続きで，「基準書」と呼ばれる WAI 反応の反応カテゴリーを作成する試みを続けているが，基準書の最初の版は，1983 年に作成されている (e.g., 榎田・岩熊, 1988a)。この 1983 年度版基準書の作成には，内容分析の

手法として KJ 法 (川喜田, 1967) が用いられた。1983 年度版基準書は，全部で 1,786 のカテゴリーを持ち，これらの各カテゴリーは，「小項目」と呼ばれている。小項目は，334 の「中項目」にまとめられ，さらに，中項目は 10 の「大項目」にまとめられている。この基準書の作成に際しては，小項目が反応のバリエーションを反映するように，それぞれの小項目をなるべく厳密なカテゴリーにしてある。そのため，小項目数もかなり多いものとなっている。一方，中項目や大項目を含めた項目の配置においては，反応カテゴリーとして使う時の見やすさや使いやすさを主に考慮した。この基準書は，小項目と呼ばれるカテゴリー

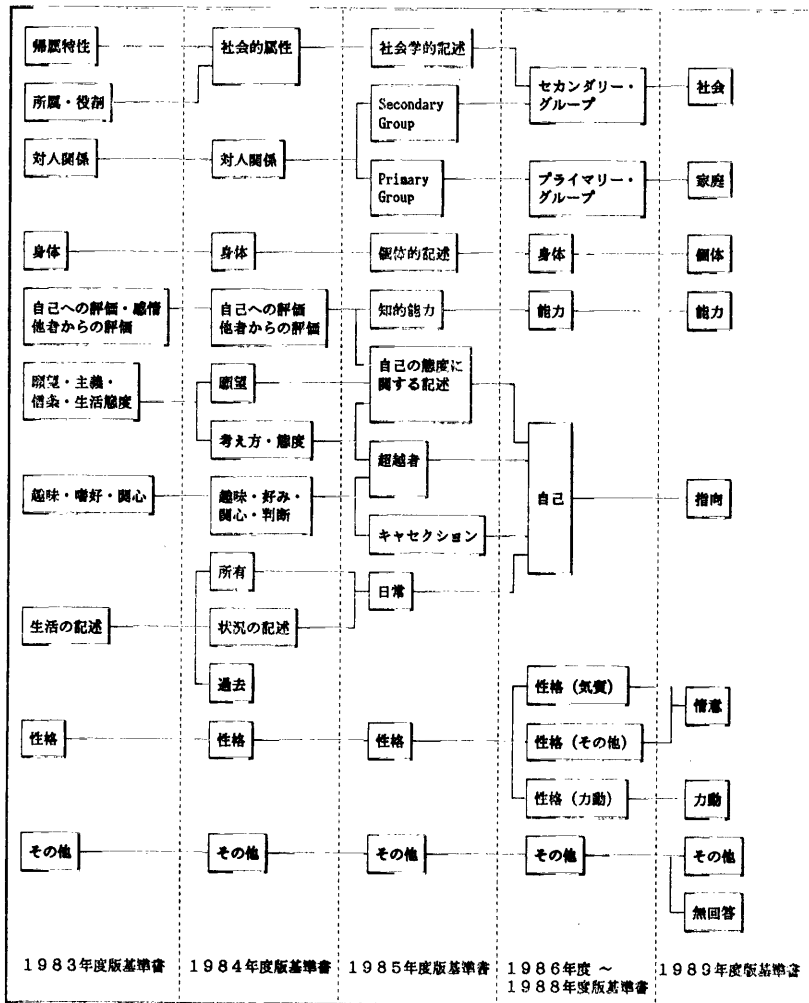


図 2-1 基準書の大項目の変遷

によって構成されている。各小項目には、そのカテゴリーを代表するような名前として「小項目名」が付けられており、そのカテゴリーに分類される具体的な反応例が「例示」として数個ずつ挙げられている。そして、分類や分析を行なうためのコードとして「小項目番号」がそれぞれに与えられている。また、意味内容の類似する小項目がまとめられた中項目には「中項目名」が付けられ、さらに類似する中項目がまとめられた大項目には「大項目名」が付けられている。

1983年度までに収集された1,123名のデータは、1983年度版基準書によって分類され、集計分析された。その結果、カテゴリーの中には反応頻度の非常に少ないものや、分類の時点で区別しにくいものがあり、また、カテゴリー数が多いために反応の分類において、多くの時間と手間を要するという問題も出てきた。そこで、反応頻度の少ないものや区別しにくいものを併合し、項目の配置にも手を加えた。1983年度版基準書にはこの

ような改良が加えられ、その結果、1984年度版基準書が作成された。この基準書を用いて、新たに収集されたものを含めてすべての反応を分類し、反応傾向の分析を行なった。データを収集する一方で、このような「基準書の改訂→反応の分類→集計→反応傾向の分析→基準書の改訂」という過程を数年間にわたって繰り返して、基準書をリファインしてきた。1983年度版から1989年度版に至る基準書の大項目の変遷を図2-1に示しておく。

1983年度から1989年度までの間に、類似した小項目の併合、中項目の廃止、楨田・佐野(1965)のパーソナリティの概要のスキームを考慮したカテゴリーの配置などの改訂を行ない、その結果として、1986年度にはかなり安定したカテゴリーが得られた(楨田・岩熊, 1988a; 楨田・岩熊, 1988b; 楨田・岩熊, 1990)。この1986年度版基準書は、その後1988年度まで、数項目の小項目に若干の変更が加えられた程度で、ほとんど同じ形で使用

表 2-1 1988年度版基準書の概要

大項目名	内 容	小項目数
1 能力	知的能力、専門的能力、对人的能力などについての記述。	8
2 性格(気質)	自分の性格についての記述のうち、気質といわれるものにほぼ相当するもの。	70
3 性格(その他)	性格(気質)、性格(力動)以外の自分の性格についての記述。	47
4 自己	自己に対する感情・評価などについての記述。 欲求、願望、希望などについての記述。 態度、キャセクションなどについての記述。 「私は私」、「私は誰」、実存的な記述。 上位概念、隠喩的な表現など。	90
5 性格(力動)	自分の性格についての記述のうち、力動的側面を表すもの。	43
6 身体	容姿・体格、健康・体質、身体機能・身体的能力についての記述。	3
7 プライマリーグループ	血縁的役割、家族、家庭についての記述。	12
8 セカンダリーグループ	名前、性別、年齢、現住所、出身地、生年月日、職業、所属団体、学歴などについての記述。 友人関係、対人関係についての記述。	28
9 その他	評価できないもの、WAIに対する批判、無効回答など。	2

された。表 2-1 の 1988 年度版基準書の概要にもあるように、この基準書では 303 の小項目が 9 つの大項目にまとめられている。なお、1988 年度版基準書は、「組織行動研究, No. 16」(槇田・岩熊)の資料として掲載されている。

1988 年度版基準書は、比較的安定性の高いカテゴリーと言える。しかし、まだ、区別の判然としないカテゴリーがあり、また、カテゴリー数も多く、使用に際してはある程度のトレーニングが必要である。そこで、1988 年度版基準書をさらに改訂し、カテゴリー数が少なく、分類がもっと容易な基準書を作成することにした。改訂の手続きの概略は、類似した小項目を併合することによって、小項目の数を減らすというものである。具体的には、1988 年度版基準書の小項目をそれぞれカードに書き抜き、それらを KJ 法で内容分析することによって、新しい基準書を構成したのである。小項目をカードに書き抜く際に、1 つの小項目の小項目名と例示は、区別を付けずに 1 枚のカードに列挙し、不適切と思われる小項目名や例示

は削除した。また、小項目番号はカードの裏側に記入し、内容分析の際に見えないようにした。これは、1988 年度版基準書の構成を示す手がかりが内容分析に影響しないようにするためである。なお、非常に反応の少ない小項目は予め分析から除外した。原則としては小項目の分割は行なわなかったが、2 つの小項目については小項目の分割を行なった (i.e., 小項目〈職場・職業〉から例示の「主婦」と「無職」をそれぞれ分離; 〈硬派・軟派〉を「硬派」と「軟派」に分割)。内容分析は、大学生 10 人の 2 つのグループが独立に行なった。1 つのグループは、1988 年度版基準書の分類トレーニングを受けた経験のあるグループで、もう 1 つは、基準書についての一切の予備知識を持たないグループである。このようにして得られた両者の結果を総合して基準書を構成し、これを 1989 年度版基準書とした。この基準書は、199 の小項目で構成されており、それらが 9 つの大項目にまとめられている。表 2-2 に、1989 年度版基準書の概要を示しておくが、詳細については巻末資料の

表 2-2 1989年度版基準書の概要

	大項目名	内 容	小項目数
1	社会	名前, 性別, 年齢, 現住所, 出身地, 生年月日 職業, 所属団体, 学歴などについての記述。 友人関係, 対人関係についての記述。	18
2	家庭	血縁的役割, 家族, 家庭についての記述。	12
3	身体	容姿・体格, 健康・体質, 身体機能・身体的能力についての記述。	3
4	能力	知的能力, 専門的能力, 対人的能力などについての記述。	10
5	情意	自分の性格についての記述のうち, 情意的側面について記述したもの。	82
6	力動	自分の性格についての記述のうち, 力動的側面について記述したもの。	32
7	指向	自己に対する感情・評価などについての記述。 欲求, 願望, 希望などについての記述。 態度, キャセクションなどについての記述。 「私は私」, 「私は誰」, 実存的な記述。 上位概念, 隠喩的な表現など。	59
8	その他	評価できないもの, WAI に対する批判, 無効回答など。	2
9	無回答	無回答。	1

「1989年度版基準書」を参照されたい。

このような手続きで作られた基準書は、分析のための応反カテゴリーであると同時に、WAI 技法によってどのような応反が得られるかを具体的に示すものでもある。つまり、基準書は、多くの個人から得られた **self-image** を具体的に列挙したリストと行うことができる。このような基準書と楨田・佐野 (1965) のパーソナリティの概要のスキームとの間には対応関係が認められ (楨田・岩熊, 1988a; 楨田・岩熊, 1988b; 楨田・岩熊, 1990), パーソナリティのほとんどすべての側面についての記述が、WAI 技法において出現し得

ることが示されている。従って、このような特性を持つ WAI 技法は、目的によっては非常に有効なものとなるであろう。ただし、1人の個人がこれらのすべての側面について言及しているというわけではない。この結果が意味しているのは、多くの個人の記述の総体がスキームのすべての側面に及ぶということである。そういう意味では、個人がどの側面に言及しているのかということが、その個人の特徴を示していることになる。そのような視点からの分析も、**self-image** あるいは自我・自己の理解にとって意味あるものとなるであろう。

3

基準書による反応頻度の分析

1. 目的	29
2. 方法	29
3. 結果と考察	31
4. まとめ	38

1. 目的

前章で述べたように、われわれは、帰納的な手続きに従って、WAI 技法の反応カテゴリーである基準書の精緻化を進めてきた。その結果、1989 年度には 199 のカテゴリーを持つ 1989 年度版基準書が完成された。本章では、この基準書を用いて実際の反応を分類し、各カテゴリーの反応頻度を分析した結果について述べる。このような分析によって、WAI 技法で得られる反応の一般的な傾向やバリエーションが明らかとなり、個人がどのような self-image を抱いているのかも把握される。また、被験者は、小学生から老人に至る男女約 14,000 名にも及ぶため、self-image の性差や生涯発達のな変化も分析可能となる。なお、巻末の資料には、「WAI 事例集」として、被験者の反応がそのまま掲載されている。ただし、「組織行動研究, No. 16」(榎田・岩熊, 1990) に、小学生から高校生までの事例が掲載されているので、本稿では、大学生から 40 代までの事例を掲載した。

2. 方法

【被験者】

1980 年前後から組織的に WAI 反応の収集が始められ、1988 年までに 7,520 名のデータが収集された。これはデータ数としては少ないものではないが、社会人以上のデータ数、特に老人のデータ数は十分なものではなかった。そこで、1989 年度には、社会人と老人に焦点を絞ってデータの収集を行なった。その結果、約 6,800 の有効データが得られた。表 3-1 は、1988 年までの有効データと 1989 年度に収集された有効データを合わせた、性・年齢別の被験者の内訳である。これを見ると、有効被験者数は 14,324 名であり、すべてのセルで 200 以上のデータがあり、小・中学生の女性と 60 代以降を除いたセルのデータ数は 500 以上ある。なお、今回の分析では、反応数が 5 未満のデータは、無効データとして扱うことにしたため、1988 年までのデータからも分析から除外されたものがある。年齢区分については、便宜的に、大学生以下の者については小学生、中学生、高校生、大学生に分け、それ以上で 70 才未満の

表 3-1 性・年齢別の被験者数

年齢	男性	女性	計
小学生	691	479	1,170
中学生	939	217	1,156
高校生	1,599	1,058	2,657
大学生	526	1,107	1,633
20～29才	1,096	1,188	2,284
30～39才	624	659	1,283
40～49才	752	1,137	1,889
50～59才	529	549	1,078
60～69才	278	297	575
70才以上	366	233	599
計	7,400	6,924	14,324

者について 10 才刻みで分類した。従って 20 代のデータに大学生のデータは含まれていない。

[反応の分類]

反応の分類には 1989 年度版基準書が用いられた。分類の手続きは、前章でも述べたように、評価者が各反応を見て、最も意味内容の近い基準書の小項目の番号を割り当てていく。分類は、原則的には回答単位で行なわれ、1つの回答の中に複数の内容が含まれている場合には、それぞれの内容を1つの反応として分類を行なう。

1989 年度に収集されたデータについては、大学生 20 人のグループと大学院レベルの 9 人のグループが、WAI 反応の分類にあたった。50 代までのデータについては大学生、60 代以上のデータについては大学院レベルの者が分類した。評価者は、分類に先立ち約 1 ヶ月間のトレーニングを行なった。トレーニングでは、同一の反応をグループ全員がそれぞれ分類し、その結果についてグループで討議を行なう。このような討議を通じて、評価者全員が同一の基準で反応を分類できるようにした。実際の分類は、評価者が分担して行なったが、評価者が 1 人では判断できないものについては、グループで討議して判断するようにした。

一方、1988 年度までに収集されたデータは、既に 1988 年度版基準書で分類され、大型計算機に入力されている。これらのデータについては、大型計算機上で 1989 年度版基準書の小項目番号

に変換した。1988 年度版から 1989 年度版への改訂は、原則として小項目の併合なので、古い小項目番号を対応する新しい小項目番号に変換するだけでよい。ただし、分割された小項目については、評価者による再分類、またはフェイス・シートの情報等を使って大型計算機上で再分類を行なった。また、反応が少ないため削除された小項目については、最も意味の近い小項目に便宜的に併合した。その他に、今回の分析では、小項目〈757 隠喩的な表現〉の反応を〈802 無効回答〉に併合している。〈757 隠喩的な表現〉に対応する 1988 年度版基準書の小項目〈自己規定〉には、隠喩的な表現をとっている拒否的な反応が多く分類されていた。ところが、1989 年度版では、拒否的なものは〈802 無効回答〉として分類している。そこで、1988 年度以前のデータと 1989 年度のデータの対応をとるために、集計分析の際に両者を便宜的に併合した。そのため、分析結果では、〈757 隠喩的な表現〉に分類された反応は、すべて〈802 無効回答〉として集計されている。従って、〈802 無効回答〉はこの分析においては、無効回答だけではなく、隠喩的な表現をとった自己記述を含んでいることになる。

[集計分析]

1989 年度版基準書は、199 の小項目が 9 つの大項目にまとめられたものである。従って、分析単位は、大項目と小項目の 2 種類が考えられる。大項目単位の分析は、反応の全体的傾向をつかむのに適しているが、細かい応反のニュアンスを読み取りにくい。一方、小項目単位の分析は、大項目より細かいニュアンスを読み取ることが可能であるが、199 という項目数のため、全体像が捉えにくい。このように 2 つの集計方法は、長所と短所を合わせ持っているため、この 2 種類の分析方法を併用することにする。また、反応頻度の指標としても 2 つのものが考えられる。1 つは、各カテゴリーの被験者 1 人あたりの平均応反数である。もう 1 つは、言及率と呼ばれるもので、各カテゴリーの反応を少なくとも 1 反応以上している被験者のパーセンテージを算出するものである。平均反応数は、1 人の被験者がそのカテゴリーの反応

表 3-2 大項目の平均反応数

年齢	N	社会	家庭	個体	能力	情意	力勤	指向	その他	無回答
小学生	691	4.224	0.674	2.096	0.557	0.777	0.538	7.107	1.003	3.182
	479	4.263	0.814	1.722	0.382	1.000	0.612	6.827	0.885	3.582
	1,170	4.240	0.773	1.943	0.485	0.868	0.588	6.962	0.898	3.326
中学生	939	3.821	0.554	1.951	0.483	1.590	1.110	7.386	1.514	1.994
	217	3.521	0.654	1.594	0.415	1.705	1.323	7.696	1.813	1.835
	1,156	3.785	0.573	1.884	0.471	1.812	1.150	7.444	1.533	1.983
高校生	1,599	4.108	0.618	1.200	0.425	1.632	1.295	6.213	1.888	2.983
	1,058	3.705	0.892	1.454	0.278	2.240	1.948	7.665	1.042	1.320
	2,657	3.947	0.727	1.301	0.365	1.874	1.555	6.791	1.539	2.321
大学生	528	3.958	0.578	0.981	0.359	3.097	2.013	6.888	1.148	1.586
	1,107	3.978	0.935	1.255	0.269	3.808	2.584	6.657	0.341	1.042
	1,633	3.972	0.819	1.187	0.298	3.579	2.388	6.731	0.601	1.217
20代	1,096	3.383	0.672	1.390	0.273	3.053	1.881	6.529	0.789	2.588
	1,188	2.741	1.062	1.503	0.269	3.501	2.475	6.210	0.639	2.280
	2,284	3.049	0.875	1.448	0.271	3.286	2.180	6.363	0.711	2.428
30代	624	3.654	1.798	1.274	0.314	3.385	1.879	7.059	0.514	1.657
	659	2.715	2.683	1.247	0.328	3.202	1.718	6.408	0.422	2.202
	1,283	3.171	2.253	1.280	0.320	3.291	1.699	6.725	0.487	1.837
40代	752	3.583	1.972	1.311	0.338	3.396	1.404	6.477	0.390	2.073
	1,137	2.347	2.777	1.257	0.343	3.670	1.444	6.449	0.345	2.450
	1,889	2.843	2.457	1.278	0.340	3.581	1.428	6.481	0.363	2.300
50代	529	3.764	1.981	1.110	0.331	3.281	1.450	7.040	0.352	2.040
	549	2.499	2.925	1.133	0.302	3.506	1.217	7.348	0.539	1.978
	1,078	3.120	2.462	1.122	0.316	3.386	1.331	7.196	0.447	2.008
60代	278	2.881	1.651	1.025	0.335	3.007	1.128	6.457	0.194	2.898
	297	2.330	2.761	1.034	0.290	2.704	1.054	6.088	0.414	3.010
	575	2.587	2.224	1.030	0.311	2.850	1.089	6.296	0.308	2.955
70才以上	396	2.699	1.227	0.801	0.248	2.238	0.713	7.833	0.120	5.381
	233	2.335	2.658	0.871	0.118	1.588	0.425	6.313	0.064	5.227
	599	2.558	1.861	0.828	0.195	1.985	0.601	6.020	0.110	5.309
全体	7,400	3.733	1.024	1.378	0.380	2.386	1.355	6.862	1.009	2.559
	6,924	3.098	1.710	1.338	0.299	3.029	1.773	6.893	0.803	2.141
	14,324	3.428	1.355	1.358	0.341	2.697	1.557	6.877	0.813	2.357

※各セルの上段は男性、中段は女性、下段は全体を示す。

を数反応以上している場合は意味ある数値となるが、そうでない場合には、言及率の方が理解し易い数値となる。そこで、大項目を分析単位とする場合には、平均反応数と言及率を分析指標とし、小項目単位の分析では言及率を分析指標として用いることにする。

3. 結果と考察

[大項目単位の分析]

1989年度版基準書の小項目は、9つの大項目に分けられている。表3-2は、各大項目の平均反応数を性・年齢別に示したものである。そして、表3-3は、各大項目の言及率を性・年齢別に示したものである。まず、大項目《社会》から見ていくことにしよう。この大項目には、名前や性別などの個人の基本的な属性や学校、会社、友人関係な

社会関係についての記述が分類される。この大項目の平均反応数は被験者全体で約3.4で、《社会》は《指向》に次いで反応の多い大項目となっている。言及率も、全体で85.4%とかなり高い数値となっている。年齢による違いを見ると、平均反応数は、小学生で最も多く、70才以上で最も少ない。全体的に、年齢を追うごとに反応数が減る傾向があるが、男性では、50代と60代の間で大きく減少しており、女性は大学生と20代の間で大きく減少している。言及率を見ても同じ様な傾向が認められる。このような変化は、男性における退職や職業生活からの引退、女性の結婚など、社会的な位置づけの変化を反映していると言えるであろう。また、小学生と大学生を除いて、女性よりも男性の方が反応数が多く、特に、30代から50代の間はその差が大きい。これも、男女の社会参加の仕方の違いを反映していると

表 3-3 大項目の言及率 (%)

年齢	N	社会	家庭	個体	能力	情意	力動	指向	その他	無回答
小学生	891	91.9	39.2	75.5	37.5	39.2	28.8	96.0	31.3	44.9
	479	92.5	49.3	72.2	28.0	51.8	36.1	97.1	22.3	48.0
	1,170	92.1	43.3	74.2	33.6	44.3	31.8	96.2	27.6	48.2
中学生	939	85.5	33.4	71.8	32.1	60.1	47.2	98.1	38.3	37.0
	217	86.6	41.9	68.4	31.8	62.7	58.2	98.2	27.2	30.9
	1,158	85.7	35.0	70.8	32.0	60.6	48.9	98.1	36.2	35.8
高校生	1,599	88.2	35.1	52.3	31.0	57.4	50.0	96.7	44.7	43.2
	1,058	90.0	47.8	60.8	22.1	72.4	64.0	98.9	33.5	24.2
	2,857	88.9	40.2	55.7	27.4	63.4	55.6	97.6	40.2	35.6
大学生	528	88.0	32.9	50.8	27.0	78.1	65.8	98.1	37.3	22.1
	1,107	89.0	58.0	58.4	22.0	85.6	78.2	97.2	14.1	17.2
	1,833	88.7	48.6	58.0	23.6	83.2	72.9	97.5	21.6	18.7
20代	1,098	84.3	37.6	60.6	21.9	77.6	65.8	97.3	25.9	37.3
	1,188	77.5	50.8	59.0	21.2	80.1	69.9	96.0	19.4	34.8
	2,284	80.8	44.5	59.8	21.5	78.9	67.9	96.8	22.5	35.9
30代	624	87.0	69.9	58.2	24.5	79.0	61.2	97.6	19.6	25.5
	859	82.7	78.1	53.7	24.9	79.1	64.0	95.1	14.7	32.2
	1,283	84.8	74.1	55.9	24.7	79.0	62.7	96.3	17.1	28.9
40代	752	87.8	75.1	58.4	24.3	78.7	60.1	96.9	13.0	31.8
	1,137	80.9	81.3	55.9	24.9	82.1	58.6	95.0	11.5	37.8
	1,889	83.6	78.8	57.3	24.7	80.7	59.2	95.8	12.1	35.4
50代	529	88.7	71.3	52.8	25.0	73.5	53.7	96.6	13.6	33.1
	549	80.0	80.3	54.6	22.4	83.2	54.1	96.4	14.4	33.2
	1,078	84.2	75.9	53.8	23.7	78.5	53.9	96.5	14.0	33.1
60代	278	78.4	61.5	48.6	24.8	73.4	47.1	98.2	9.0	44.6
	297	78.1	73.4	55.9	21.2	69.4	45.5	98.3	9.4	44.8
	575	78.3	67.7	52.3	23.0	71.3	46.3	98.3	9.2	44.7
70才以上	368	78.4	50.8	45.1	16.1	57.9	34.4	97.3	5.2	64.8
	233	81.1	74.7	51.1	10.7	54.1	23.8	98.7	3.0	64.8
	589	79.5	60.1	47.4	14.0	56.4	30.2	97.8	4.3	64.8
全体	7,400	88.7	46.8	58.8	27.5	66.3	52.5	97.4	28.5	37.9
	6,924	84.0	62.5	58.6	23.0	76.4	61.0	96.8	18.0	32.7
	14,324	85.4	54.4	58.7	25.3	71.2	56.6	97.1	23.4	35.4

※各セルの上段は男性、中段は女性、下段は全体を示す。

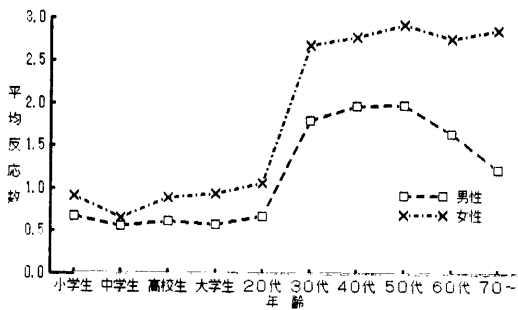


図 3-1 《家庭》の平均反応数

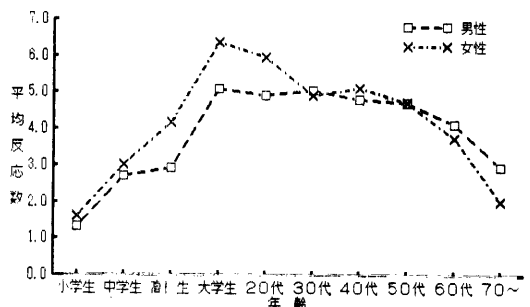


図 3-2 《情意》+《力動》の平均反応数

えるであろう。

《家庭》には、「父」、「長男」、「主婦」などの家庭内の役割や、家族の他の構成員についての記述、そして家族や家庭全般についての記述などが分類される。全体の平均反応数は、約1.4と少ないが、性別や年齢による差は大きい。そこで、

《家庭》の平均反応数を性・年齢別にグラフ化してみると、図3-1のようになる。これを見ると、すべての年齢層で男性よりも女性の方が反応数が多く、30代以降その差が大きくなっている。30代から50代にかけては家庭を持ち、子供の養育にあたる時期である。この時期は、家庭において

子供の養育にあたる女性も多く、おそらく、そのような人々の関心は、社会的なものよりも家庭や子供に向けられていると考えられる。言及率を見てもこの年齢層の女性の約 80% が《家庭》の反応をしている。一方、同じ年齢層の男性は、女性よりは少ないもの、他の年齢層の男性に比べて平均反応数が多くなっている。これは、男性にとっても、自分が築き、維持すべきものとしての家庭が重要な意味を持っていることを反映したものと考えられる。しかし、男性の場合、それと同時に社会的な活動が最も活発な時期に当たり、社会的な関心が女性よりも高い一方で、家庭への関心は女性よりも低くなったものと思われる。60 代以降では、女性の平均反応数はほとんど減少していないが、男性では減少している。これは、女性にとって、子供の養育が終っても、家族や家庭が大きな意味を持ち続けるのに対し、男性にとっての家族・家庭の重要性に変化があることを示唆している。

《個体》には、身体に関する記述全般が分類される。平均反応数を見ると、年齢を追うごとに減少する傾向があり、特に、70 才以上では、1 反応にも満たない。性差については、30 代以上はほとんど差がないのに対し、20 代以下では差が大きくなっている。ただし、小・中学生では男子の反応数が多く、高校生から 20 代にかけては女性の方が多い。これは、身体に対する意識が、発達とともに変化し、そこには大きな性差があることを示唆している。おそらく、男子の場合、小・中学生の時期に、身体の大きさや身体的な能力に強い関心を持つのに対し、女性の場合、高校生から 20 代にかけて自分の容姿に強い関心を示すことが反映されているものと思われる。

《能力》は、平均反応数が最も少ない大項目で、いずれの性・年齢集団でも 1 反応に満たない。そこで言及率を見ると、小学生から高校生までの男性が 30% 代であるほかは 30% 未満で、70 才以上では 10% 代になっている。このように自分の能力が self-image にあまり現れないのは、日本の文化・習慣によるところが大きいように思われる。第 1 章でも触れた、Montemayor と Eisen (1977) が WAI 技法を用いてアメリカの

10 才から 18 才までの被験者を分析した結果では、《能力》と対応する「能力の感覚 (Sense of competence)」で、36% から 48% の言及率がある (表 1-4 参照)。アメリカのような能力主義の文化では、個人は自己の能力を強く意識することになる。これは、文化の違いが、そこで生まれ育った個人の self-image に影響を与えるということを示す例と言えるであろう。

《情意》と《力動》は、いわゆる性格についての記述が分類される大項目である。《情意》には、気質などの比較的固定的な性格記述が分類され、《力動》にはヒステリー傾向や神経質などの力動的なものが分類される。図 3-2 は、両者の平均反応数を加算して、性格に関する反応の数と性・年齢との関係を示したものである。これを見ると、小学生から大学生までは平均反応数が増加している。これは、発達に伴って、自分の性格に対する関心が高まり、それが self-image の中に反映されることを示している。それに対し 50 代以降では減少傾向が認められ、自分の性格に対する関心が加齢とともに減少することを示している。また、性差については、高校生から 20 代にかけて、男性よりも女性の方が、平均反応数が多くなっている。この 2 つの大項目を別々に見ると、両者の平均反応数はともに、年齢を追って増加し、その後減少するという逆 U 字型の曲線を描いている。しかし、《情意》と《力動》の間には発達のズレも認められる。《情意》は大学生から 50 代まで比較的安定して推移している。この期間においては、言及率も 80% 付近で比較的安定している。それに対し、《力動》の平均反応数は、大学生でピークに達し、20 代以降減少傾向を示している。大学生という時期は、Erikson (1959) の言う自我同一性 (ego identity) の確立の時期にもあたる。従って、不安定性を示す性格記述が多く含まれる《力動》の反応が多いことも理解できる。一方、社会生活を遂行する上では、自分の性格をある程度把握する必要があり、その際の性格把握は、《情意》に含まれるような比較的恒常的な性格記述となるのであろう。

《指向》は、最も平均反応数の多い大項目で、全体での平均は約 6.9 となっている。また、この

大項目に分類される反応は全反応の 37% にあたる。この大項目には個人の指向的な側面についての記述、例えば、欲求・願望・希望、好みや態度、キャセクション、自己評価など、多様な反応が分類される。実際、《指向》には 59 もの小項目があり、最も小項目数の多い大項目でもある。また、《指向》の言及率を見ると、いずれの性・年齢集団でも 95% 以上の言及率があり、ほぼすべての被験者が指向的側面に言及していることを示している。これは、指向的側面が、ほとんどの被験者の self-image の中で顕在的であり、しかも、量的にも self-image の大きな部分を構成していることを示していると言えるであろう。

《その他》には、〈801 WAI に関する記述〉と〈802 無効回答〉の 2 つの小項目がある。前にも述べた通り、〈802 無効回答〉には、分析の都合上、〈757 隠喩的な表現〉が併合されている。しかし、全体的には、この大項目に「私は誰でしょう?」という問いに対して不適切な反応が分類されると言える。平均反応数を見ると、大学生以下で多く、20 代以降は比較的少ない。また、言及率も、30 代以上では 20% 以下となっている。

大項目《無回答》には〈901 無回答〉という小項目があるだけで、しかも、このカテゴリーに分類されるのは、20 の回答のうち、全く書かれていない回答、もしくは、不完全で意味を成さない回答である。従って、20 から《無回答》の数を引いたものが、その被験者の回答数ということになる。これを見ると、70 才以上、小学生、60 代に《無回答》が多く、70 才以上では、平均して 5 以上もある。つまり、70 才以上の者の回答数は平均して 14~15 答ということになる。それに対し、《無回答》が少ないのは、大学生と高校生の女子、大学生と 30 代の男子である。この結果は、低年齢と高年齢という両端で回答数が少なく、20 代を除いて、中間にあたる年齢層で回答数が多いということを示している。回答数は施行状況などの様々な外的な要因にも影響されるが、自分自身をどのくらい多面的に捉えられるか、あるいは、self-image がどの程度分化しているかを示す指標とも考えられる。そう考えれば、発達に伴って分化が進むが、老年期を迎えると、self-image

の広がりが見失われていくと見ることもできる。

[小項目単位の分析]

1989 年度版基準書には 199 の小項目がある。ここでは、すべての小項目について言及することはできないので、言及率の高かった項目を中心に述べることにする。表 3-4 は、被験者を性と年齢で分けた 10 の集団のいずれかで、20% 以上の言及率があった 48 の小項目の言及率を性・年齢別に示したものである。この表では、言及率を数字ではなく、言及率 10% につき 1 つのアスタリスクで示してある。例えば、小学生男子の〈101 名前〉の言及率には 4 つのアスタリスクが示されており、言及率が 40% 以上 50% 未満であることがわかる。また、小項目名の前にある数字は小項目番号を示しており、その最初の 1 桁は大項目の番号と対応している。〈名前〉の例で言えば、小項目番号が“101”で、大項目は 1 番目の《社会》ということになる。

〈101 名前〉から〈116 友人〉までは、大項目《社会》の小項目である。この中で特に言及率が高いのは、大学生以下の男女の〈109 学校〉と 20 代以上の男性の〈111 職場・職業〉である。学生の〈学校〉の言及率は、すべて 60% 以上（高校生男子は 71.6%）である。一方、〈職場・職業〉の 30 代から 50 代男性の言及率は 70% 代であり、同じ世代の女性より 30% 程度高い。学生にとっての学校や成人の男性にとっての職業は社会生活の中心であり、self-image において社会生活が重要な意味を持つことを示している。〈101 名前〉は、小学生では男女ともに 40% 代の言及率があり、中学生から大学生にかけては大きく変動している。しかし、20 代以降は下降傾向があり、40 代以上では 10% 未満になってなる。このような下降傾向は、〈103 性別〉や〈108 人種・国籍〉にも見られる。特に、〈人種・国籍〉は、図 3-3 にも見られるように、明確な下降傾向を示している。これらの小項目は、個人の社会的あるいは生物学的な基礎を示す基本的な属性である。この結果は、発達にともなって、このような基本的な属性が self-image の中で顕在性を失っていくことを示唆している。また、〈性別〉は、中学生と

表 3-4 小項目の言及率（性×年齢のいずれかの集団で 20% 以上の言及率のあったもの）

小項目名	小学生	中学生	高校生	大学生	20代	30代	40代	50代	60代	70以上
101 名前	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
103 性別	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
104 年齢・世代	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
105 生年月日	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
106 住所	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
107 出身	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
108 人種・国籍	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
109 学校	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
110 クラブ・サークル	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
111 職場・職業	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
113 所属団体	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
114 経歴	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
118 友人	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
201 家庭内の役割	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
205 兄弟姉妹	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
206 子供	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
207 配偶者	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
209 孫	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
211 家族・家庭	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
301 容姿・体格	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
302 健康・体質	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
303 身体的能力	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
503 明るい	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
511 お人好し	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
532 まじめ・誠実	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
601 自己中心的	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
606 短気	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
618 心配性	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
706 健康に対する意識	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
711 老後の希望	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
712 老いに対する意識	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
713 現在の欲求	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
716 私は幸せ	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
729 生活目標・心掛け	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
731 日課・習慣	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
732 生活状態	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
738 社会指向	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
739 審美指向	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
740 飲食への指向	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
741 スポーツへの指向	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
742 旅行への指向	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
744 勉強・学問への指向	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
747 趣味	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
748 好み	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
756 人間	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
758 その他（指向）	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
801 WAIに関する記述	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女
802 無効回答	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女	男 女

※アスタリスク1つが言及率10%を示す。各セルの上段は男性、下段は女性を示す。

60 才以上を除いて、女性の言及率の方が高く、女性の方が自分の性別を意識していることも示されている。

〈201 家庭内の役割〉から〈211 家族・家庭〉までは、大項目《家庭》の小項目である。〈家庭内の役割〉には、「父である」というような家庭内での自分の役割や位置づけなどが分類され、「一人っ子」、「主婦」などの反応もここに分類さ

れる。言及率は、70 才以上の男性を除いて、すべての集団で 20% 以上の言及率があるが、特に、30 代から 50 代にかけて高くなっている。また、女性の言及率は、すべての年齢層で男性を上回っている。これは、大項目の分析でも触れたように、子供の養育にあたっている時期の個人、特に女性にとっての家庭の重要性を示唆していると言えるであろう。実際、自分の子供についての反応

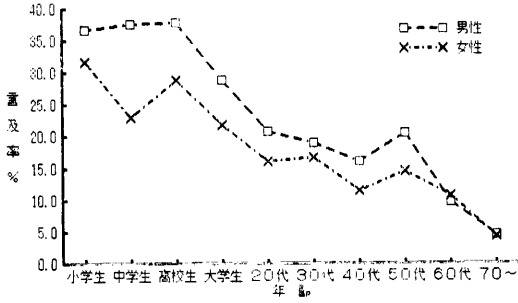


図 3-3 <108 人種・国籍>の言及率

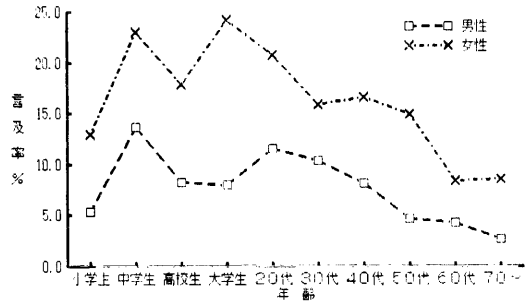


図 3-7 <503 明るい>の言及率

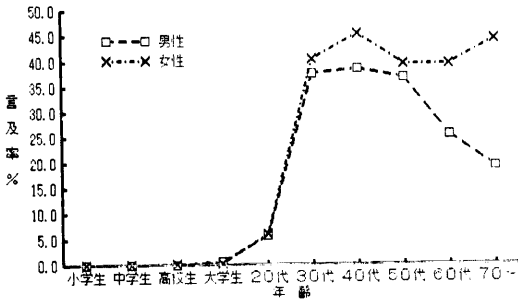


図 3-4 <206 子供>の言及率

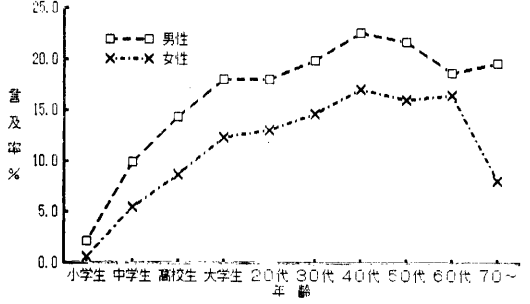


図 3-8 <532 まじめ・誠実>の言及率

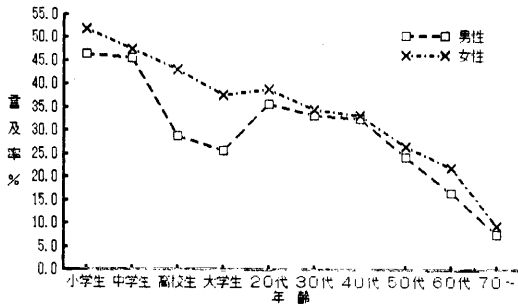


図 3-5 <301 容姿・体格>の言及率

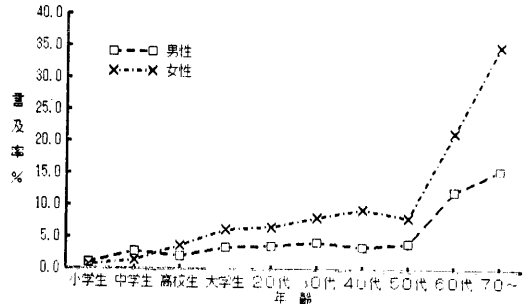


図 3-9 <716 私は幸せ>の言及率

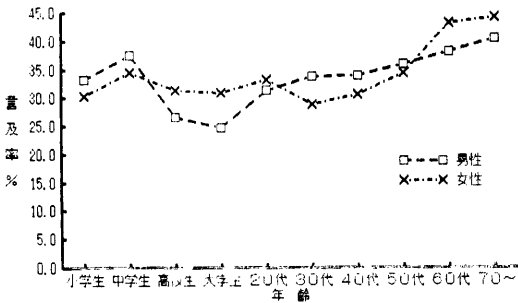


図 3-6 <302 健康・体質>の言及率

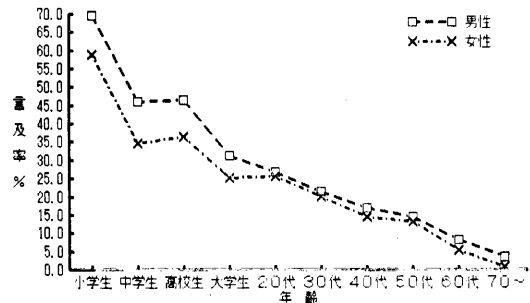


図 3-10 <756 人間>の言及率

が分類される〈206 子供〉の言及率の変化を見ると、この年齢層で高くなっている(図 3-4 参照)。20 代以下では、〈家庭内の役割〉の他に〈205 兄弟姉妹〉に若干言及があるものの、それ以外はほとんど言及されていない。60代以上では、女性が〈子供〉、〈207 配偶者〉、〈209 孫〉にかなり言及しているのに対し、男性の言及率はそれに比べて低くなっている。このように、年齢や性別によって、家族の捉え方や家族関係の意味づけが異なることも示されている。

大項目《個体》には、〈301 容姿・体格〉、〈302 健康・体質〉、〈302 身体的能力〉の3つの小項目がある。この3項目はいずれも比較的言及率が高い。ところが、〈容姿・体格〉(図 3-5 参照)と〈身体的能力〉は年齢とともに言及率が下がっているのに対し、〈健康・体質〉は高くなる傾向がある(図 3-6 参照)。〈容姿・体格〉と〈身体的能力〉の下降は、これらの項目が先にも述べた社会・生物学的な基礎にあたることも関連しているように思われる。〈健康・体質〉の上昇については、加齢に伴う疾病や身体的な衰えが、これらを self-image の中で顕在化させる要因になっているとも考えられる。

大項目《能力》、《情意》、《力動》の小項目は、全般的に言及率が低い。能力では、言及率が性・年齢別のいずれかの集団において 20% 以上の小項目はなかった。これは、大項目の分析でも述べた日本の文化・習慣の現れと見るべきであろう。《情意》と《力動》については、大項目単位で分析すると反応が少ないわけではないので、反応が多く的小項目に分散していると考えべきであろう。それでも、《情意》の〈503 明るい〉、〈511 お人好し〉、〈532 まじめ・誠実〉と、《力動》の〈601 自己中心的〉、〈606 短気〉、〈618 心配性〉では、ある程度の言及率が認められた。これら6項目は、小学生での言及率が 10% 未満で高齢者の言及率も低い。これは、性格を self-image の中に組み込むのには、ある程度の年齢的な成熟が必要であるし、一方、高齢になると性格は self-image の中で顕在性を失ってしまうものであることを示唆している。各項目の内容に注目すると、《情意》の3項目は、どちらかという

と肯定的なニュアンスのあるカテゴリーであり、また、《力動》の3項目は、否定的なニュアンスのあるカテゴリーではあるものの、社会的に許容され易いものと言える。そういう意味では、“社会的望ましき (social desirability)” が反映されているとも考えられる。例えば、〈明るい〉は、男性よりも女性に望まれる性格と言えるが、図 3-7 を見ると、女性の言及率が男性よりも高いことが示されている。また、社会人の男性に求められる性格である〈まじめ・誠実〉を見ると(図 3-8)、いずれの年齢層でも男性の方が高く、しかも、働きの30代から50代にかけて、高い言及率を示している。これは、社会的な役割や期待が self-image にも反映されること示しているとも言えるであろう。

〈706 健康に対する意識〉から〈758 その他(指向)〉までは大項目《指向》の小項目である。これらを見ると高齢者でのみ高頻度の言及の見られる項目がいくつかある。それは、〈706 健康に対する意識〉、〈711 老後の希望〉、〈712 老いに対する意識〉、〈716 私は幸せ〉(図 3-9 参照)、〈736 社会指向〉で、これらは40代以下では言及率が低くなっている。ここから高齢者の self-image の特徴がうかがえる。1つは、老いや身体に対する意識が顕在化していることで、これには、身体的な衰えや退職や引退に伴う社会関係の変化などが強く関係していると考えられる。もう1つは、自分や社会に対する肯定的な態度が見られるということである。例えば、〈社会指向〉は、社会に対する関心や、社会のために役立ちたいという意識の現れた反応が分類され、高齢者の反応ではボランティア活動についての記述が多く分類されている。もちろん、高齢者にも自分や社会に対する否定的な感情や態度を持つ者もいるであろうが、self-image の中に肯定的態度を持つ者が他の年齢層に比べて多い。このような傾向については、他の研究でも類似した結果が得られている(e.g., Moore, 1975; Riley & Foner, 1968; 下仲・村瀬, 1976)。

《指向》には興味・関心、趣味や好みについての反応が分類される項目が多い。多くの場合はその対象によって項目が分類されているが、適切な

項目のない反応は〈747 趣味〉や〈748 好み〉に分類される。〈趣味〉は30代以上では30%から40%の言及率があるが、大学生以下では30%未満になっている。それに対し、〈好み〉は年少の方が言及率が高いという傾向がある。おそらく、これは、好みという個人の中であまり組織化されていない指向の形態が、発達に伴って趣味という組織的な活動に変化するためではないかと考えられる。性差については、〈好み〉と、美術、音楽、文学なども含めた美一般に対する指向が分類される〈739 審美指向〉の言及率が高く、成人男性では〈740 飲食への指向〉と〈741 スポーツへの指向〉が高くなっている。〈飲食への指向〉には、飲酒や喫煙も含まれていることを考えると、これらの結果は男女の一般的な指向の違いを反映していると言えるであろう。

〈756 人間〉は「人間」、「地球人」、「生物」などの反応が分類される小項目で、これも〈103 性別〉や〈108 人種・国籍〉のような生物学的基礎についての項目と言える。これの言及率の年齢的な変化を図にしたものが図3-10である。これを見ると、他の生物学的基礎についての小項目にも見られるような発達・加齢による言及率の下降が明確に現れている。

最後に〈802 無効回答〉についても触れておく。今回の分析では、〈757 隠喩的な表現〉の反応を〈無効回答〉に併合している。そのため〈無効回答〉の言及率が高くなっている。特に、高校生は高く、男子では言及率が30%を越えている。これは、WAI 施行の際の外的な要因が影響している可能性も強いが、その一方で、この年齢は、自己に対する意識が特に強い時期であり、そのような自己意識が施行時の被験者の態度に影響を及ぼしているとも考えられる。

4. まとめ

本章では、WAI 技法で得られた小学生から老人までの約14,000名の反応を、1989年度版基準書を用いて分析した結果について述べた。前章でも述べたように、基準書は、WAI 反応の内容分析を通じて帰納的に作成された反応カテゴリーで

ある。分析においては、基準書の大項目を分析単位とするものと、小項目を分析単位とするものの2種類が行なわれた。大項目単位の分析は、被験者の反応の全体的傾向をつかむのに適しているが、細かい反応のニュアンスを読み取りにくい。一方、小項目単位の分析は、大項目より細かいニュアンスを読み取ることが可能であるが、199という項目数のため、全体像が捉えにくい。このように2つの集計方法は、長所と短所を合わせ持っているが、その両者を行なうことによって、WAI 反応あるいは self-image のいくつかの特徴がつかめた。

まず、WAI には個人にとって重要なもの、あるいは、重要な事柄があらわれる傾向があるということである。反応数や言及率の分析で得られた結果には、ある意味で、一般的な常識からも当然と考えられるものが多い。例えば、自分の家庭を築き自分の子供を育てている世代において、家族や家庭に関する記述や子供に関する記述が多いという結果もそれにあたる。しかし、一般的な常識は、家庭を築いたものが家庭や自分の子供に対し、強い愛情あるいは関心を示すことを当然としているからこそ、このような予測を生み出すのである。つまりこれは、WAI の反応が個人の自我関与と密接に関連していることを示唆している。もちろんすべての反応が、このような重要性を持つとは言えないが、各個人の20の回答を総合的に分析することにより、個人の自我・自己を理解する際の重要な手がかりを得ることができるであろう。

もう1つの特徴は、WAI 反応に、指向的側面、デモグラフィックな属性、社会関係についての記述が多いということである。これを上の重要性の問題と結び付けて考えれば、このような側面や属性が、self-image において、特に重要で、中心的なものである可能性が高いということになる。指向的側面は、心理学的には要求、動機づけ、態度、キャセクションなどを含んでいる。これは、個人の心が何に向いているのか、あるいは、個人が何に生きているのかをあらわす側面と言うこともできる。動機づけや要求などを個人が内的に経過する際、それらは非常に生き生きとした感覚を

伴う。おそらく、個人はそれらの感覚を“自分自身のもの”として強く感じるであろう。とすれば、そのような感覚が比較的頻繁に経験されることにより、self-imageに反映されることも当然の帰結と考えられる。また、自我・自己に対する社会・文化の影響は、多くの研究者の指摘するところである。デモグラフィックな属性や社会関係が、WAI 反応に多く現れるということは、このような見解を裏付けするものと言えるであろう。

また、self-imageの発達のな変化についても、いくつかの特徴を捉えることができた。まず、児童期から成年期に至る発達においては、個人の社会的あるいは生物学的基礎がself-imageの中で顕在性を失っていき、その一方で性格が顕在化してくるという特徴がある。これは、名前、人種、国籍、容姿、体格、人間などについての言及が発達とともに減少する一方で、性格についての言及が増えることに現れている。前者は、明確で曖昧さの少ない属性であり、個人が先天的に付与されたり、親から与えられたりするものである。ある意味では絶対的で、個人が受け入れざるを得ないものである。このような属性は、self-imageの形成期において、その基底構造を成すものと考えられる。一方、性格は曖昧な属性であり、自分の性格の把握には、自己に対する洞察や他者との相互関係を理解する能力が必要となる。また、社会生活を円滑に営むには、自分がどのような性格なのか、あるいは、自分にどのような行動傾向があるのかを、self-imageの中に組み込んでおくことが必要となる。つまり、self-imageにおける性格の顕在化は、精神的な発達によるものだけでなく、社会的な要請によるところも大きいと

言えるであろう。成人期の特徴の1つは、職業と家庭がself-imageの中で重要な位置を占めているということである。これは、この年齢層の多くの個人が、職業生活や家庭生活にほとんどの時間を費やしているということからも十分理解できる。しかしそれだけでなく、職業や家庭というのが個人に、何に生きているのか、あるいは、誰のために生きているのかという存在理由を提供しているためと言えるであろう。今回の分析では、老年期にself-imageの広がりが見られなくなっていくという特徴が見られた。これは、反応数が少ないことに現れており、WAI技法の施行上の問題が影響している可能性もある。その一方で、自己や社会に対する肯定的な態度が現れている。これは、好意的に見れば、自己実現(self-actualization)の達成や、Erikson (1959) が人生で最終的に達成すべきものとしている「自我の完全性(ego integrity)」の現れと見ることもできるであろう。あるいは、控え目な言い方をすれば、自分の人生を肯定したい、安心立命を得たいということの現れとも考えられる。

本章では反応頻度の分析に終始したが、WAI反応に対しては、より多様な分析が行なわれるべきであろう。例えば、回答の出現順位(反応が何番目の回答に現れているか)の分析は、self-imageの特徴を理解するのに役立つものと思われる。また、単なる頻度分析では、WAIに反応した個人というものが十分に浮かび上がってこない。個人をもっと深く分析するために、反応間の関連を分析したり、あるいは、他の技法のデータも含めて、個人を総合的に分析することも考えられる。

4

WAI 反応の反応パターンの分析

1. 目的と方法の概略	41
2. 小学生から高校生までを対象とした反応パターンの分析	43
3. 小学生から老人までを対象とした反応パターンの分析	48
4. まとめ	61

1. 目的と方法の概略

第2章と第3章では、WAI 技法の反応内容に焦点をあてた分析について述べた。その結果を見ると、WAI 技法によって得られる反応は、名前や性別などの基本的な属性、社会関係、家族や家庭、身体、能力、性格、欲求や態度などの指向的なものなどの広い範囲に及び、個人のパーソナリティのあらゆる側面についての記述が得られることが確認された。これは、self-image が多様性に富み、広範囲にわたるものであることを示している。また、それと同時に、WAI 技法が、このような多様な self-image を収集するのに有効な技法であることを示している。第3章で示されたような頻度分析では、多くの個人に共通する self-image の特徴を示すことにも成功していると言えるであろう。その一方で、このような頻度分析では、個人という単位は重視されず、主に個々の反応を単位として分析が行なわれている。そのため、このような分析からは、個々人の全体像は十分に捉えきれない。つまり、個人の反応は、反応ごとにばらばらにされてしまい、1人の個人の反

応としての全体性が分析されないのである。そこで本章では、WAI 技法で得られた反応の反応パターンを分析することによって、個人の self-image を包括的に捉え、そこから、個人の self-image の一般的な特徴を抽出する試みについて述べることにする。

ところで、WAI 技法で得られる反応には、個人のどのような特徴が現れているのであろうか。言うまでもなく、それぞれの反応には個人の様々な self-image が示されている。言い換えれば、これは個人の self-image の具体的な内容と言うこともできるであろう。もちろん、WAI 技法によって得られた反応に、個人のすべての self-image が現れるわけではないが、WAI 技法の 20 の回答には、個人にとって顕在的で、おそらく重要性の高い self-image が現れる。このようなそれぞれの self-image によって個人を特徴づけるとすれば、「男性である」という self-image が顕在的である者とか、「まじめな性格である」という self-image が顕在的である者として、個人を捉えることもできる。ところが、個人の持つ多くの self-image は、すべて1人の人間の self-image である。従って、その個人をより包括的に捉える

とすれば、「男性である」という self-image と「まじめな性格である」という self-image を合わせて持っている者として、個人を見るべきであろう。つまり、WAI 技法に現れる多様な self-image をすべて合わせ持つ1人の“私”として、個人を捉える必要がある。

そこで有効と考えられるのが、個人の反応パターンを分析する方法である。反応パターンとは、各個人の全体的な反応が、どのような反応の組合せによって構成されているかを表したものである。これを分析することによって、個人の反応のまとめ方や、反応間の相関関係あるいは共変関係が捉えられる。これを WAI 反応の分析に適用し、個人の WAI 反応がどのような self-image によって構成されているかを分析すれば、個人の WAI 反応の全体的な特徴が捉えられる。反応パターンの分析は、林の数量化Ⅲ類を用いることによって体系的に行なうことが可能となる。数量化Ⅲ類の結果、それぞれ反応は個人差を反映するような複数の次元の上に位置づけられる。例えば、2つの反応が、1人の個人の反応の中に共に含まれる傾向が強ければ、両者はこのような次元の上で近くに位置づけられ、次元の両端には、1人の個人の反応の中に同時に現われることの少ない反応が位置づけられることになる。つまり、このような次元で構成される空間は、個々人の反応のまとめ方を反映したものとなる。

一方、それぞれの個人は、どのような反応をしているかによって、このような空間の中の1つの点に位置づけられることになる。数量化Ⅲ類による分析が非常にうまくいった場合、1人の個人のすべての反応は空間の一部分に集まり、その個人もそこに位置づけられることになる。そのような場合、その位置に基づいて個人を比較することによって、個人差を体系的に捉えることも可能となる。例えば、年齢や性別によって、個人の位置づけがどう異なるかを分析することもできる。ところが、実際には、個人の反応パターンは複雑であり、数量化Ⅲ類によって完全に説明できるとは限らない。そのような場合、各個人の反応は、空間内の一部分に集中せず、ある程度の広がりを持って点在することになる。そして、その広がり自体

が、個人の self-image の多様性を反映していることになる。このような場合、個人を空間内の1点に集約して分析するだけでは不十分であり、このような広がりやを反映するような分析が必要となる。そこで考えられるのが、空間内での反応の位置に基づいて反応カテゴリーを作成し、個人の反応がどのようなカテゴリーに分類されるかを分析する方法である。このような反応カテゴリーにおいては、ある個人の反応パターンが比較的単純ならば、その個人のすべての反応はいずれか1つのカテゴリーに分類され、一方、反応が複雑で多様性を持っていれば、複数のカテゴリーに分類されることになるであろう。このように、数量化Ⅲ類の結果に基づいて反応カテゴリーを設定し、それを用いて個人を分析すれば、個人の反応の多様性も含めた個人差を体系的に捉えることが可能となるであろう。

WAI 反応の反応パターンを数量化Ⅲ類で分析することによって、個々人の反応を位置づけることのできる複数の次元が得られる。そして結果的には、このような次元で構成される self-image の空間が得られる。この空間は、ある意味で self-image の構造と言ってもよい。ところが、前にも述べたように、自我・自己などに関して構造を問題とする場合には、分析の視点によって多様な構造が考えられるため、どのような構造を指しているのかを明確にしておく必要がある。ここで得られる self-image の構造は、多くの個人から得られた個々の WAI 反応を構成要素とすることになる。つまり、この構造は WAI 技法で得られるあらゆる self-image を含んでいるのである。WAI 技法で得られる self-image そのものに制限はあるものの、この構造には、主要な self-image のほとんどが含まれると考えられる。この構造の性格を明らかにする上で重要なのは、各々の self-image がどのような関係に基づいて、この構造の中に位置づけられるかということである。おおまかに言えば、類似したものが近くに位置づけられ、類似していないものが遠くに位置づけられることになる。ただし、この時の類似性は、基準書の作成のように分析者が意味内容を見て判断するものではなく、反応パターンの類似性に基づくも

のである。つまり、1人の被験者の反応の中に同時に現れることの多い self-image 同士が、近くに位置づけられることになる。結果として、1人の個人の self-image としてのまとまり方がこの構造に反映される。

このような構造は、self-image を理解する上で有効なものとなる。まず、ここには主要な self-image のほとんどが位置づけられる。そのため、この構造は self-image の全体的な領域あるいは範囲を示すことになる。しかも、この構造は全体を説明する次元を持っているため、全体像を理解し易い。self-image の範囲や領域を捉えることは、自我・自己の領域を考える上でも、非常に参考になるものと思われる。また、この構造には反応だけでなく、個人も位置づけられる。従って、この構造から self-image の個人差を一般的に理解することができる。この場合、個人差は数量化Ⅲ類で得られた次元に従って考えることもできるし、あるいは、この構造における個人の反応の範囲の違いとして考えることも可能であろう。いずれにしても、このような構造の中で個人を比較することができるようになれば、集団も同じように比較可能となる。例えば、性差や年齢による違いの分析は、self-image あるいは自我・自己の一般的な理解にも役立つであろう。

self-image の発達には、自我・自己の理解においても特に重要な意味を持つが、これに関してはいくつもの仮説が考えられる。その1つとして、self-image が発達に伴い抽象化、あるいは、内面化するという仮説が考えられる。Montemayor と Eisen (1977) は、self-image が具体的なもの (e.g., 住所, 容姿, 所有物, 遊び) から抽象的なもの (e.g., 個人的な信念, 動機, 対人的な性格) へと変化していくという報告をしている。この結果は、発達に伴い self-image が内面的になることを示しているようにも見える。第3章でも触れた反応頻度の分析でも、性格についての self-image が小学生から大学生にかけて増加するという結果が得られている。これらの結果では、個々の反応カテゴリーの頻度分析の結果を総合して、このような結論を得ているわけだが、数量化Ⅲ類で得られる構造に基づいて分析を行えば、

発達に伴うこのような変化をより包括的に理解できるであろう。もう1つの重要な仮説は、self-image が発達とともに分化していくというものである。多くの研究者は、自我、自己、パーソナリティなどが発達に伴って分化するものと考えている (e.g., Freud, 1933; Lewin, 1935)。おそらく self-image も同じように、発達に伴い分化し、多様な内容を含むようになると考えられる。反応の多様性を分析することによって、このような発達過程も明らかになるものと思われる。この2つの仮説は、成人に至るまでの発達についてのものであるが、自我・自己は生涯を通じて変化し続けるものであり、成人期以降、self-image にも様々な変化があるものと考えられる。小学生から老人に至るまでの WAI 反応の反応パターンの分析を行なうことにより、これらについても有益な知見が得られるものと思われるが、その前に、小学生から高校生までを対象とした反応パターンの分析結果について簡単に触れておく。

2. 小学生から高校生までを対象とした反応パターンの分析

われわれは、子供から老人までを対象とした分析に先立ち、小学生から高校生までを対象とする分析を行なった (岩熊・榎田, 1991)。この分析の目的は、実際に WAI 反応の反応パターンの分析によって、self-image の及ぶ範囲を構造として示すことが可能なかを確かめること、分析技法を検討すること、self-image の発達のな変化を捉えることである。

[方法]

分析の対象となったのは、1987年度までに収集された小学生から高校生までの WAI 反応である。被験者の内訳は、小学生 1,191 名 (男子 708 名, 女子 483 名) 中学生 1,154 名 (男子 943 名, 女子 211 名), 高校生 2,603 名 (男子 1,589 名, 女子 1,014 名) の計 4,948 名 (男子 3,240 名, 女子 1,708 名) である。小学生については、3年生以上の者に限っている。被験者は特に組織的なサンプリングによって選ばれた者ではないが、公

立校と私立校を含む複数校の在学者を含んでいる。また被験者の居住地域は、関東近郊が主であるが、その他の地域も若干含んでいる。WAI 技法の施行に際しては、一般用 WAI 用紙および小学生用 WAI 用紙を使用し、主に教室において集団施行で行なわれたが、用紙を持ち帰って自宅で施行した被験者もいる。

得られた WAI 反応は、1987 年度版基準書（楨田・岩熊，1988b）を使用してコード化された。基準書は、前にも述べたように、WAI 反応の KJ 法による内容分析の結果に基づいて構成されたものである。1987 年度版基準書は、「小項目」と呼ばれる 303 のカテゴリーを持っており、さらに小項目は、その意味上の類似に基づいて 9 つの「大項目」にまとめられている。この構成は、1988 年度版基準書においてもほとんど変更が加えられていないので、表 2-1 の 1988 年度版基準書の概要を参照されたい。具体的な分類の手続きは、第 2 章、第 3 章で示されたものと同様で、1 つの回答を 1 つの反応と見なし、各反応に最もよく当てはまる小項目のコードを与えていく。ただし、1 つの回答が複数の内容を持つ場合には、回答を分割し、それぞれを 1 つの反応として分類を行なった。そのために 1 人の被験者の反応数が 20 を超える場合もあった。反応の分類は、大学生 15 人が分担して行なった。評価者は、反応の分類に先

立ち約 3 ヶ月間のトレーニングを行ない、全員が共通の基準で反応を分類できるようにした。また、評価者が 1 人で判断できなかった反応については、15 人の評価者全員で討議して分類するようにした。

分類された反応をもとに、林の数量化Ⅲ類を用いて、被験者の反応パターンの分析を行なった。この手続きによって、個人内でのカテゴリー間の関連の強さを体系的に捉えることができ、被験者の個人差を反映するような次元を発見することができる。数量化Ⅲ類では、被験者が各小項目に分類される反応を 1 回以上しているか否かをダミー変数 (1/0) の形で表現して分析を行なった。また、数量化Ⅲ類では、反応の極度に少ないカテゴリーに極端なカテゴリー・ウェイトが与えられる傾向があり、これを避けるために分析の対象とする反応カテゴリーと被験者に制限を加えた。分析対象としたカテゴリーは、基準書の 303 の小項目のうち、全反応で反応頻度が 50 以上あった 172 項目とした。なお、全反応の 97% がこの 172 項目に分類されている。分析対象者は、この 172 項目のうち少なくとも 5 項目に対する反応のあった 4,767 名とした。

数量化Ⅲ類で得られたカテゴリー・ウェイトに基づいて、小項目の分類を行なった。これは、数量化Ⅲ類で得られた 172 の小項目の構造を包括的

表 4-1 数量化Ⅲ類で高いカテゴリー・ウェイトを得た正負各 10 の小項目

I 軸			II 軸			III 軸		
コード	小項目名	Weight	コード	小項目名	Weight	コード	小項目名	Weight
5380	まわりを気にする	2.983	4952	私は誰	3.203	4030	自分を変えたい	4.782
3410	責任感がある	2.852	4951	私は私	2.745	4050	非現実的願望	4.504
5030	プライドが高い	2.823	4953	実存的記述	2.488	4060	能力に対する願望	4.150
5350	物事にこだわる	2.782	4270	自分に自信がある	2.116	4020	成就欲求	3.924
3440	消極的(積極性に欠ける)	2.733	3360	欲張り・欲深い	2.115	4080	容姿・体格に対する願望	3.889
2300	そう露	2.705	8030	人種	2.094	4710	政治	3.857
5140	主体性がない	2.597	2850	冷たい・冷めている	1.986	4910	生命に関する記述	3.831
5040	負けず嫌い	2.512	4280	自分に自信がない	1.938	4130	その他の将来への希望	3.287
2250	物事にこだわらない	2.498	4910	生命に関する記述	1.929	4010	成長欲求	3.182
5390	あがりやすい・緊張しやすい	2.436	5010	見栄張り	1.901	4930	神に関する記述	3.139
8210	学歴	-1.243	4810	その他の趣味	-1.456	2060	にぎやか・騒がしい	-1.581
4953	実存的記述	-1.254	4060	能力に対する願望	-1.473	2260	おどぎつぱ	-1.658
8080	生年月日	-1.202	4080	容姿・体格に対する願望	-1.528	4210	ニックネーム	-1.668
7080	祖父母に関する記述	-1.202	4770	飲食	-1.572	2200	調子にのりやすい	-1.775
8010	名前	-1.315	4100	就職への希望	-1.620	5390	あがりやすい・緊張しやすい	-1.794
7100	その他の親族に関する記述	-1.449	7050	兄弟に関する記述	-1.622	3410	責任感がある	-1.883
8100	世代Ⅱ(いつ生まれたか)	-1.462	7030	父親に関する記述	-1.626	3050	おとなしい	-1.987
4951	私は私	-1.467	1040	専門的能力がない	-1.850	3340	忘れっぽい	-1.998
8090	世代Ⅰ(年齢)	-1.546	4110	結婚への希望	-1.857	2540	几帳面	-2.056
8030	人種	-2.041	7040	母親に関する記述	-1.928	3440	消極的(積極性に欠ける)	-2.558

に把握するためと、この分類結果に基づいて被験者の分析を行なうためである。分類には、非階層クラスター分析 (SAS FASTCLUS) を用いた。そして、この結果得られたクラスターを新たな反応カテゴリーとして、被験者の反応の分析を行なった。サンプル・スコアを用いた分析を行なわなかったのは、数量化Ⅲ類の分析に含められなかつ

た被験者の扱いが複雑になるという理由と、被験者の反応の多様性を分析することが目的に含まれているという理由のためである。

[結果と考察]

172 の小項目を数量化Ⅲ類で分析した結果、固有値の大きい 3 つの軸をその後の分析に用いるこ

表 4-2 非階層クラスター分析による小項目の分類結果

クラスター A		
1010 頭が良い	4810 その他の趣味	8010 名前
1020 頭が悪い	4820 好み	8020 性別
1030 専門的能力がある	4850 勉強	8030 人種
1040 専門的能力がない	4951 私は私	8040 国籍
1070 一般的能力がある	4953 実存的記述	8050 出身地
2050 明るい・明朗・陽気	4954 上位概念・機能部分	8060 住所
2230 活発	4955 自己規定	8070 年齢
3120 エッチ	8010 身体に関する記述 (容姿・体格)	8080 生年月日
4190 生活習慣 (生活態度)	8020 身体に関する記述 (健康・体質)	8090 世代 I (年齢)
4200 生活状態	8030 身体機能・身体的能力	8100 世代 II (いつ生まれたか)
4210 ニックネーム	7010 血縁的役割	8110 資格・免許がある
4490 平凡	7020 両親に関する記述	8140 生活形態
4590 身だしなみ・おしゃれ	7030 父親に関する記述	8160 所属団体・学内サークル
4730 審美	7040 母親に関する記述	8180 所属団体・その他
4740 宗教	7050 兄弟に関する記述	8200 学校に関する記述
4770 飲食	7080 祖父母に関する記述	8210 学歴
4780 スポーツ	7100 その他の親族に関する記述	8220 職場・職業に関する記述
4800 ギャンブル	7110 家族・家庭に関する記述	8250 友人に関する記述

クラスター B		
1080 一般的能力がない	2720 内向的	4320 経済観念がない
2040 気さく	2730 孤独が好き	4370 硬派・軟派
2060 にぎやか・賑がしい	2780 怒り者・面倒くさがり屋	4450 正義派
2070 おしゃべり	2800 非行動的	4510 態度がハッキリしている
2080 ユーモアがある	2850 冷たい・冷めている	5010 見栄張り
2090 協調性がある・同調的	2890 口数が少ない	5030 プライドが高い
2130 優しい・思いやりがある	2900 思考的	5040 負けず嫌い
2140 世話好き	3010 短気である	5070 自己顕示欲が強い
2150 権にもろい・同情しやすい	3040 口下手	5110 子供っぽい
2180 お人好し・人が良い	3050 おとなしい	5120 甘えんぼう
2170 寂しがりや	3070 根暗	5140 主体性がない
2180 おつちよこちよい・そそっかしい	3080 好奇心旺盛	5160 ロマンチスト
2200 脚子にのりやすい	3110 個性的	5170 気分屋
2210 飽きっぽい	3140 気が強い	5180 好き嫌いが激しい
2240 行動的	3160 好戦的・攻撃的	5210 自分勝手
2250 物事にこだわらない	3170 意地悪	5230 感情が激しい
2260 おおざっぱ	3220 素直	5310 神経質
2270 楽観的	3230 あまのじゃく	5320 くよくよ悩む
2280 のんき	3240 うそつき・ほらふき	5330 心配性
2300 そう賢	3310 主体性がある	5350 物事にこだわる
2470 忍耐力がある・忍耐強い	3340 忘れっぽい	5380 まわりを気にする
2480 強情・頑固	3350 けち	5370 気が弱い・気が小さい
2500 義理心・一途	3380 欲張り・欲深い	5380 恥しがり屋
2510 努力家	3410 責任感がある	5390 あがりやすい・緊張しやすい
2530 まじめ	3420 責任感がない	5420 優柔不断
2540 几帳面	3440 消極的 (積極性に欠ける)	5430 根気がない・諦めが早い
2570 きれい好き	3490 その他	5550 多重人格
2590 のろい	4280 自分に自信がない	8280 人間関係に関する記述

クラスター C		
4010 成長欲求	4180 現在の欲求・希望	4830 好きな異性・嫌いな異性のタイプ
4020 成就欲求	4220 自己評価と他者評価の食い違い	4840 好きな人・嫌いな人のタイプ
4030 自分を褒めたい	4230 自分は幸せだ	4910 生命に関する記述
4050 非現実的願望	4250 自分に満足している	4920 運命 (運) に関する記述
4060 能力に対する願望	4280 自分に不満	4930 神に関する記述
4080 容姿・体格に対する願望	4270 自分に自信がある	4940 超自然に関する記述
4090 進学への希望	4580 心がけ	4952 私は誰
4100 就職への希望	4710 政治	4959 その他
4110 結婚への希望	4720 経済	5530 アンビバレンス
4130 その他の将来への希望	4760 社会	8260 恋人・恋愛に関する記述
4140 将来の手廻	4790 旅行	9060 その他
4150 今の精神状態		

表 4-3 基準書の大項目とクラスターとの対応関係

No. 大項目名	クラスター			計
	A	B	C	
1 能力	5	1	-	6
2 性格 (気質)	2	34	-	36
3 性格 (その他)	1	20	-	21
4 自己	17	5	31	53
5 性格 (力動)	-	23	1	24
6 身体	3	-	-	3
7 Primary Group	8	-	-	8
8 Secondary Group	18	1	1	20
9 その他	-	-	1	1
計	54	84	34	172

*表の数字は、該当する小項目の数を示す。

とにした。固有値は、I軸が .319, II軸が .220, III軸が .168 であった。各軸で高いカテゴリー・ウェイトを得た、正負のそれぞれ 10 の小項目を表 4-1 に示す。得られたカテゴリー・ウェイトから各軸の解釈を行なった結果、I軸は“性格-デモグラフィックな属性の軸”, II軸は“自己に対する意識の軸”, III軸は“欲求・希望・願望の軸”と判断した。

数量化Ⅲ類で得られた3つの軸のカテゴリー・ウェイトに基づいて、非階層クラスター分析 (SAS FASTCLUS) による 172 の小項目の分類を行なった。その結果、表 4-2 のようなクラスター A, B, C の3つのクラスターが得られた。クラスター A は、自分の能力、日常生活、趣味、身体、家族、デモグラフィックな属性についての項目で構成されており、クラスター B は、ほとんどすべて性格を記述したものである。また、クラスター C は、願望、希望、欲求についての項目、個人の指向性についての項目、自己評価に関する項目を含んでいる。基準書において小項目は、意味の類似性に基づいて9つの大項目にまとめられている。そこで、3つのクラスターと9つの大項目との対応関係を見ると (表 4-3 参照)、クラスター A は、《能力》、《身体》、《Primary Group》、《Secondary Group》のほとんどの小項目と、《自己》の中の日常生活に関する項目を含んでいる。つまり、このクラスターは、個人の生物学的な基礎と、文化的あるいは社会的な基礎を広く包含していることになる。そこで、これを“社会・生

物的基礎のクラスター”と包括的に呼ぶことにした。クラスター B は、性格を記述した項目のほとんどすべてを含んでおり、“性格のクラスター”と言えるであろう。クラスター C は、大項目《自己》に集中している。《自己》はかなり広い範囲の小項目を含んでいるが、クラスター C には《自己》の中の日常生活に関するものは含まれていない。小項目の内容から見て、このクラスターは、“欲求と自己評価のクラスター”と考えることができる。

被験者の全反応を3つのクラスターに分類して、各クラスターの反応傾向を調べた結果、全反応の74%がクラスター A、13%がクラスター B、10%がクラスター C であった。そして残りの3%は、今回分析に使われなかった。《無回答》を除く130の小項目の反応であった。これは、クラスター A の反応が非常に一般的であるのに対し、クラスター B と C の反応は比較的少ないことを示している。つまり、WAI に現れる反応は、被験者の生物学的、社会的基礎についての記述が一般的であり、性格や欲求・自己評価はそれに比べると少ないということである。次に、被験者を小学生、中学生、高校生の3つの年齢層と性別で分けて、各クラスターの反応傾向の違いを調べることにした。ここでは、それぞれの被験者が WAI 反応において各クラスターに言及しているか否かという点に注目して、各クラスターに言及している被験者が、各集団でどの程度いるのかを調べた。その結果、いずれの集団においても100%近くの被験者が、クラスター A に言及している。一方、クラスター B と C の言及率は30%から80%の間で、クラスター A に比べれば低い。これらに言及する被験者が必ずしも稀ではないことを示している。また、クラスター B と C では性・年齢による違いも認められる。この2つのクラスターに言及する者は、年齢が上がるに従って多くなる傾向を示している。また、小学生のクラスター C を除いて、女子の方が男子よりもクラスター B や C に言及する割合が高くなっている。これは、性格、自己評価、欲求などが、発達に伴って、self-image の中で顕在的になる傾向があり、しかも、このような発達において女子が男子に先行するこ

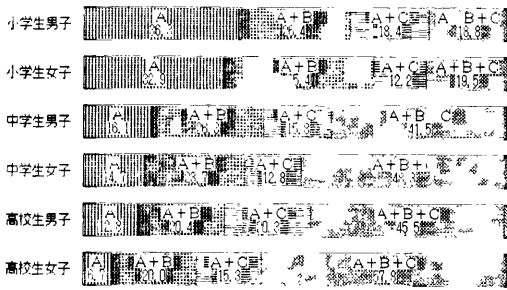


図 4-1 クラスターの組合せによる被験者の分類結果

とを示唆している。

最後に、各被験者の反応がどのようなクラスターの組合せで構成されているかを分析した。その結果、クラスターの組合せから、被験者を主に4つのグループに分類できることがわかった。その4つのグループとは、クラスターAだけに言及している者、クラスターAとBに言及している者、クラスターAとCに言及している者、そして、3つのクラスターすべてに言及している者である。図 4-1 は、年齢と性別で分けた6つの集団ごとに、このようなクラスターの組合せによって被験者を分類した時の被験者の内訳である。これを見ると、年齢が上がるに従って、クラスターAだけに言及する者は減少し、クラスターA, B, Cのすべてに言及する者が増加している。そして、この変化は小学生と中学生との間で大きい。これは、1人の個人の self-image が、発達とともに多様性を増し、より複雑なものになっていくことを示している。そして、おそらく初期の self-image は、個人の生物学的・社会的な基礎に基づいたもので、性格、欲求、自己評価などのより内面的な self-image は、遅れて現れてくるものと考えられる。

これらの結果から次のようなことが考えられる。この分析で得られた3つのクラスターは、項目の反応パターンの類似に基づいたもので、意味の類似に基づいて分類されたものではないが、明らかに意味的なまとまりを成している。これは、個々の被験者の反応全体に、何らかの意味的なまとまりがあることを示唆している。また、クラスターは、槇田・佐野 (1965) のパーソナリティ・

スキームとも明確な対応関係を持っている。このスキームは、パーソナリティというものを包括的に見た場合、能力的、情意的、指向的、力動的、個体的、家庭的、社会的に分けて考えることができるとしており、個人を広く総合的に捉える場合の枠組みとして有効なものである。社会・生物学的基礎のクラスターには、能力的、個体的、家庭的、社会的が対応し、性格のクラスターには、情意的と力動的が対応する。そして、欲求と自己評価のクラスターは指向的と対応する。これは、self-image が、パーソナリティの多くの側面に及ぶことを示しており、self-image を、個人の自分自身に対する主観的なパーソナリティ観と考えられることを示唆している。そして、その個人差は、個人の注目するパーソナリティの側面の違いとして現れる。つまり、self-image においては、パーソナリティの各側面が必ずしも均等に扱われるのではなく、その扱い方には強弱があり、そこに個人の特徴が現れるものと考えられる。

クラスターと年齢との関係を見ると、年齢が低くなるにつれ、クラスターAの反応だけをする者の割合が多くなっており、self-image の発達の初期の段階において中心となるものは、デモグラフィックな属性をはじめとした個人の社会・生物学的基礎についてのものだということが示唆されている。また、性格や欲求・自己評価などの内面的あるいは抽象的な self-image は、社会・生物学的基礎より遅れて顕在化している。これは、発達に伴い self-image が内面化あるいは抽象化することを示しており、Montemayer と Eisen (1977) の結果とも共通点を持っている。一方、年齢が上がるに従って、self-image 全体が複雑になるということも示されている。3つのクラスターすべてに言及する被験者は年齢とともに増加しており、クラスターAだけに言及する被験者は減少している。自我、自己、パーソナリティなども発達過程において分化するという考え方があり、この結果は、このような分化を self-image が反映しているとも解釈できる。またそれと同時に、self-image の分化は、自分の様々な側面を知覚し、概念化あるいは言語化する認知的な能力の発達にも裏付けられていると言えるであろう。

分析技法については、WAI 反応の反応パターンを分析する際に、この分析で用いられた手続きが有効性を持つことが示された。しかし、すべての被験者と反応カテゴリーを分析の対象としないことや、サンプル・スコアに基づく分析が行なわれていない点などの問題点もある。これらの問題点は、分析対象となる被験者を増やし、反応カテゴリーを改訂することによって、解決されるものと思われる。

3. 小学生から老人までを対象とした反応パターンの分析

われわれは、さらに大学生や社会人も含めて、小学生から老人までの WAI 反応の反応パターンの分析を行なった。この分析の第1の目的は、より一般的で包括的な self-image の構造を捉えることである。ここで目標とする self-image の構造とは、可能な限り多様な self-image を構成要素とし、しかも、それに基づき多様な個人を比較分析できるような包括的な構造を指している。WAI 反応の反応パターンを数量化Ⅲ類で分析することによって得られる構造は、分析の対象となる被験者のほとんどすべての WAI 反応を構成要素とし、しかも、個人差を反映する次元によって構成される。小学生から老人までの多数の被験者から得られる WAI 反応は、WAI 技法で得られる self-image としては最大限に近い多様性を持つと言えるであろう。このように多様な個人の反応パターンの分析によって得られる構造は、多様な個人の反応のまとめり方を反映すると同時に、多様な個人を比較分析することも可能にする。

第2の目的は、self-image の生涯発達のな変化を捉えることである。個人の生涯には、学校の入学・卒業、就職、結婚、子供の誕生、退職などの様々な節目がある。個人がそのような節目を通過するごとに、self-image にも様々な変化が起ころう。また、このような節目以外にも日々の経験が self-image に影響を与え、自己評価が変化したり、自分の性格についての新たな認識が生まれたりする。生涯を通しての self-image の変化を一般的に捉えることができれば、self-

image そのものや自我・自己についての理解も深まるであろう。WAI 反応の反応パターンの分析により、個人を包括的に比較分析することが容易になる。従って、小学生から老人までを分析対象とすることによって、生涯を通しての self-image の変化の一般的な特徴が捉えられる可能性もある。

第3番目の目的は、self-image における個人の多様性を分析することである。もし、一般的な発達の特徴が見つかったとしても、すべての個人の self-image が、同じ年齢で同じように変化するとは考えられない。むしろ、個人の間には様々な違いがあり、一般的な発達傾向では説明されないような個人差があると考えべきであろう。反応パターンは、多くの個人を体系的に比較するという条件の下で、個人の反応を可能な限り包括的に表現したものである。従って、反応パターンを分析することによって、一般的な特徴だけでなく、個人間の多様性もある程度は捉えられるものと思われる。そして、少数の個人をよりよく説明するような特徴を見出すことによって、個人は共通する特徴を持ついくつかのグループに分類されるかも知れない。もちろん、このような特徴は、各個人を完全に説明するものではないが、各個人を理解するのに役立つことになる。

[方法]

この分析の対象となった被験者は、第3章の反応頻度の分析の対象となった被験者と同ーで、小学生から老人までの 14,324 名の WAI 反応が分析の対象となっている。ただし、反応頻度の分析では、60 才以上の者を 2 つの年齢区分に分けて分析したが、この分析では、60 才以上を 1 つにまとめて分析を行なっている。このため、小学生と中学生の女子を除くすべてのセルの被験者数が 500 以上になっている。WAI 技法の施行手続きについては、第2章で詳述した通り、集団状況で施行したり、個人的に依頼して持ち帰りで施行した。また、用紙についても、被験者の年齢や施行状況に合わせて、一般用 WAI 用紙、小学生用 WAI 用紙、老人用 WAI 用紙、無記名 WAI 用紙を使用した。

被験者の WAI 反応は、反応カテゴリーによってそれぞれ分類されてから、反応パターンの分析が行なわれる。この分類においては、被験者の回答をそれぞれ独立に見て、最も内容の近いカテゴリーのコードを割り当てていく。結果として、1人の被験者に対し、複数のコードが割り当てられることになる。つまり、このコードの組合せが被験者の反応パターンということになる。この分析においては、巻末の資料にも掲載した 1989 年度版基準書が反応カテゴリーとして用いられた。これは 199 の小項目を持ち、それらが 9 つの大項目にまとめられたものである。この基準書は、反応パターンの分析のためだけに作成されたものではないが、小学生から高校生までの反応パターンの分析で残された問題とも関連を持っている。前節の分析では、反応頻度の少ない小項目があったために、それを数量化Ⅲ類の分析に加えることができなかった。これは、個人の反応を包括的に分析するという意味では、不十分なものと言わざるを得ない。そこで、反応頻度の少ない小項目をなくすために、1989 年度版基準書では小項目の併合が行なわれたのである。その結果、すべての小項目が数量化Ⅲ類で分析され、各個人の反応パターンを完全に分析することが可能となった。また、WAI 反応を基準書によって分類する手続きについては、第 3 章で述べた通りである。

分析の手続きについては、被験者の WAI 反応が基準書によって分類された後、数量化Ⅲ類によって被験者の反応パターンが分析された。1989 年度版基準書には 199 の小項目があるが、そのうち、〈901 無回答〉を除外し、〈757 隠喩的な表現〉を〈802 無効回答〉に併合した結果（第 3 章参照）、197 の小項目が分析の対象となった。被験者については、14,324 名すべてが分析の対象となっている。具体的な手続きとしては、各被験者の反応の中に各小項目に分類される反応があるか否かによって、各被験者の反応パターンを 197 個のダミー変数 (1/0) で表現し、全被験者の反応パターンを数量化Ⅲ類によって分析した。そして、各小項目に与えられたカテゴリー・ウェイトに基づき、小項目の布置を行ない、各軸の解釈を行なった。また、各被験者に与えられたサンプル・スコアにつ

いては、年齢や性差との関連を分析した。

さらに、数量化Ⅲ類で得られたカテゴリー・ウェイトに基づき、Ward 法の階層クラスター分析によって小項目の分類が行なわれた。これは、前節の分析で使用された非階層のクラスター分析と Ward 法の分類効果を疑似 F 値 (pseudo F) で比較した結果、Ward 法の疑似 F 値の方が高かったためである。また、この分析では、言及者数で各小項目を重みづけした上で分類を行ない、小項目の分類というよりも、個々の反応の分類に近い結果が得られるようにした。クラスター分析によって得られた小項目のクラスターは、まずそれぞれの内容が解釈された。さらに、各クラスターを反応カテゴリーとして被験者の分析に用い、性・年齢による各クラスターの反応傾向の違いと、各被験者の反応全体がどのようなクラスターの組合せで構成されているかを分析した。

[結果と考察]

数量化Ⅲ類の結果: 14,324 名の被験者の 197 の小項目に対する反応パターンを数量化Ⅲ類で分析した結果、5 つの次元が得られた。各軸でのカテゴリー・ウェイトとサンプル・スコアの相関係数は、I 軸が .569、II 軸が .498、III 軸が .428、IV 軸が .388、V 軸が .351 であった。この相関係数は各軸の説明力を示す指標であり、これの二乗が各軸の固有値となる。この結果を見ると、相関係数は必ずしも高いものとは言えない。これは、今回分析された被験者の反応パターンが多様であることを示唆している。表 4-4 には、各軸で高いカテゴリー・ウェイトを与えられた小項目が、正負 10 項目ずつ示してある。I 軸を見ると、正の小項目はすべて性格を記述したものになっており、負の小項目にはデモグラフィックな属性を記述したものが多く含まれている。また、図 4-2 は、I 軸と II 軸のカテゴリー・ウェイトで小項目を布置したものであるが、性格に関する記述はほとんど右側にあり、デモグラフィックな属性についての記述はほとんど左側にある。これらの項目だけを考慮すれば、この軸を性格-デモグラフィックな属性の軸と解釈することができる。ところが、他の小項目について見ると、〈私は私〉などの実存的な

表 4-4 数量化 III 類で高いカテゴリー・ウェイトを得た正負各 10 の小項目

順位	I 軸 ($\eta = .568$)		II 軸 ($\eta = .498$)		III 軸 ($\eta = .428$)	
	小項目名	weight	小項目名	weight	小項目名	weight
1	547 感情を表さない	2.206	753 私は私	2.439	754 私は誰	4.012
2	825 しつこい	2.190	754 私は誰	2.182	748 生死に対する意識	3.925
3	538 慎重	2.077	828 うそつき	2.107	759 戦争体験	3.821
4	520 柔軟性がある	1.877	802 無効回答	1.884	718 私は不幸	3.895
5	406 対人能力がない	1.871	755 実存的記述	1.881	755 実存的記述	3.444
6	609 自信過剰	1.830	627 ずるい	1.763	711 老後の希望	3.298
7	517 せっかち	1.828	801 W A I に関する記述	1.640	753 私は私	3.202
8	533 責任感がある	1.784	544 暗い	1.597	746 懐古的記述	3.112
9	823 ひがみっぽい	1.778	518 お調子者	1.591	209 孫	2.875
10	548 執着心がない	1.758	719 将来性がある	1.529	212 家系・家柄	2.809
10	105 生年月日	-1.403	206 子供	-2.447	110 クラブ・サークル	-1.138
9	208 祖父母	-1.451	113 所属団体	-2.817	301 容姿・体格	-1.175
8	755 実存的記述	-1.588	712 老いに対する意識	-2.989	740 飲食への指向	-1.280
7	106 住所	-1.818	112 収入	-3.123	303 身体的能力	-1.281
6	756 人間	-1.634	207 配偶者	-3.167	741 スポーツへの指向	-1.292
5	101 名前	-1.701	706 健康に対する意識	-3.250	102 ニックネーム	-1.393
4	108 人権・国籍	-1.701	210 親戚・親族	-3.337	632 恐怖症	-1.502
3	801 W A I に関する記述	-1.717	711 老後の希望	-3.728	403 専門能力がある	-1.688
2	102 ニックネーム	-1.801	759 戦争体験	-4.693	744 勉強・学問への指向	-1.721
1	753 私は私	-2.102	209 孫	-5.010	404 専門能力がない	-1.812

順位	IV 軸 ($\eta = .388$)		V 軸 ($\eta = .351$)	
	小項目名	weight	小項目名	weight
1	707 能力に関する願望	4.587	208 祖父母	7.246
2	702 進学への希望	4.213	203 父親	7.107
3	710 非現実的願望	3.650	204 母親	6.805
4	704 結婚に関する願望	3.188	210 親戚・親族	2.819
5	703 就職への希望	3.186	205 兄弟姉妹	2.722
6	730 現在の気分	2.921	823 ひがみっぽい	2.672
7	709 逃避願望	2.908	525 抑鬱的	2.108
8	746 懐古的記述	2.680	115 故郷	2.073
9	749 生死に対する意識	2.582	114 経歴	2.040
10	714 将来	2.571	718 私は不幸	1.965
10	538 慎重	-1.515	537 約束を守る	-1.780
9	112 収入	-1.547	733 政治指向	-1.901
8	534 常識がある	-1.550	753 私は私	-1.901
7	533 責任感がある	-1.554	802 無効回答	-2.032
6	114 経歴	-1.555	801 W A I に関する記述	-2.128
5	111 職場・職業	-1.574	405 対人能力がある	-2.509
4	530 努力家	-1.652	401 頭が良い	-2.518
3	513 積極的	-1.683	409 博識・物知り	-2.947
2	405 対人能力がある	-1.884	743 ギャンブルへの指向	-2.964
1	510 頼りがいがある	-2.011	723 もてる	-3.802

意識を反映した記述は左端にあり、希望や願望は中心から右側にかけて布置されている。自分の性格や希望・願望などは、自分自身の性質や特徴を記述したもので、いわば内容的な側面から自分を把握したものとも言える。それに対し、デモグラフィックな属性で自分を記述することや、「私は私」などという記述の仕方は、内容とは無関係な形式的な側面からの把握と言うことができるであろう。そこで、このような布置を総合的に見て、I軸を“内容的把握-形式的把握”の軸と解釈した。

図 4-2 から II 軸を解釈すると、上には実存的記述や性格に関する項目などの、自分自身に直接的

に向けられた意識を反映したものが多い。それに対し、下には〈孫〉をはじめとする家族についての記述や〈戦争体験〉などの、むしろ自分の外に向けられた意識を反映したものが多い。そこで、II軸を“自己に対する意識”の軸と解釈した。

III軸を見ると、実存的な意識を反映した項目や過去を懐古するような記述が特に高い正のウェイトを得ている。それに対し、負ではあまり高いウェイトを得ているものはないが、日常生活についての記述や日常行動に関する性格記述が多く含まれている。このような視点から正のウェイトを得た項目を見ると、日常生活ではあまり意識しないような非日常的な意識を反映した項目と見ること

もできる。そこで、Ⅲ軸を“実存的意識・非日常的意識”の軸と判断した。

Ⅳ軸を見ると、正の項目には願望や希望を記述したものが多く含まれている。そこでⅣ軸を“欲求・希望・願望”の軸と解釈した。また、Ⅴ軸については、〈祖父母〉、〈父親〉、〈母親〉だけが極端に高い正のウェイトを得ており、〈親戚・親族〉と〈兄弟姉妹〉も高い正のウェイトを得ている。そこでⅤ軸を“家系・家族”の軸と判断した。

数量化Ⅲ類のサンプル・スコアの分析: 数量化Ⅲ類では、上で述べたようなカテゴリー・ウェイトに基づいて、各被験者にサンプル・スコアが与えられる。これは、被験者を次元上の1点に位置づけるものであり、これを用いることにより、被験者を計量的に分析することが容易にできる。これは、各被験者の中の反応のばらつきを反映していないため、各被験者を詳細に検討するには適していないが、一般的な傾向の分析は可能であ

る。そこで、ここではサンプル・スコアを用いて、WAI 反応の性・年齢による一般的な違いを分析することにする。

各被験者に与えられたサンプル・スコアの性・年齢別の平均が、表4-5に示されている。まず、各軸のサンプル・スコアと性・年齢との大まかな関係を見るために、各軸のサンプル・スコアを従属変数とし、性と年齢(小学生から60才以上までの9水準)を要因とした分散分析を行なった(表4-6参照)。分散分析の結果を見ると、すべての軸で、性の主効果、年齢の主効果、性と年齢の交互作用が有意となっている。しかし、F値を詳細に見ると、軸の間には違いが認められる。年齢の効果は、Ⅱ軸で最も大きくなっており、Ⅴ軸で最も小さくなっている。Ⅱ軸の平均値の年齢による変化を見ると、年齢とともにサンプル・スコアが下がる傾向が認められる。年齢とサンプル・スコアとの相関を求めた結果、Ⅱ軸と年齢との相関

表 4-5 数量化Ⅲ類のサンプル・スコアの性・年齢別平均

年齢	性別	N	サンプル・スコア平均(標準偏差)				
			I軸	II軸	III軸	IV軸	V軸
小学生	男性	691	-1.090 (0.789)	0.561 (0.718)	-0.598 (1.029)	0.225 (0.953)	-0.119 (1.094)
	女性	479	-0.974 (0.736)	0.445 (0.696)	-0.809 (0.890)	0.180 (0.958)	0.055 (1.003)
	全体	1,170	-1.042 (0.770)	0.513 (0.712)	-0.684 (0.980)	0.206 (0.955)	-0.048 (1.061)
中学生	男性	939	-0.683 (0.993)	0.572 (0.795)	-0.244 (1.285)	0.462 (1.039)	-0.284 (1.117)
	女性	217	-0.494 (0.839)	0.449 (0.851)	-0.465 (1.222)	0.740 (1.003)	-0.098 (1.257)
	全体	1,156	-0.648 (0.988)	0.549 (0.807)	-0.285 (1.276)	0.514 (1.035)	-0.249 (1.148)
高校生	男性	1,589	-0.751 (1.076)	0.804 (0.834)	0.279 (1.313)	0.362 (1.122)	-0.118 (1.340)
	女性	1,058	-0.373 (0.857)	0.498 (0.781)	-0.128 (1.101)	0.642 (1.068)	0.293 (1.075)
	全体	2,657	-0.601 (1.047)	0.662 (0.820)	0.117 (1.249)	0.473 (1.108)	0.048 (1.258)
大学生	男性	526	-0.108 (1.055)	0.567 (0.735)	0.219 (1.022)	0.207 (0.972)	0.060 (1.181)
	女性	1,107	0.061 (1.007)	0.390 (0.840)	-0.104 (0.874)	0.181 (0.929)	0.588 (0.886)
	全体	1,633	0.007 (1.025)	0.447 (0.677)	0.000 (0.936)	0.189 (0.943)	0.425 (1.018)
20代	男性	1,086	0.028 (1.039)	0.202 (0.804)	-0.015 (0.955)	-0.259 (0.932)	-0.244 (0.954)
	女性	1,188	0.216 (1.055)	0.183 (0.819)	-0.058 (0.976)	-0.206 (0.962)	0.078 (0.991)
	全体	2,284	0.128 (1.051)	0.192 (0.812)	-0.037 (0.966)	-0.232 (0.948)	-0.077 (0.986)
30代	男性	824	0.133 (0.939)	-0.250 (0.889)	0.112 (0.901)	-0.480 (0.909)	-0.323 (1.009)
	女性	859	0.137 (0.916)	-0.270 (0.934)	0.170 (0.963)	-0.353 (1.023)	-0.105 (0.891)
	全体	1,283	0.135 (0.927)	-0.260 (0.903)	0.142 (0.934)	-0.415 (0.971)	-0.211 (0.956)
40代	男性	752	0.183 (0.919)	-0.468 (0.850)	0.037 (0.928)	-0.695 (0.916)	-0.489 (0.978)
	女性	1,137	0.257 (0.902)	-0.478 (0.947)	0.081 (0.914)	-0.498 (0.980)	-0.255 (0.923)
	全体	1,889	0.227 (0.909)	-0.474 (0.909)	0.063 (0.920)	-0.577 (0.947)	-0.348 (0.951)
50代	男性	529	0.164 (0.948)	-0.610 (1.044)	0.240 (1.008)	-0.629 (0.891)	-0.384 (1.028)
	女性	549	0.224 (0.837)	-0.673 (1.060)	0.295 (1.007)	-0.370 (0.981)	-0.240 (1.032)
	全体	1,078	0.195 (0.893)	-0.642 (1.062)	0.268 (1.007)	-0.497 (0.946)	-0.301 (1.031)
60才以上	男性	644	0.205 (0.833)	-1.436 (1.310)	0.923 (1.353)	-0.123 (1.114)	-0.288 (1.217)
	女性	530	0.139 (0.749)	-1.861 (1.236)	0.864 (1.252)	-0.062 (0.982)	-0.078 (1.211)
	全体	1,174	0.175 (0.797)	-1.538 (1.261)	0.896 (1.306)	-0.065 (1.048)	-0.192 (1.218)
全体	男性	7,400	-0.295 (1.083)	0.132 (1.110)	0.098 (1.187)	-0.033 (1.085)	-0.231 (1.139)
	女性	6,824	-0.009 (0.895)	-0.070 (1.067)	0.002 (1.059)	-0.023 (1.058)	0.078 (1.040)
	全体	14,324	-0.157 (1.051)	0.034 (1.094)	0.051 (1.128)	-0.028 (1.072)	-0.063 (1.103)

表 4-6 性・年齢を要因とするサンプル・スコアの分散分析

従属変数	要因	自由度	平方和	平均平方和	F 値*
I 軸	年齢	8	2596.285	324.536	354.56
	性別	1	76.239	76.239	83.29
	年齢×性別	8	59.938	7.492	8.18
	残差	14306	13094.663	0.915	
	計	14323	15827.124		
II 軸	年齢	8	6016.806	752.101	975.13
	性別	1	51.542	51.542	66.83
	年齢×性別	8	41.538	5.192	6.73
	残差	14306	11033.878	0.771	
	計	14323	17143.862		
III 軸	年齢	8	1697.688	212.209	185.66
	性別	1	63.702	63.702	55.73
	年齢×性別	8	105.103	13.138	11.49
	残差	14306	16351.774	1.143	
	計	14323	18218.248		
IV 軸	年齢	8	2247.428	280.928	284.70
	性別	1	80.651	80.651	61.46
	年齢×性別	8	47.029	5.879	5.96
	残差	14306	14116.622	0.987	
	計	14323	16471.728		
V 軸	年齢	8	717.279	89.660	78.31
	性別	1	284.948	284.948	284.89
	年齢×性別	8	45.070	5.634	4.92
	残差	14306	16378.760	1.145	
	計	14323	17426.055		

* すべての F 値は、0.01% 水準で有意である。

は全体で -0.587 となっている。ただし、このような年齢による変動は 20 代以降で大きく、小学生から大学生にかけては比較的小さい。これは、自分自身に対する意識が年齢によって大きく異なり、特に 20 代以降は、年齢が上がるに従って、自分自身に対する意識が弱まり、外的な対象に対する意識が強まることを示唆している。性の効果については、V 軸の F 値が最も大きく、他の軸はほぼ同じ程度の値になっている。V 軸のスコアの平均は、すべての年齢で女性が男性を上回っている。この結果は、家系や家族に対する意識が、男性よりも女性において強いことを示していると言えるであろう。

他の軸について見ると、I 軸と III 軸のスコアは年齢とともに上昇する傾向が認められる。ただし、I 軸では 20 代以降の上昇が緩慢である。これは、デモグラフィックな属性などによる形式的な自己把握から、性格などの内容的な把握への変化が、小学生から成人までの発達的特徴の 1 つであることを示唆している。一方 III 軸では、小学生から大学生までの間で、男性のスコアが女

性よりも高いが、20 代で下がり、それ以降は女性との差がほとんど無くなっている。これは、成人までの発達過程における男性の self-image は、実存的で非日常的なものを含む傾向が女性よりも強いことを示しており、また、全体として self-image は年齢とともに実存的・非日常的なものを含む傾向が強くなることを示している。IV 軸のスコアと年齢との間には直線的な関係はないが、年齢や性との間に明確な関係が認められる。IV 軸のスコアは男女共に、中学生で最高になり、40 代で最低となるような“S”を横にしたような曲線を描いている。つまり、中学生から 40 代の間では下降しているが、小学生から中学生の間と 40 代から 60 才以上の間では上昇傾向が認められるのである。また、中学生から高校生の間と 30 代から 50 代の間では、男性よりも女性でスコアが高くなっている。これは、欲求・希望・願望が中学生で最も強く self-image に現れ、40 代ではあまり現れないことを示している。生涯を通して見ると、欲求・希望・願望が self-image に現れる傾向は、男性よりも女性において強いように思わ

れる。

これらの次元も総合して見ると、self-image 発達を大きく3つの期間に分けて考えることができる。それは、小学生から大学生まで、20代から40代まで、50代以降の3つの期間である。まず、小学生から大学生までは、最も変動の大きい期間で、性格や希望・願望で自己を記述する傾向、実存的で非日常的な自己意識が強くなる傾向、家系

や家族が self-image で顕在的になる傾向が進む。また、欲求・希望・願望などは強く self-image に反映されていて、特に中学生、高校生の女子で強く反映される。この期間は性差も比較的大きく、実存的・非日常的な意識も含めた自己に対する意識は、女子よりも男子で強い。そして、性格、欲求・希望・願望、家系・家柄は、男子よりも女子の self-image において顕在的である。20

表 4-7 クラスタ分析 (Ward 法) による小項目の分類結果

クラスタ A			
405 対人能力がある	515 活潑	532 まじめ・誠実	556 経済観念がない
407 一般能力がある	516 おつちよこちよい	533 責任感がある	557 経済観念がある
501 社交的	517 せっかち	534 常識がある	558 はっきりしている
502 開放的	519 好奇心旺盛	535 裏切り	559 男らしさ・女らしさ
503 明るい	520 柔軟性がある	538 几帳面	580 忘れっぽい
504 にぎやか	521 素直	537 約束を守る	581 道徳的性格類型
505 おしゃべり	522 素朴的	538 慎重	806 短気
508 ユーモアがある	523 おおざっぱ	539 遠い未来型	807 攻撃的
507 温厚	524 のんき	542 非社交的	811 負けず嫌い
508 優しい	528 度胸がある	543 無口・口下手	817 神経質
508 世話好き	527 意志が強い	548 執着心がない	821 目立ちたくない
510 褒めたいがある	528 忍耐強い	551 理屈っぽい	728 マイペース
511 お人好し	529 強情・頑固	552 細かいことが好き	737 革新的
513 積極的	530 努力家	554 要領が良い	738 保守的
514 行動的	531 主体性がある		

クラスタ B			
406 対人能力がない	549 ものぐさ	609 自信過剰	622 ナルシスト
408 一般能力がない	550 思考的	610 野心的	623 ひがみっぽい
512 寂しがりや	553 繊細	612 生意気	624 意地悪
518 お調子者	555 要領が悪い	613 子供っぽい	625 しつこい
525 抑鬱的	582 その他(情慮)	614 主体性がない	626 物事にこだわる
540 のろま	601 自己中心的	615 感傷的	629 あまのじゃく
541 無神経	602 気分屋	618 責任感がない	630 ~ぶる
544 暗い	603 好き嫌いが激しい	618 心配性	631 多重人格
545 冷静	604 誇きっぽい	619 小心者	722 自己と他者の評価の違い
546 無頓着	605 感情的	620 恥ずかしがり屋	727 欲張り
547 感情を表さない	608 見栄っぱり		

クラスタ C	クラスタ D	クラスタ E	クラスタ F	クラスタ G
116 友人	117 恋人	111 職場・職業	111 職場・職業	118 人間関係
301 容姿・体格	627 ずい	112 収入	112 収入	701 成長欲求
302 健康・体質	628 うそつき	113 所属団体	113 所属団体	708 健康に対する意識
303 身体的能力	702 進学の希望	115 故郷	115 故郷	711 老後の希望
401 顔が良い	703 就職の希望	202 両親	202 両親	712 老いに対する意識
402 顔が悪い	704 結婚に関する願望	208 子供	208 子供	715 自分に満足
403 専門能力がある	707 能力に関する願望	207 配偶者	207 配偶者	716 私は幸せ
404 専門能力がない	708 性格を変えたい	209 孫	209 孫	729 生活目標・心掛け
408 博識・物知り	709 逃避願望	210 親戚・親族	210 親戚・親族	733 政治指向
632 恐怖症	710 非現実的願望	211 家族・家庭	211 家族・家庭	734 経済指向
705 容姿に対する意識	713 現在の欲求	212 家系・家柄	212 家系・家柄	735 宗教指向
723 もてる	714 将来	410 資格・免許	410 資格・免許	738 社会指向
724 もてない	717 自分に不満	758 戦争体験	758 戦争体験	751 自然観
725 硬派	718 私は不幸			
728 軟派	719 将来性がある			
731 日課・習慣	721 個性的			
732 生活状態	730 現在の気分			
739 審美指向	746 懐古的記述			
740 飲食への指向	749 生死に対する意識			
741 スポーツへの指向	758 その他(指向)			
742 旅行への指向				
743 ギャンブルへの指向				
744 勉強・学習への指向				
745 人の好き嫌い				
747 趣味				
748 好み				
750 運命観				
752 超自然				

クラスタ E	クラスタ I	クラスタ H	クラスタ J
203 父親	101 名前	102 ニックネーム	753 私は私
204 母親	103 性別	109 学校	754 私は誰
208 祖父母	104 年令・世代	110 クラブ・サークル	755 実存的記述
	105 生年月日	205 兄弟姉妹	801 WAIに関する記述
	108 住所		802 無効回答
	107 出身		
	106 人種・国籍		
	114 経歴		
	201 家庭内の役割		
	720 平凡		
	758 人間		

代から 40 代にかけては比較的安定しているが、外的な対象が self-image に反映される傾向や、実存的で非日常的な自己意識が強くなる傾向が緩慢に進み、self-image の中で欲求・希望・願望や家系・家族の顕在性が弱くなる。この期間の女性の self-image では、欲求・希望・願望の顕在性の低下が男性よりも少ないため、性差が年齢とともに広がる傾向がある。50 代以降では、外的な対象、実存的・非日常的な意識、欲求・希望・願望、家系・家族が self-image に顕著に反映されるようになる。また、40 代で広がった欲求・希望・願望の顕在性についての性差は、60 代以降小さくなる傾向がある。

クラスター分析による小項目の分類: 数量化Ⅲ類で得られたサンプル・スコアに基づく分析は、反応の一般的な傾向を捉えるのには適しているが、各個人の反応の中の多様性を捉えるには適していない。そこで、数量化Ⅲ類で得られたカテゴリ・ウェイトに基づき反応カテゴリを作成し、そのカテゴリを用いて被験者の反応を分析することにした。数量化Ⅲ類では、1 人の被験者が同時に反応する傾向の強い小項目が次元上で近くに位置づけられるため、それに基づく反応カテゴリで反応を分類した時、各被験者の反応は比

較的少ないカテゴリに分類されることになる。従って、少ないカテゴリで各被験者の反応を包括的に分析することが可能となる。

数量化Ⅲ類で得られたカテゴリ・ウェイトに基づいて 197 の小項目を計量的に分類するために、Ward 法の階層クラスター分析が用いられた。その結果、クラスター数が 10 の時に分類効果の 1 つのピークが認められ (pseudo F=64558)、それよりもクラスター数が減少すると分類効果も低下することがわかった。そこで、クラスター数 10 の時のクラスターをその後の分析に用いることにした。表 4-7 は、小項目の分類結果を示したものである。各クラスターは、便宜的にアルファベットで呼ぶことにし、クラスターの順序についても得られた結果の通りに示してある。また、各クラスターの小項目のカテゴリ・ウェイトの平均と標準偏差を表 4-8 に示す。

クラスター A は小項目数の最も多いクラスターであるが、その大部分は性格を記述した小項目によって構成されている。クラスター B も同じような傾向があるが、両者の間にはニュアンスの違いが見られる。それは、クラスター A には性格の中でもいわゆる気質的なものが多く含まれているのに対し、クラスター B には感情の浮き沈みなどの

表 4-8 各クラスターのカテゴリ・ウェイトの平均と標準偏差

クラスター	項目数	カテゴリ・ウェイトの平均 (標準偏差)				
		I 軸	II 軸	III 軸	IV 軸	V 軸
A	58	1.244 (0.371)	0.329 (0.300)	-0.180 (0.489)	-0.738 (0.481)	-0.308 (0.802)
B	42	1.254 (0.310)	1.008 (0.244)	0.173 (0.421)	0.287 (0.351)	1.071 (0.417)
C	28	-0.190 (0.287)	-0.381 (0.488)	-0.845 (0.482)	0.500 (0.488)	-0.580 (0.510)
D	20	-0.083 (0.401)	-0.058 (0.808)	0.898 (1.135)	2.401 (0.757)	0.318 (0.708)
E	3	-0.904 (0.251)	-1.687 (0.453)	0.507 (0.149)	0.228 (0.127)	7.009 (0.175)
F	13	-0.129 (0.240)	-1.988 (0.978)	0.815 (0.792)	-1.118 (0.506)	0.088 (0.791)
G	13	0.451 (0.244)	-1.612 (0.912)	1.965 (0.460)	0.781 (0.375)	-0.228 (0.800)
H	4	-1.282 (0.177)	0.478 (0.818)	-0.881 (0.383)	0.453 (0.043)	1.217 (0.738)
I	11	-1.248 (0.389)	0.315 (0.888)	0.104 (0.355)	-1.008 (0.255)	0.444 (0.575)
J	5	-1.527 (0.308)	1.985 (0.258)	2.541 (0.858)	0.413 (1.001)	-1.892 (0.285)
全体	197	0.000 (1.000)	0.000 (1.000)	0.000 (1.000)	0.000 (1.000)	0.000 (1.000)

表 4-9 基準書の大項目とクラスターの対応関係

大項目名	クラスター別小項目数										計
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	
社会	-	-	1	1	-	4	1	3	8	-	18
家庭	-	-	-	-	3	7	-	1	1	-	12
個体	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	3
能力	2	2	5	-	-	1	-	-	-	-	10
情意	48	14	-	-	-	-	-	-	-	-	62
力動	5	24	1	2	-	-	-	-	-	-	32
指向	3	2	18	17	-	1	12	-	2	3	58
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2
計	58	42	28	20	3	13	13	4	11	5	187

力動的なものが多く含まれている。基準書において小項目は、意味内容の類似したものが集められ大項目を構成しているが、このような意味内容の分類においても性格記述がまとめられており、しかも、気質的なものと力動的なものに分類されている。そこで、基準書の大項目とクラスターとの関連を見ることにした。その結果が表4-9であるが、性格記述が集められている大項目は《情意》と《力動》である。いわゆる気質的な性格記述が集められている《情意》の小項目は全部で62項目あるが、そのうち48項目はクラスターAに含まれ、14項目がクラスターBに含まれている。つまり、《情意》の小項目はすべてクラスターAまたはBに含まれていることになる。また、力動的な性格記述が集められている《力動》には32の小項目があり、そのうち24項目がクラスターBに、5項目がクラスターAに含まれており、3項目だけがそれ以外のクラスターに含まれている。この結果は、性格記述が反応パターンの分析においてもまとまりを持っており、しかも、いわゆる気質的なものと力動的なものに大きく分けられることを示している。以上のようなことから、クラスターAを“性格（気質）”、クラスターBを“性格（力動）”と呼ぶことにした。

それに対し、クラスターCは多様な小項目を含み、大項目との明確な関係が読み取りにくい。それでも細かく見ていくと、身体に対する記述が分

類される《個体》のすべての小項目がこれに含まれている。また、《能力》の小項目の半分がこのクラスターに含まれている。しかし、このクラスターの半分以上は《指向》の小項目である。《指向》には個人の指向的な側面についての記述が分類されるが、その内容は多岐にわたっている。そこで、クラスターCに含まれる《指向》の小項目（700番台の小項目）を見ると、まず、〈日課・習慣〉や〈生活状態〉などの日常生活を記述したものが含まれている。また、〈飲食への指向〉や〈スポーツへの指向〉などの趣味や好みを記述したのも多く含まれている。つまり、ここに含まれる指向についての記述は、全体的に見て日常的なものが多い。このような事実を総合的に見て、クラスターCを“身体・能力・日常生活”のクラスターと解釈した。このクラスターは、一見多様なものが入り交じったもののようにも見えるが、これは身体を核とした身辺的な記述の集まりと考えることもできるであろう。

その他に、クラスターDとGも《指向》の小項目を多く含んでいる。クラスターDの小項目を見ると、希望や願望を記述したものが多く含まれ、そのほかに、希望や願望と関連するような自己評価も含まれている。そこで、クラスターDを“希望・願望”のクラスターと解釈した。一方、クラスターGには、〈成長欲求〉、老いや老後に関する記述、自分に対する満足感や幸福感の他に、「～指

向」という小項目名を持つものなどが含まれている。ここでの指向に関する小項目は、クラスターCに含まれる趣味や好みと異なり、個人の生き方そのものを方向づけているようなキャセクションが多い。このクラスターの小項目全体を見ると、個人のトータルな指向性を表しているようにも見え、クラスターGを“自己実現的欲求”のクラスターと考えても差し支えないであろう。クラスターJの項目数は少ないが、《指向》の中の実存的な記述と《その他》の小項目で構成されている。前にも述べたように、〈無効回答〉には自分を隠喩を用いて表現したような〈隠喩的表現〉も便宜的に併合されている。そこで、このクラスターを“実存的自己意識”のクラスターと解釈した。

残りの4つのクラスターを見ると、まず、クラスターEについては、数量化Ⅲ類のV軸で高いカテゴリウエイトを得た3つの小項目で構成され

ており、これをそのまま“祖父母・父母”のクラスターを呼ぶことにした。クラスターFは、職業と家庭に関する小項目で構成されており、“職業・家庭”のクラスターと判断した。クラスターHは、〈兄弟姉妹〉が含まれているものの、“学校生活”のクラスターと考えてよいであろう。そして、クラスターIは、基本的なデモグラフィック属性についての小項目で構成されている。そこで、このクラスターを“基本属性”のクラスターと考えた。

各クラスターの反応傾向：以上のようにして得られたクラスターに基づき各被験者の反応を分類し、被験者の反応傾向を分析した。ここでは、各被験者がそれぞれのクラスターの反応をしているか否かが分析され、各クラスターの言及率が算出された。つまり、被験者の何パーセントが各クラスターに分類される反応をしているかを求めたの

表 4-10 各クラスターの性・年齢別言及率

年齢	性別	N	クラスター言及率 (%)									
			A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
小学生	男性	691	43.1	27.5	94.6	31.1	5.6	11.9	8.4	73.5	87.7	41.8
	女性	479	56.8	33.4	93.9	28.0	5.2	11.7	6.3	78.0	87.1	29.2
	全体	1,170	48.7	29.9	94.4	29.8	5.5	11.8	7.5	74.5	87.4	36.7
中学生	男性	939	60.6	47.0	93.3	45.0	2.4	10.6	21.1	70.3	80.1	46.1
	女性	217	64.5	57.1	94.9	52.1	3.2	12.4	13.8	72.4	73.3	34.1
	全体	1,156	61.3	48.9	93.6	46.4	2.6	11.0	19.7	70.7	76.8	43.9
高校生	男性	1,599	55.2	53.1	88.6	51.4	3.1	12.9	23.0	75.4	83.4	53.1
	女性	1,058	69.4	68.2	93.3	63.6	7.8	15.1	24.4	74.9	82.6	42.2
	全体	2,657	60.8	59.1	90.4	56.3	4.9	13.8	23.6	75.2	83.1	48.8
大学生	男性	528	75.5	69.8	91.1	58.9	2.9	17.9	38.6	72.6	77.4	44.3
	女性	1,107	84.3	78.3	93.5	57.0	4.9	28.4	34.6	75.2	82.7	26.2
	全体	1,633	81.4	75.6	92.7	57.6	4.2	23.6	35.9	74.3	81.0	32.0
20代	男性	1,096	77.8	84.6	92.6	42.1	2.4	59.3	33.6	26.1	75.9	34.0
	女性	1,188	80.8	70.5	91.8	41.5	3.3	56.6	32.9	21.1	74.1	25.8
	全体	2,284	79.4	77.6	92.2	41.8	2.8	57.9	33.2	23.5	75.0	29.8
30代	男性	624	80.0	81.2	94.1	40.4	4.5	85.3	42.5	14.1	76.1	26.1
	女性	659	81.8	81.6	90.3	42.8	3.6	73.8	45.5	17.8	81.5	23.4
	全体	1,283	80.9	81.4	92.1	41.6	4.1	78.3	44.0	16.0	78.9	24.7
40代	男性	752	81.1	52.5	93.9	28.6	5.5	82.7	43.6	11.3	75.5	17.8
	女性	1,137	83.3	57.6	90.9	35.6	4.5	74.8	45.3	14.0	79.4	15.7
	全体	1,889	82.4	55.6	92.1	32.8	4.9	77.9	44.6	12.9	77.9	16.6
50代	男性	529	76.6	50.9	92.8	33.5	4.5	83.2	54.6	13.8	76.6	17.8
	女性	549	83.8	55.9	92.0	37.9	6.9	71.8	58.8	18.9	77.4	17.3
	全体	1,078	80.2	53.4	92.4	35.7	5.8	77.4	56.8	15.4	77.0	17.5
60才以上	男性	644	67.1	39.3	89.1	38.7	3.9	74.8	75.8	16.6	55.3	12.4
	女性	530	64.5	36.8	94.9	36.8	7.2	75.5	75.8	22.3	63.8	9.6
	全体	1,174	65.9	38.2	91.7	37.8	5.4	75.1	75.8	19.2	59.1	11.2
全体	男性	7,400	66.8	52.1	91.9	42.2	3.8	43.4	34.7	45.9	77.5	35.8
	女性	6,924	76.9	61.7	92.5	45.3	5.2	48.2	38.0	41.6	78.7	25.1
	全体	14,324	71.7	56.7	92.2	43.7	4.4	45.7	36.3	43.8	78.1	30.6

である。その結果を性・年齢別に示したものが表4-10である。

まず全体的な傾向を見ると、クラスターCの言及率が高いことが目につく。高校生と60才以上の男性を除く、すべての性・年齢で90%以上の者がクラスターCに言及している。これは、ほとんどの個人にとって、自分の身体、能力、日常生活などがself-imageの不可欠な要素であることを示している。それに対しクラスターEは、すべての性・年齢で10%以下の言及率しかない。これは、このクラスターに含まれる小項目が3項目しかないことも影響しているが、クラスターは数量化Ⅲ類の結果に基づいたものであることを考慮すれば、この3項目が他の項目との関連が薄い特殊なものであるとも言えるであろう。

他のクラスターは、年齢や性の違いによって言及率が大きく変動している。クラスターAの言及率は、高校生の男子で若干下がっているものの、全体的に小学生から大学生まで上昇し、50代までは比較的安定しており、60才以上になると下降する傾向がある。また、性差については、60才

以上を除いて女性の方が言及率が高い傾向がある。この結果は、性格の中でも気質的なものについてのself-imageが、小学生から成人するまでの間に顕在化していき、青年期と成年期を通して高い顕在性を維持するが、老年期になるとその顕在性が薄れていくことを示唆している。クラスターBも性格に関するものであるが、力動的なものが集められたクラスターである。言及率は、クラスターAとかなり類似した変動を示しているが、大学生ではっきりとしたピークに達し、それ以降は下降する点が異なっている。大学生が自我同一性の確立時期にあたることを考慮すると、この時期に力動的なものがself-imageの中で顕在的になることも理解できる。

クラスターDは希望・願望のクラスターであるが、図4-3を見ると、女性は高校生で言及率がピークに達し、男性は大学生でピークに達している。そして、男女ともに20代以降は30%から40%程度の言及率を維持している。クラスターDには、〈進学希望〉、〈就職希望〉、〈結婚に関する願望〉など、将来設計に関わる希望や願望が多く

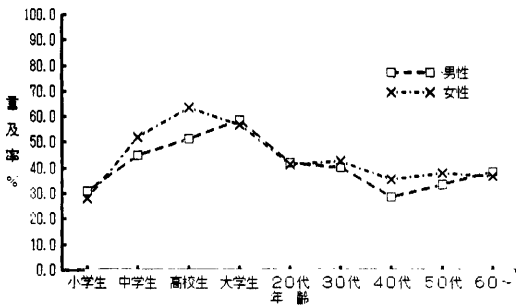


図 4-3 クラスター D の言及率

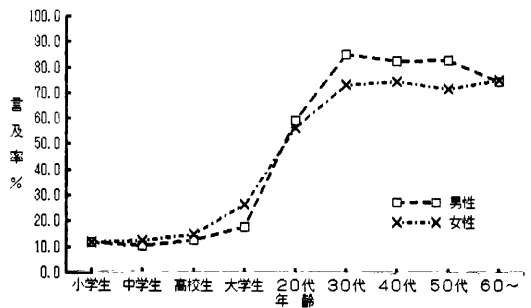


図 4-5 クラスター F の言及率

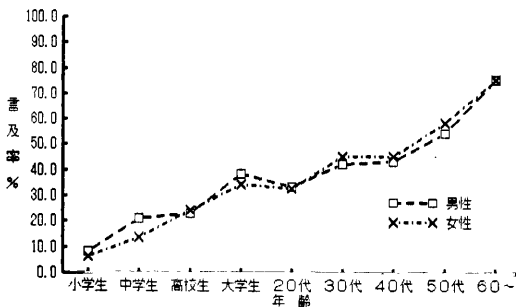


図 4-4 クラスター G の言及率

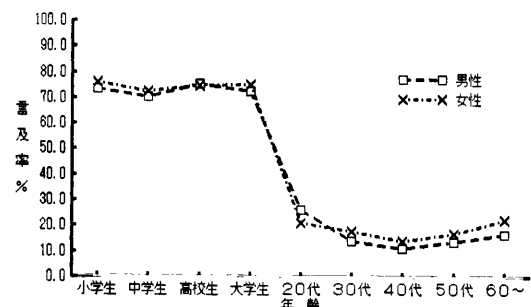


図 4-6 クラスター H の言及率

含まれている。そういう意味では、社会に出る前の年齢で言及率が高いのも理解できる。また、女性は平均すると男性に較べ社会に出る年齢も早く、結婚年齢も男性よりも低い。従って、男女の言及率のピークが異なるのは、性差による発達のなズレと考えることもできるであろう。それに対しクラスター-Gは、年齢とともに言及率が上昇しており、小学生では 10% 以下でしかなかったのに対し、60 才以上では 75% 以上にもなっている (図 4-4)。このクラスターには、個人の生き方そのものを方向づけるような指向についての記述が含まれており、これを自己実現的欲求のクラスターと解釈した。自分の生き方を包括的に反省するには、精神的な発達が必要であり、また、自分の人生の意味づけをしたいという欲求は、人生の終わりに近づくにつれて強くなるものと思われる。おそらくこの結果は、このような発達や欲求を反映したものと言えるであろう。

クラスター-Jの実存的な自己意識も、ある意味では自分自身の意味づけに関するものと言える。このクラスターの言及率は、高校生をピークとしてそれ以降下降している。実存的に自分を捉えようとする傾向は、青年期の特徴とも考えられる。具体的な属性や性質を列挙することでは捉えきれない“私”というものを捉えようとする、「自分は何者か」という問いに対し「私である」と答えたり、メタファーで表現したりすることになる。あるいは、答えが得られず「本当は何者なのだろうか」という疑問が浮かぶことになる。そういう意味では、WAI にこのような反応が現れることは当然と言えるであろう。しかし、自己意識が未発達な時期には、自己の存在をこのように意味づけようとする欲求も精神的な能力も弱い。一方、人生経験が深まるにつれて、自分の属性や性質に自分なりの意味を見出すことができるようになる。おそらく、自我同一性確立以前の青年期には、自己の存在を意味づけたいという欲求が高まる一方で、自分を意味づける属性や性質に対する同一性が十分になく、そのために実存的な自己意識が強くなるものと思われる。

クラスター-F, H, Iは、デモグラフィックな属性、社会生活、家庭・家族と関連するクラスター

である。クラスター-Iは、基本的な属性についてのクラスターで、全般的に高い言及率があるが、小学生で特に高く、60 才以上で低くなっている。このような基本的な属性は、生涯を通して重要な self-image の要素であるが、発達の初期の self-image において特に顕著であり、老年期には顕在性が薄れていくものと思われる。クラスター-Fは職業と家庭に関するものであるが、このクラスターの言及率は、大学生以下で低く、20 代以降で急激に上昇している (図 4-5 参照)。これには、当然、就職が関連しているものと考えられるが、それだけでなく、結婚することによって自分の家庭を築くことも大きな要因となっているものと思われる。一方、クラスター-Hは学校生活に関するものであり、大学生までは 70% 以上の言及率があるのに対し、20 代以降のほとんどの年齢で 10% 代まで下がっている (図 4-6 参照)。つまり、クラスター-FとHは相補的な関係にあり、年齢によっていずれかが重要な self-image の要素となると言えるであろう。そして、これらは、クラスター-Iとともに、self-image の広い意味での社会的な要素を構成しているものと考えられる。

クラスターの併合によるクラスター言及パターンの分析: 各被験者の WAI 反応は複数のクラスターの内容を含んでおり、それらの組合せによ

表 4-11 クラスターと大クラスターとの対応関係

大クラスター	クラスター
I: 社会・生物的基礎	C: 身体・能力・日常生活
	E: 祖父母・父母
	F: 職業・家庭
	H: 学校生活
	I: 基本属性
	J: 実存的自己意識
II: 性格	A: 性格 (気質)
	B: 性格 (力動)
III: 欲求・自己評価	D: 希望・願望
	G: 自己実現的欲求

て構成されている。しかし、その組合せは個人によって様々であり、膨大なクラスターの組合せパターンが存在することになる。この分析の被験者について見れば、全部で564の組合せパターンがある。これらのパターンを用いることにより、かなり詳細に個人を分析できる。しかし、そのことは一方で、結果を煩雑にし、全体像がわかりにくいという問題にもなる。そこで本稿では、クラスターを併合してWAI反応の傾向を全体的に把握する試みについてだけ触れておく。

クラスターを併合するにはいくつかの方法があるが、ここでは高校生までの分析で示された“社会・生物的基础”、“性格”、“欲求・自己評価”の3つにクラスターを分類することにした。この3つのまとまり自体は高校生までの分析で帰納的に得られたものであるが、これは榎田・佐野のパーソナリティ・スキームや基準書の大項目とも対応

し、パーソナリティや self-image を包括的に捉えるのに有効なものと思われる。また、本節の分析で示されたクラスターもこの3つのクラスターと対応関係を持っている。そこで、10のクラスターを併合して、I 社会・生物的基础、II 性格、III 欲求・自己評価の3つにまとめ、これを“大クラスター”と呼ぶことにした。具体的には表4-11にもあるように、I 社会・生物的基础にはクラスターC、E、F、H、I、Jが対応する。クラスターCについて見ると、身体や能力を生物的基础と呼ぶことができ、また日常生活も、生物的和社会的に弁別することはむずかしいが、個人の基礎的な部分を成していると言える。クラスターE、F、H、Iには家庭、学校生活、職業などの広い意味での社会関係についての記述が分類される。また、クラスターIには〈人種・国籍〉や〈人間〉などの生物学的な規定も含まれている。クラス

表 4-12 大クラスターの言及パターンによる被験者の分類結果

年齢	性別	N	各言及パターンの被験者のパーセンテージ					合計
			I	I+II	I+III	I+II+III	その他	
小学生	男性	691	34.4	30.1	13.9	21.8	0.0	100.0
	女性	479	27.6	41.8	7.9	22.8	0.0	100.0
	全体	1,170	31.6	34.9	11.5	22.1	0.0	100.0
中学生	男性	939	17.9	30.2	11.3	40.5	0.1	100.0
	女性	217	18.1	27.6	7.4	46.8	0.0	100.0
	全体	1,158	17.6	29.8	10.8	42.0	0.1	100.0
高校生	男性	1,599	18.1	23.3	12.8	45.1	0.7	100.0
	女性	1,058	7.0	24.1	11.3	57.3	0.3	100.0
	全体	2,657	13.7	23.6	12.2	49.9	0.5	100.0
大学生	男性	528	7.4	21.9	8.2	62.2	0.4	100.0
	女性	1,107	5.1	26.8	3.6	62.4	2.0	100.0
	全体	1,633	5.9	25.2	5.1	62.3	1.5	100.0
20代	男性	1,098	9.3	34.7	6.2	48.5	1.3	100.0
	女性	1,188	8.0	34.0	5.8	50.2	2.0	100.0
	全体	2,284	8.6	34.3	6.0	49.4	1.7	100.0
30代	男性	624	8.3	32.1	6.6	51.8	1.3	100.0
	女性	659	6.4	31.4	7.0	54.0	1.2	100.0
	全体	1,283	7.3	31.7	6.8	52.9	1.2	100.0
40代	男性	752	9.0	35.5	6.6	47.2	1.6	100.0
	女性	1,137	8.3	35.0	6.0	50.7	1.9	100.0
	全体	1,889	7.4	35.2	6.2	49.3	1.8	100.0
50代	男性	529	10.6	27.0	9.1	52.7	0.6	100.0
	女性	549	4.6	26.2	8.4	59.8	1.3	100.0
	全体	1,078	7.5	26.6	8.7	56.2	0.9	100.0
60才以上	男性	644	7.1	10.9	23.0	58.1	0.9	100.0
	女性	530	5.7	14.0	28.8	52.6	0.9	100.0
	全体	1,174	6.5	12.3	24.7	55.6	0.9	100.0
全体	男性	7,400	14.3	27.6	10.9	46.5	0.8	100.0
	女性	6,924	8.1	29.4	8.4	52.7	1.3	100.0
	全体	14,324	11.3	28.5	9.7	49.5	1.0	100.0

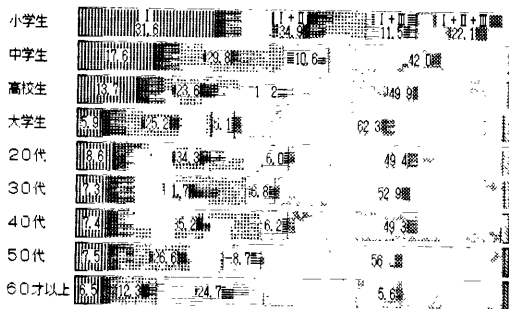


図 4-7 大クラスターの言及パターンによる被験者の分類結果

ター J は実存的な自己意識を反映したものであるが、これは個人が自分を根元的に意味づけようとする試みの現れと言うことができるであろう。II 性格には、性格についての記述が分類されるクラスター A, B が対応する。そして、III 欲求・自己評価には、具体的な将来の希望や願望が分類されるクラスター D と、より包括的な自己実現的な欲求が分類されるクラスター G が対応する。また、この 2 つのクラスターには自己評価についての記述も含まれている。このようにして作られた大クラスターは、前節で示された 3 つのクラスターと内容的にほとんど等価なものであり、10 のクラスターがこれと対応するという事は、2 つの分析の妥当性を示すものと言えるであろう。

大クラスターに対する被験者の言及パターンを分析すると、高校生までの分析で得られた結果と同じように、被験者を大きく 4 つの言及パターンに分類できることがわかった。それは、I 社会・生物学的基礎にだけ言及している者、I 社会・生物学的基礎と II 性格に言及している者、I 社会・生物学的基礎と III 欲求・自己評価に言及している者、そしてこれらすべてに言及している者の 4 つのグループである。これは、I 社会・生物学的基礎にほとんどすべての被験者が言及しているためであるが、社会・生物学的基礎が self-image の不可欠な要素であることを示唆している。

性・年齢ごとに被験者をこの 4 グループに分類した結果が表 4-12 であるが、高校生までについて見ると、前節の分析と類似した結果であることがわかる (図 4-1, 図 4-7 参照)。そして、大学

生以上も含めて見ると、self-image の発達的变化の特徴を捉えることができる。小学生から大学生の間では、I 社会・生物学的基礎にだけ言及する者が減少し、すべての大クラスターに言及する者が増える傾向がある。これは self-image の分化・多様化を反映したものと考えることができるであろう。I 社会・生物学的基礎にだけ言及する者は、大学生以降安定しているが、すべてに言及する者は大学生と 20 代の間で減少し、その後安定している。20 代で I 社会・生物学的基礎と II 性格に言及する者が増加しているため、これは、III 欲求・自己評価に対する言及が 20 代になると減少するためと判断でき、卒業、就職、結婚などによる self-image の変化を反映しているものと思われる。20 代から 40 代までの間は全体的に大きな変化はない。50 代になると I 社会・生物学的基礎と II 性格に言及する者が減り、すべてに言及する者が増えている。これは大学生と 20 代との間での変化の逆であり、III 欲求・自己評価に言及する者が増加していることを意味している。また 60 才以上では I 社会・生物学的基礎と II 性格に言及する者が減り、I 社会・生物学的基礎と III 欲求・自己評価に言及する者が増加している。これは、II 性格に言及する者が減り、III 欲求・自己評価に言及する者が増加しているためと判断できる。クラスター G の言及率を見ると 50 代以降で上昇している (図 4-4 参照)。従って、III 欲求・自己評価の中でも自己実現的な欲求が、50 才以降に self-image において顕著になることの現れと言えるであろう。

4. まとめ

本章では、WAI 反応の反応パターンを分析した結果について述べた。中でも小学生から老人までを対象とした分析では、1989 年度版基準書の 197 の小項目の反応パターンが数量化類で分析され、その結果 5 つの次元が得られた。それは、I. 内容的把握-形式的把握の軸、II. 自己に対する意識の軸、III. 実存的意識・非日常的意識の軸、IV. 欲求・希望・願望の軸、V. 家系・家族の軸である。これらの軸での被験者のサンブ

ル・スコアを分析した結果をまとめると次のようになる。小学生から大学生までは、性格や希望・願望で自己を記述する傾向、実存的で非日常的な自己意識が強くなる傾向、家系や家族が self-image で顕在的になる傾向が進む。また、欲求・希望・願望などが強く self-image に反映されていて、特に中学生、高校生の女子で強く反映される。この期間は性差も比較的大きく、実存的・非日常的な意識も含めた自己に対する意識は、女子よりも男子で強い。そして、性格、欲求・希望・願望、家系・家柄は、男子よりも女子の self-image において顕在的である。20代から40代にかけては比較的安定しているが、外的な対象が self-image に反映される傾向や、実存的で非日常的な自己意識が強くなる傾向が緩慢に進み、self-image 中での欲求・希望・願望や家系・家族の顕在性が弱くなる。この期間の女性の self-image では、欲求・希望・願望の顕在性の低下が男性よりも少ないため、性差が年齢とともに広がる傾向がある。50代以降では、外的な対象、実存的・非日常的な意識、欲求・希望・願望、家系・家族が self-image に顕著に反映されるようになる。また、40代で広がった欲求・希望・願望の顕在性についての性差は、60代以降小さくなる傾向がある。

数量化Ⅲ類で得られたカテゴリー・ウェイトに基づき、クラスター分析によって小項目の分類を行ない、10のクラスターを得た。それは、A. 性格(気質)、B. 性格(力動)、C. 身体・能力・日常生活、D. 希望・願望、E. 祖父母・父母、F. 職業・家庭、G. 自己実現的欲求、H. 学校生活、I. 基本属性、J. 実存的自己意識の各クラスターである。これらのクラスターに対する言及率を分析した結果、身体・能力・日常生活はあらゆる性・年齢で言及されることが多く、祖父母・父母はいずれの年齢でも言及されることが比較的少なかった。性格(気質)は、大学生まで言及率が上がり、大学生から50代まで安定しており、60才以上で言及率が下がっている。性格(力動)は大学生ではっきりとしたピークを描いており、それ以降下降している。希望・願望の言及率は、高校生から大学生にかけてピークに達してから

20代で下がり、それ以降安定している。自己実現的欲求の言及率は、年齢が上がるに従って上昇し、60代以上では約75%に達している。実存的自己意識の言及率は、高校生でピークに達し、その後下降している。学校生活と職業・家庭は相補的な関係にあり、大学生までは学校生活の言及率が高く、20代以降は職業・家庭の言及率が高くなっている。そして、基本属性については全体的に言及率が高いが、小学生で特に高く、60才以上で下がっている。

最後に、クラスターをⅠ社会・生物的基礎、Ⅱ性格、Ⅲ欲求・自己評価の3つの大クラスターに併合し、その言及パターンの分析を行なった。その結果、ほとんどの被験者は、Ⅰ社会・生物的基礎に言及しており、他の2つの大クラスターに対する言及パターンによって、被験者は4つのグループに分類できることがわかった。それによると、小学生から大学生の間では、Ⅰ社会・生物的基礎にだけ言及する者が減少し、これら3つすべてに言及する者が増加する。20代ではⅢ欲求・自己評価の言及率が下がり、結果としてⅠ社会・生物的基礎とⅡ性格だけに言及する者が増える。そして20代から40代にかけては比較的安定している。50代以降、再びⅢ欲求・自己評価の言及率が上がり、Ⅱ性格に言及する者が減少している。

小学生から老人までを対象とした分析から以上のような結果が得られたが、ここから self-image のいくつかの大きな特徴を理解することができる。その1つは、self-image の分類に関するものである。self-image が多様で広い範囲に及ぶということは、第2章の基準書作成の過程や第3章の反応頻度の分析でも明らかになっていた。本章では数量化Ⅲ類によって1人の個人のWAI反応のまとめり方を分析した結果、WAI反応に現れる self-image が意味内容のまとめりを持った10のクラスターに分類できることが示された。基準書の作成過程においても意味内容の類似に基づいて self-image がいくつかのまとめりに分類されているが、数量化Ⅲ類に基づく分類は意味内容の類似ではなく、反応の相関関係あるいは共変関係に基づいたものである。それにも関わらず、

クラスターが基準書とも対応するような意味内容のまとまりを持っていることは、各個人の WAI 反応の中にこのようなまとまりが潜在していることを示唆している。つまり、1人の個人の各反応の間には意味的な連関があるという傾向が示唆されているのである。このような傾向はあまり強いものではなく、それぞれの個人の反応を見れば多様な内容を含んでいるように見える。しかし、個人の WAI 反応があらゆる内容を含むのではなく、意味的な偏りを持っている。このような反応の相関関係あるいは共変関係に基づく self-image の分類は、意味内容のまとまりを持ち、しかも個人差を反映しているため、self-image を包括的に理解する上でも有効なものと言えるであろう。

2つめの特徴は、self-image の具体的な内容についてのものである。この分析では、身体、能力、日常生活に関する記述が1つのクラスターを形成し、しかもこのクラスターはいずれの性・年齢でも多くの被験者によって言及されている。これは、このような身体を核とする身辺的な記述が self-image の不可欠な要素であることを示唆している。身体は、James (1892) の自我理論や Allport (1962) のプロプリウムでも自己の原初的で基本的な要素として挙げられている。ここで得られた結果は、身体が身辺的なものと密接に関連していることを示しており、間接的ではある

が、身体が self-image の重要な要素であることを実証したものとも言えるであろう。

最後に self-image の発達について見ると、かなり明確な特徴がこの分析の結果認められた。まず、児童期から青年期にかけて個人の self-image が分化し、多様な内容の self-image が含まれるようになる傾向が見られた。このような分化・多様化の傾向は大学の卒業まで続くが、これは自我同一性の確立の時期とほぼ対応するものと思われる。自我同一性はこのような多様な self-image を持ち、それらを1人の“私”として統合することによって達成されるものと言えるであろう。また、発達に伴って self-image の内容も変化する。学生の間は学校生活が self-image の重要な要素であるのに対し、学校の卒業後は職業や家庭がそれに代わる。また、自分の性格についての self-image は、児童期から青年期にかけて次第に顕著になる。そして、高校生や大学生という子供時代の最終段階で希望や願望が顕著になり、加齢が進むに従って、自己を包括的に意味づけたいという欲求が、self-image に大きく反映されるようになる。このような内容的な変化は、個人の生物的・精神的な発達状態や個人の置かれた社会状況を反映している。そういう意味では、self-image は個人の生きた姿を表していると言えるであろう。

5

研究の総括と今後の展望

1. 研究のまとめ	65
2. 自我・自己研究における研究結果の位置づけ	67
3. 展望	70

1. 研究のまとめ

本稿では、「組織行動研究, No. 16」に引き続き, WAI 技法による自我の実証的研究について述べた。われわれは, 自我を実証的に捉える際に, 個人が抱いている self-image が有効であると考え, WAI 技法を用いて self-image を分析している。われわれの研究プロジェクトの目的を挙げると, ①実証的な方法で個人の self-image を具体的に捉え, それがどのような範囲に及ぶかを把握すること, ②様々な self-image がどのような頻度で現れるかを分析すること, ③個人の持つ多くの self-image が相互にどのような関連を持っているかを分析すること, ④WAI 技法をパーソナリティ診断を行なうための技法として確立することである。このような目的のために, われわれは WAI 技法を用いて self-image の分析を行なっている。

われわれは, まず, “基準書”と呼ばれる WAI 技法のための反応カテゴリーを作成することにした。これは WAI 反応の具体的な内容を把握するために, 反応の内容分析を通じて帰納的に作成さ

れている。基準書の一番最初の版は 1983 年度に作成された。その後, 「基準書の改訂→反応の分類→集計→反応傾向の分析→基準書の改訂」という過程を繰り返して, 基準書の精緻化が進められ, その結果, 約 300 の小項目を持つ 1986 年度版基準書が得られた。この基準書はかなり安定性があり, その後, 1988 年度まではほとんど変更を加えられずに分析に用いられた。しかし, この基準書はまだカテゴリー数が多く, これを用いて分類を行なうには, 数ヶ月に及ぶトレーニングを要する。そこで, さらに小項目の併合を中心とする基準書の改訂を行ない, その結果, 199 の小項目を持つ 1989 年度版基準書が完成された。この基準書では, 199 の小項目が, 《社会》, 《家庭》, 《個体》, 《能力》, 《情意》, 《力動》, 《指向》, 《その他》, 《無回答》の 9 つの大項目に分類されている。

このような手続きで作られた基準書は, 分析のための反応カテゴリーであると同時に, WAI 技法によってどのような反応が得られるかを具体的に示すものでもある。つまり, 基準書は, 多くの個人から得られた self-image を具体的に列挙したリストとすることができる。一方, 基準書の作

成の過程で、基準書の大項目と楨田・佐野(1965)のパーソナリティの概要のスキームとの間に対応関係が認められた。これは、パーソナリティのほとんどすべての側面についての記述が、WAI 技法において出現し得ることを示しており、self-image あるいは自我・自己の理解に対する WAI 技法の有効性を示唆している。

WAI 技法で得られた小学生から老人までの約 14,000 名の反応を、1989 年度版基準書を用いて分析した結果、WAI 反応のいくつかの特徴が見出された。まず、WAI には個人にとって重要なもの、あるいは、重要な事柄が現れる傾向があるということである。これは、WAI の反応が個人の自我関与と密接に関連していることを示唆している。もう 1 つの特徴は、WAI 反応に、指向的側面、デモグラフィックな属性、社会関係についての記述が多いということである。これは、このような側面や属性が、self-image において、特に重要で、中心的なものである可能性が高いことを示唆している。また、発達のな変化についてもいくつかの特徴を捉えることができた。まず、児童期から成年期に至る発達においては、個人の社会的あるいは生物学的基礎が self-image の中で顕在性を失っていき、その一方で性格が顕在化してくるという特徴がある。成人期の特徴としては、職業と家庭が self-image の中で重要な位置を占めているということが挙げられる。老年期には、self-image の広がりが見失われていくという特徴が見られたが、その一方で、自己や社会に対する肯定的な態度が現れている。

さらに、WAI 技法で得られた反応を基準書によって分類し、その反応パターンの分析を行なった。反応パターンとは、各個人の全体的な反応が、どのような反応の組合せによって構成されているかを表したものである。これを分析することによって、個人の反応のまとまり方や、反応間の相関関係あるいは共変関係が捉えられる。これを WAI 反応の分析に適用し、個人の WAI 反応がどのような self-image によって構成されているかを分析すれば、個人の WAI 反応の全体的な特徴が捉えられる。反応パターンの分析は、林の数量化Ⅲ類を用いることによって体系的に行なうこ

とが可能となり、その結果、それぞれの反応は、個々人の反応のまとまり方を反映するような複数の次元の上に位置づけられることになる。このような次元で構成される self-image の空間は、個人内の構造とは別の意味で self-image の構造とすることもできる。これは、多くの個人から得られた個々の WAI 反応を構成要素とし、個々の WAI 反応は、その構造において、反応パターンの類似性に基づいて位置づけられる。

小学生から老人までの約 14,000 名の WAI 反応を、1989 年度版基準書によって分類し、その反応パターンを数量化Ⅲ類で分析した結果、I. 内容的把握-形式的把握の軸、II. 自己に対する意識の軸、III. 実存的意識・非日常的意識の軸、IV. 欲求・希望・願望の軸、V. 家系・家族の軸の 5 つの次元が得られた。これらの軸での被験者のサンプルスコアを分析した結果、次のようなことが示された。小学生から大学生までは、性格や希望・願望で自己を記述する傾向、実存的で非日常的な自己意識が強くなる傾向、家系や家族が self-image で顕在的になる傾向が進む。また、欲求・希望・願望などは強く self-image に反映されていて、特に中学生、高校生の女子で強く反映される。この期間は性差も比較的大きく、実存的・非日常的な意識も含めた自己に対する意識は、女子よりも男子で強い。そして、性格、欲求・希望・願望、家系・家柄は、男子よりも女子の self-image において顕在的である。20 代から 40 代にかけては比較的稳定しているが、外的な対象が self-image に反映される傾向や、実存的で非日常的な自己意識が強くなる傾向が緩慢に進み、self-image の中で欲求・希望・非望や家系・家族の顕在性が弱くなる。この期間の女性の self-image では、欲求・希望・願望の顕在性の低下が男性よりも少ないため、性差が年齢とともに広がる傾向がある。50 代以降では、外的な対象、実存的・非日常的な意識、欲求・希望・願望、家系・家族が self-image に顕著に反映されるようになる。また、40 代で広がった欲求・希望・願望の顕在性についての性差は、60 代以降小さくなる傾向がある。

さらに、数量化Ⅲ類で得られたカテゴリー・ウ

エイトに基づき、クラスター分析によって小項目の分類を行ない、10のクラスターを得た。それは、A. 性格(気質)、B. 性格(力動)、C. 身体・能力・日常生活、D. 希望・願望、E. 祖父母・父母、F. 職業・家庭、G. 自己実現的欲求、H. 学校生活、I. 基本属性、J. 実存的自己意識の各クラスターである。これらのクラスターに対する言及率を分析した結果、身体・能力・日常生活はあらゆる性・年齢で言及されることが多く、祖父母・父母はいずれの年齢でも言及されることが比較的少なかった。気質は、大学生まで言及率が上がり、大学生から50代まで安定しており、60才以上で言及率が下がっている。力動は大学生ではっきりとしたピークを描いており、それ以降下降している。希望・願望の言及率は、高校生から大学生にかけてピークに達してから20代で下がり、それ以降安定している。自己実現的欲求の言及率は、年齢が上がるに従って上昇し、60代以上では約75%に達している。実存的自己意識の言及率は、高校生でピークに達し、その後下降している。学校生活と職業・家庭は相補的な関係にあり、大学生までは学校生活の言及率が高く、20代以降は職業家庭の言及率が高くなっている。そして、基本属性については全体的に言及率が高いが、小学生で特に高く、60才以上で下がっている。

また、クラスターをI社会・生物的基础、II性格、III欲求・自己評価の3つの大クラスターに併合し、その言及パターンの分析を行なった。その結果、ほとんどの被験者は、I社会・生物的基础に言及しており、他の2つの大クラスターに対する言及パターンによって、被験者は4つのグループに分類できることがわかった。それによると、小学生から大学生の間では、I社会・生物的基础にだけ言及する者が減少し、これら3つすべてに言及する者が増加する。20代ではIII欲求・自己評価の言及率が下がり、結果としてI社会・生物的基础とII性格に言及する者が増える。そして20代から40代にかけては比較的安定している。50代以降、再びIII欲求・自己評価の言及率が上がり、II性格に言及する者が減少している。

反応パターンの分析から得られた結果は、self-

image のいくつかの大きな特徴を示唆している。その1つは、各個人のWAI反応の中に意味的な連関があるということで、2つめの特徴は、身体を核とする身辺的な記述がself-imageの不可欠な要素であるということである。そして発達的な特徴としては、児童期から青年期にかけて個人のself-imageが分化し、多様な内容のself-imageが含まれるようになることや、学生の間は学校生活がself-imageの重要な要素であるのに対し、卒業後は職業や家庭がそれに代わることが示された。また、児童期から青年期にかけては自分の性格についてのself-imageが次第に顕著になり、高校生や大学生という子供時代の最終段階では希望や願望が顕著になる。そして、加齢が進むに従って、自己を包括的に意味づけたいという欲求が、self-imageに大きく反映されるようになることなどが示された。

2. 自我・自己研究における研究結果の位置づけ

本研究では、WAI技法を用いてself-imageの分析を行なった。これは、自我あるいは自己を心理学的に理解する上で、self-imageを分析することに意味があり、WAI技法がself-imageを実証的に捉えるのに有効な技法であると考えたからである。ここでは、本研究で得られた結果と自我・自己の問題との関連について若干考察を加えることにする。

第1章でも述べたように、自我・自己の問題は3つの視点から考えることができる。その視点とは、自我・自己の領域あるいは内容、構造、機能の3つである。そしてself-imageは、特に自我・自己がどのような領域に及ぶものであるかを理解する上で有効な概念と思われる。本研究では、WAI技法で得られた具体的なself-imageを内容分析し、基準書という形にまとめている。その結果を見ると、self-imageは、名前、性別、年齢などの基本的な属性、社会・家族の中での役割あるいは社会・家族に関する様々な態度、身体、能力、性格、欲求や願望、自己評価、趣味や好みなどのキャセクション、実存的な自己意識などに及

んでいる。これは、self-image が広い範囲に及ぶことを示しており、自我・自己の領域についてもこのような広い領域を考慮する必要があることを示唆している。自我・自己の領域をどのように考えるべきかということに関しては様々な考え方がある。例えば、James (1892) の物質的客我は、身体、所有物、家族、国家などの広い範囲を含んでいるが、Freud (1933) の理論では、外界と内界を区別する傾向が強い。このような考え方の違いは、自我・自己をどのようなものとして考えるかの違いによるところが大きく、双方の主張が対立することを必ずしも意味しているわけではない。しかし、本研究で得られた結果を見ると、少なくとも、個人の主観的な自我・自己の領域は、皮膚の内側に限定されるものではないと言えるであろう。

多くの個人から得られた self-image をまとめた基準書を見ると、自我・自己の主観的な領域が広い範囲に及ぶことがうかがわれるが、各個人を見ると、その範囲はそれぞれ異なり、従って自我・自己の領域もそれぞれ異なっていると考えられる。例えば、ある個人の self-image は社会全体に及び、また別の個人の self-image は個人的な生活の領域に限定されている。また、このような範囲の広さだけでなく、self-image の内容そのものも個人によって大きく異なっている。従って、自我・自己の領域を考える場合にも、その範囲や内容に大きな個人差があると考えられるべきであろう。むしろ、このような違いにこそ、その個人の固有性が反映されていると見るべきかも知れない。

基準書による反応の分析からだけでは明確にはわからないが、self-image の相互関連性の分析やインタビューを行なった結果を見ると（岩熊・榎田，1989）、self-image の中には、自分をよく表しているものとそうでないものが存在しているように思われる。つまり、self-image には、自分らしさを感じる程度、あるいは、自我関与の程度に違いがあると考えられる。これを“中心的な” self-image とか“周辺的な” self-image などと表現することもできる。中心から周辺に行くに従って、自分らしさが薄れ、自我関与も低くな

っていく。逆に言えば、自我関与の低いものを周辺の領域と呼ぶことができる。そして最終的には、自分らしさや自我関与を全く感じない領域に達するのである。James (1892) は、宇宙を自我と非自我に分け、両者の間に“一大破裂”があると述べているが（James 著 今田訳，1939，上巻 p. 215）、このような表現に従えば、周辺の外側には非自我の領域が存在すると言えるであろう。しかし、自分らしさや自我関与は、中心から徐々に薄れて行き、周辺においてわずかになり、やがて全く感じられなくなるといった変化をするものであり、周辺とその外側との間には James の言うような“一大破裂”は存在せず、自我と非自我の境界は曖昧なものと考えの方が自然であろう。従って、個人の自我を全宇宙と考えることや、“島宇宙”と考えることも可能であろう。むしろ重要なのは、どこに個人の自我・自己の主観的な中心があるかということになる。このようなことに対しても、WAI 技法によって self-image を捉えることは有効性を持っていると思われる。

自我・自己の構造については、構造というものをどのように考えるかによって様々なものがある。例えば、各個人自身が各 self-image を主観的にどのように関連づけているかという認知的な構造も、自我・自己の構造を考える上で有効なものと思われる（岩熊・榎田，1989）。それに対し、本稿では、WAI 反応の反応パターンから self-image の共変関係に基づく構造を分析した。これは、WAI 技法で得られた多くの個人の self-image を相互に位置づけたものであり、個人の中に想定される構造ではない。個人の各 self-image はその中に位置づけられ、個人もその中に位置づけられる。ここに位置づけられた self-image は、WAI 技法で得られたあらゆる self-image を含んでおり、この構造は、それらを個人差に基づいて位置づけている。従って、このような構造は、多くの個人の self-image の総体を理解したり、個人を比較する上で有効なものとなる。ところで、実際に得られた構造を見ると、小学生から高校生までの分析結果と小学生から老人までの分析結果の間に細かい違いはあるものの、両者は全体的に共通する部分が多い。まず、

この構造の中においては、意味内容の類似する **self-image** が近接して位置づけられる傾向がある。これは、個人の各 **self-image** の間に意味的な類似性が存在することを示唆している。しかし、意味内容の類似性と言っても、必ずしも一元的なものではなく、意味関連は多元的なものである。**self-image** に関して言えば、それに反映されている生活領域の近接性、それが表している態度や感情の類似性、あるいは、そのような **self-image** を生み出す自己意識の類似性など様々なものが、意味的な類似性として知覚される。例えば、小学生から老人までの分析では、I. 内容的把握-形式的把握の軸、II. 自己に対する意識の軸、III. 実存的意識・非日常的意識の軸、IV. 欲求・希望・願望の軸、V. 家系・家族の軸の5つの次元が得られている。これらの次元を見ると、主に自己意識の様相の類似性に基づいたまとまりを示しているように見える。つまり、それぞれの自己意識の強度の違いに、**self-image** の個人差が現れていると見ることができる。その一方で、これらすべての次元を用いて **self-image** を分類した結果であるクラスターには、生活領域の近接性を反映したものも含まれている。例えば、学校生活あるいは家族・職業が同一のクラスターに現れている。これは、このような生活領域が、類似した自己意識によって **self-image** に反映されていることを示唆している。そして、**self-image** は、このような自己意識によって捉えられ、表現されるものであり、自我・自己の構造を考える場合においても、このような自己意識を考慮する必要があると言えるであろう。

ところで、このようにして得られたクラスターは、槇田・佐野 (1965) のパーソナリティ・スキームともおおまかに対応している。このスキームは、個人のパーソナリティを理解する上で考慮すべき側面を示したもので、Allport (1937) のサイコグラフや、Cattell (1964), Eysenck (1947) などの考え方を参考にして作成されたものである。いわば、パーソナリティを理解する視点を専門家の目から呈示したものであるであろう。それに対し、一般の個人が自分というパーソナリティをどのように捉えているのかを調べ、それを共

変関係に基づいて分類したものが本研究で得られたクラスターと行うことができる。つまり、個人差に基づいて分類されたパーソナリティの側面、あるいは、個人の自己意識の違いから分類されたパーソナリティの側面と言える。従って、スキームとクラスターとの間に対応関係があるということは、パーソナリティをこれらの側面から理解することの妥当性を示唆していると言えるであろう。ただし、スキームとクラスターは完全に対応しているわけではなく、部分的に異なる点もある。例えば、クラスターでは、身体、能力、日常生活が1つのまとまりを形成しているのに対し、スキームでは、身体、能力はそれぞれ1つの側面として扱われ、日常生活は指向に含まれている。また、クラスターでは分離されていない職業と家庭は、スキームでは社会と家庭に分けられている。それに対し、スキームで指向としてまとめられているものは、多くのクラスターに分離している。スキームの各側面は、パーソナリティ全体を理解するために便宜的にまとめられたものであり、そもそも明確な境界を持つものではない。従って、スキームとクラスターとの間に範囲の違いがあることには何の不思議もないが、この違いは、自己意識からは個人のパーソナリティの基底を成す社会・生物学的な基礎があまり弁別されないのに対し、指向的な部分は細かく分類されることを意味しているとも見られるであろう。これは、パーソナリティあるいは自我・自己を理解する上で、指向的なものをより詳細に検討する必要性を示唆しているとも考えられる。

自我・自己には様々な主体的な機能が考えられるが、本研究は **self-image** を分析対象としており、自我・自己の機能を直接的に扱ったものではない。従って、本研究の結果から、自我・自己の機能について言及することはできない。しかし、**self-image** と自我・自己の機能の間には密接な関係があると考えられるため、ここでは、自我・自己が **self-image** に対しどのような働きをしているのかについて若干触れておくことにする。**self-image** は、主体的な自我・自己によって知覚あるいは想起され表現されたものであり、そこには主体的な自我・自己の機能が反映されている

ものと思われる。self-image の知覚・想起について言えば、上にも挙げたような自己意識によって self-image は捉えられていると考えられる。また、このような self-image の知覚や想起は、WAI 技法の施行時にのみ起こるものではなく、日常生活の様々な場面で行なわれ、個人が置かれた状況においてどのように行動すべきかの指針を与えていると考えられる。その結果、個人の行動には一貫性が生まれ、個人の同一性が維持される。その一方で、自らの self-image を作りだし、それを維持しているのも自我・自己である。個人は、自分に関する様々な情報を知覚し、その情報を処理し、自己にとって有効な self-image を作り上げている。また、そのような self-image を修正したり、捨てることによって、適切な self-image を維持しているとも考えられる。適切な self-image を作ることができなかったり、self-image の適切な修正ができない場合に心理的な不適応がおこると考えれば、Rogers (1951) の理論とも符合することになる。つまり、自我・自己は、このような self-image との相互作用を行なっていると考えられるのである。

以上のように、われわれの研究は self-image を分析対象としたものであるが、そこから自我・自己の問題についての若干の示唆も得られた。自我・自己には様々な問題があるが、self-image から自我・自己を理解していくことも部分的には可能と思われる。

3. 展望

最後に、今後の展望について述べることにする。まず、WAI 技法については、ここまでの研究で、基礎的な資料がほぼ集められたと言えるであろう。つまり、WAI 技法によって、どのような self-image が、どのような頻度で現れるかがほぼ明らかになった。また、反応カテゴリーである基準書も、ほぼ完成したと考えられる。今後は、不足している年齢層のデータを補いつつ、基準書の最終的な調整を行なう予定である。その一

方で、われわれの目的の1つに、WAI 技法をパーソナリティ診断に用いるための技法として確立することがある。そのため、WAI の多くの事例について、他の技法も併用しつつ、個人の分析を進めることが必要であろう。

分析技法については、本研究で用いられたいくつかの技法がある程度の有効性を持つことが示された。しかし、WAI 技法で得られる反応の分析技法については、まだ未発達な部分が多い。特に、個人の self-image の構造を分析する技法については、今後、より簡易で多くの個人を対象とできる施行方法や分析技法の開発が必要である。このような個人の分析の積み重ねにより、自我・自己についての理解も進むものと思われる。また、このような個人分析を統合するような分析技法も望まれる。その1つの解決策として、本研究では反応パターンの分析を行なった。反応パターンには個人の反応が全体的に反映されるため、self-image を全体的に捉えることにある程度成功したと言える。しかし、反応パターンには現れない個人の特徴もあり、今後、self-image の相互関連性の分析技法の開発と併せて、より多くの個人を、より包括的に捉えられるような分析技法を開発していく必要がある。

また、WAI 技法による self-image の分析によって、部分的に自我・自己を理解していくことも可能であることが示された。特に本研究の分析結果においては、self-image に指向的なものが多く、自我・自己の理解において大きな意味を持つことが示唆されている。しかし、基準書による反応の分析は、ア・プリオリな前提を持ち込んでいないため、全体的な反応傾向を探索的に調べるのには適しているが、特定の self-image を詳細に分析するには必ずしも適していない。従って、持向的な側面に焦点をあてた WAI 反応の詳細な分析カテゴリーの作成をして、self-image の指向的な側面について分析を行なうことも考えられる。このように指向的な側面の分析を行なうことにより、自我・自己についての新たな知見が得られるものと期待される。

6

引用文献

- Allport, G. W. 1937 *Personality: A psychological interpretation*. New York: Holt, Reinhart & Winston.
- Allport, G. W. 1943 Ego in contemporary psychology. *Psychological Review*, **50**, 451-478.
- Allport, G. W. 1955 *Becoming: Basic considerations for a psychology of personality*. New Haven: Yale University Press.
- Allport, G. W. 1961 *Pattern and growth in personality*. New York: Holt, Reinhart & Winston.
(今田恵監訳 1968 人格心理学 (上・下) 誠信書房)
- Bellak L., & Sheehy, M. 1976 The broad role of ego functions assessment. *American Journal of Psychiatry*, **133**, 1259-1264.
- Bem, D. J. 1967 Self-perception: An alternative interpretation of cognitive dissonance phenomena. *Psychological Review*, **74**, 188-200.
- Bugental, J. F. T., & Zelen, S. L. 1950 Investigation into 'self-concept': I. The W-A-Y technique. *Journal of Personality*, **18**, 483-498.
- Butler, J. M., & Haigh, G. V. 1954 Changes in the relation between self-concepts and ideal concepts consequent upon client-centered counseling. In C. R. Rogers & R. F. Dymond (Eds.), *Psychotherapy and personality change*. Chicago: University of Chicago Press, Pp. 55-75.
- Cattell, R. B. 1946 *Description and measurement of personality*. New York: World Book.
- Cooley, C. H. 1902 *Human nature and social order*. New York: Scribner's.
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.
(仁科弥生訳 1977 幼児期と社会 (1・2) みすず書房)
- Erikson, E. H. 1959 *Psychological issues*. Vol. 1. *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press.
(小此木啓吾訳編 1973 自我同一性 誠信書房)
- Eysenck, H. J. 1947 *Dimensions of personality*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- Fittes, W. H. 1964 *Tennessee self concept scale: Test booklet*. Nashville, Tenn.: Counselor Recordings and Tests, Department of Mental Health.
- Freud, A. 1936 *Das Ich und die Abwehrmechanismen*. Vienna: Internationaler Psychoanalytischer Verlag.
(外林大作訳 1958 自我と防衛 誠信書房)
- Freud, S. 1923 *Das Ich und das Es*. Vienna: Internationaler Psychoanalytischer Verlag.

- (井村恒郎訳 1970 自我とエス フロイド選集・4 自我論 日本教文社)
- Freud, S. 1933 *Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*. Vienna: Internationaler Psychoanalytischer Verlag.
- (懸田克躬・高橋義孝訳 1971 精神分析入門(正・続) フロイド著作集・1 人文書院)
- Goebel, B. L., & Brown, D. R. 1981 Age differences in motivation related to Maslow's need hierarchy. *Developmental Psychology*, **17**, 809-815.
- Gordon, C. 1968 Self-conceptions: Configurations of content. In C. Gordon, & K. J. Gergen (Eds.), *The self in social interaction*. Vol. 1. *Classic and contemporary perspectives*. New York: Wiley. Pp. 115-136.
- Gough, H. G., & Heibrun, A. B., Jr. 1980 *The Adjective Check List manual: 1980 edition*. Palo alto, Calif.: Consulting Psychologists Press.
- Grossack, M. M. 1960 The "Who Am I" Test. *Journal of Social Psychology*, **51**, 399-402.
- Gustav, A. 1962 Comparison of college grades and self-concept. *Psychological Reports*, **11**, 601-602.
- Haan, N. 1981 Common dimensions of personality development: Early adolescence to middle life. In D. H. Eichorn, J. A. Clausen, N. Haan, M. P. Honzik, & P. H. Mussen (Eds.), *Present and past in middle life*. New York: Academic Press. Pp. 117-151.
- Hartmann, H. 1939 *Ich=Psychologie und Anpassungs Problem*. Internationael Zeitschrift für Psychoanalyse und Imago.
- (霜田静志・篠崎忠男訳 1967 自我と適応 誠信書房)
- Huntley, C. W. 1940 Judgements of self based upon records of expressive behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **35**, 398-427.
- 岩熊史朗・楨田 仁 1989 個人のセルフ・イメージの構造——大学生を被験者とした WAI 反応の相互関連性の分析—— 心理学研究, **60**, 237-244.
- 岩熊史朗・楨田 仁 1991 セルフ・イメージの発達の変化——WAI 技法に対する反応・パターン分析—— 社会心理学研究, **6**, 155-164.
- James, W. 1890 *Principles of psychology*. New York: Holt. 2 vols.
- James, W. 1892 *Psychology: Briefer course*. New York: Holt.
- (今田恵訳 1939 心理学(上・下) 岩波文庫)
- Jones, J. G., & Strowig, R. W. 1968 Adolescent identity and self-perception as predictors of scholastic achievement. *Journal of Educational Research*, **62(2)**, 78-82.
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学 [第2版] 東京大学出版会
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 東京大学出版会
- 加藤隆勝 1987 青年期の意識構造 その変容と多様化 誠信書房
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における自己概念の特質と発達傾向 心理学研究, **51**, 279-282.
- 加藤孝義 1964 TST による肢体不自由者の自己態度について 臨床心理, **3(1)**, 42-45.
- Katz, P., & Zigler, E. 1967 Self-image disparity: A developmental approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **5**, 186-195.
- 川喜田二郎 1967 発想法 中公新書
- Kifer, E. 1975 Relationships between academic achievement and personality characteristics: A quasi-longitudinal study. *American Educational Research Journal*, **12**, 191-210.
- 菊池登紀子 1970 青年期における自己観 [1] ——私立女子高校生における発達の様相—— 岩手大学教育学部研究年報, **30**, 57-74.
- Kuhn, M. H., & McPartland, T. S. 1954 An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, **19**, 68-76.
- Lewin, K. 1935 *A dynamic theory of personality*. New York: McGraw.

- (相良守次・小川隆訳 1957 パーソナリティの力学説 岩波書店)
- McGuire, W. J., & McGuire, C. V. 1981 Spontaneous self-concept as affected by personal distinctiveness. In M. D. Lynch, A. A. Norem-Hebeisen, & K. J. Gergen (Eds.), *Self Concept: Advances in theory and research*. Cambridge, Mass.: Ballinger. Pp. 147-171.
- McGuire, W. J., McGuire, C. V., & Winton, W. 1979 Effects of household sex composition on the salience of one's gender in the spontaneous self-concept. *Journal of Experimental Social Psychology*, **15**, 77-90.
- McGuire, W. J., & Padawer-Singer, A. 1976 Trait salience in the spontaneous self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, **33**, 743-754.
- McLaughlin, B. 1966 The WAI dictionary and self-percieved identity in college students. In P. J. Stone, D. C. Dunphy, M. S. Smith, & D. M. Ogilvie (Eds.), *The general inquirer: A computer approach to content analysis*. Cambridge, Mass.: M.I.T. Press. Pp. 548-566.
- McPartland, T. S., & Cumming, J. H. 1958 Self-conception, social class, and mental health. *Human Organization*, **17**, 24-29.
- McPartland, T. S., Cumming, J. H., & Garretson, W. S. 1961 Self-conception and ward behavior in two psychiatric hospitals. *Sociometry*, **24**, 111-124.
- 榎田 仁・岩熊史朗 1988a WAI 技法を用いた Self-Image の研究 (1)——内容分析 (KJ 法) による基準書の作成—— 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, **28**, 61-71.
- 榎田 仁・岩熊史朗 1988b WAI 技法を用いた Self-image の研究 (2) ——WAI 反応の発達的变化—— 哲学 (慶應義塾大学三田哲学会), **87**, 305-327.
- 榎田 仁・岩熊史朗 1990 WAI 技法を用いた自我の実証的研究 (1) 組織行動研究 (慶應義塾大学産業研究所), No. 25. (Vol. 16)
- 榎田 仁・佐野勝男 1965 Dosefu-Test 基本生活領域の診断——テスト解説—— 金子書房
- 間宮 武 1974 生徒の内面形成を促進するうえで必要な教育上の配慮について 文部省教育研究開発調査研究委嘱報告書
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- Marcia, J. E. 1976 Identity six years after: A follow-up study. *Journal of Youth and Adolescence*, **5**, 145-160.
- Markus, H. 1977 Self-schemata and processing information about the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 63-78.
- Mason, E. P., Adams, H. L., & Blood, D. F. 1968 Further study of personality characteristics of bright college freshmen. *Psychological Reports*, **23**, 395-400.
- 松本 巖 1967 20 答法による初任科生の自己態度 科学警察研究所報告 (防犯少年編), **8(2)**, 76-81.
- Mead, G. H. 1934 *Mind, self and society*. Chicago: University of Chicago Press.
(稲葉三千男他訳 1973 精神・自我・社会 青木書店)
- Montemayor, R., & Eisen, M. 1977 The development of self-conceptions from childhood to adolescence. *Developmental Psychology*, **13**, 314-319.
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀 洋道 1966 自我と適応との関係についての研究——Self-differential 作成の試み—— 東京教育大学教育学部紀要, **12**, 84-91.
- Nel, E., Helmreich, R., & Aronson, E. 1969 Opinion change in the advocate as a function of the persuasibility of his audience: A clarification of meaning of dissonance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **12**, 117-124
- 西村春夫・星野 命 1964 自己態度の記述の心理的負荷について 科学警察研究所報告 (防犯少年編), **5(2)**, 13-28.

- Riley, M. F., & Foner, A. 1968 *Aging and society, I: An inventory of research findings*. New York: Russell Sage Foundation.
- Roethlisberger, F. L., & Dickson, W. J. 1939 *Management and the worker*. Cambridge: Harvard University Press.
- Rogers, C. R. 1951 *Client-centered therapy: It's current practice, implications and therapy*. Boston: Houghton.
- (伊藤博訳編 1967 パースナリティ理論 ロージャズ全集 8 岩崎学術出版社)
- Rogers, C. R. 1959 A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships as developed in the client-centered framework. In S. Koch (Ed.) *Psychology: A study of a science*. Vol. 3. New York: McGraw-Hill, Pp. 184-256.
- Ruff, G. E., & Levy, E. Z. 1959 Psychiatric evaluation of candidates for space flight. *American Journal of Psychiatry*, **116**, 385-391.
- Ryff, C. D., & Heincke, G. 1983 Subjective organization of personality in adulthood and aging. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 807-816.
- Sarbin, T. R., & Rosenberg, B. G. 1955 Contributions to role-taking theory: IV. A method for obtaining a qualitative estimate of the self. *Journal of Social Psychology*, **42**, 71-81.
- 下仲順子・村瀬孝雄 1976 加齢と性差よりみた老人の自己概念 教育心理学研究, **24**, 156-166.
- Snyder, M. 1974 Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 526-537.
- Stephenson, W. 1953 *The study of behavior*. Chicago: University of Chicago Press.
- 高垣忠一郎 1974 TST にあらわれた反応の心理的負荷について 京都大学教育学部紀要, **20**, 209-227.
- 高垣忠一郎 1975 TST (20 答法) における 2 つの反応様式について 京都大学教育学部紀要, **21**, 18-25.
- Waterman, A. S., Geary, P., & Waterman, C. 1974 Longitudinal study of changes in ego identity status from freshman to the senior year at college. *Developmental Psychology*, **10**, 387-392.
- Waterman, A. S., & Goldman, J. A. 1976 Longitudinal study of changes in ego identity development at a liberal arts college. *Journal of Youth and Adolescence*, **5**, 361-370.
- Waterman, A. S., & Waterman, C. K. 1971 Longitudinal study of changes in ego identity status during the freshman year at college. *Developmental Psychology*, **5**, 167-173.
- Wellman, B. 1971 "I am a student." *Sociology of Education*, **44**, 422-437.
- Wolff, W. 1932 Selbstbeurteilung und Fremdbeurteilung im wissentlichen und und unwissentlichen Versuch. *Psychologisch Forschung*, **16**, 251-329.
- Zelen, S. L. 1954 Acceptance and acceptability: An examination of social reciprocity. *Journal of Consulting Psychology*, **5**, 316.

7

資料

1. 1989 年度版基準書 ……………75
2. WAI 事例集……………97

1. 1989 年度版基準書

基準書は、WAI 反応のための評価カテゴリーである。基準書は、WAI 反応の内容分析の結果に基づいて帰納的に作成されており、1983 年に初版が作成されて以来、数回の改訂が施されている。基準書の第7版にあたる 1989 年度版には、小項目と呼ばれる 199 のカテゴリーがあり、それらは大項目と呼ばれる 9 つの上位カテゴリーに分類されている。

ここでは、1989 年度版基準書の全カテゴリーの小項目名と例示を掲載した。小項目名は、各カテゴリーの全体を代表するように付けられており、例示は、実際どのような反応がそのカテゴリーに分類されるかを示している。実際の分類評価においては、小項目名と例示を総合的に見て、最も近いと思われるカテゴリーに反応を分類することになる。小項目の中には、例示を挙げていないものもあるが、その場合は、小項目のみが分類評価の基準となる。なお、基準書の巻末には、小項目名及び例示の五十音順索引を掲載してある。

1989 年度版基準書の構成は右のようになっている。

大項目名	小項目番号	ページ
1. 社会	101~118	76
2. 家庭	201~212	77
3. 个体	301~303	78
4. 能力	401~410	78
5. 情意	501~562	79
6. 力動	601~632	82
7. 指向	701~759	85
8. その他	801~802	88
9. 無回答	901	88
索引		89

1. 社会

小項目名	例 示
101 名前	・名前
102 ニックネーム	・私は人から「チャコ」と呼ばれています ・ニックネームは～です
103 性別	・男・女
104 年齢・世代	・年齢 ・未成年、中年 ・三十代 ・思春期 ・大人と子供の間
105 生年月日	・～年～月～日生まれ ・戦前派・戦後派 ・犬年生まれ ・昭和一桁
106 住所	・東京都民 ・杉並区に住んでいる
107 出身	・～出身 ・江戸っ子、浜っ子 ・本籍は～ ・～で生まれた
108 人種・国籍	・東洋人 ・アングロサクソン人 ・日本人 ・国籍はアメリカ
109 学校	・学校が好き ・学校へ行きたくない ・先生が嫌い ・学校名、学生、学年、学部、 学籍番号 ・浪人、受験生 ・高校生活は面白かった
110 クラブ・ サークル	・～ゼミに入っている ・～ゼミのOB ・児童文化研究会に入っている ・クラブに青春をかけている ・～サークルの幽霊部員です ・学生時代はラグビー部だった ・会社でサークルに入っている

小項目名	例 示
111 職場・職業	・上司とうまく行っている ・仕事に不熱心 ・上司に恵まれていない ・会社名、会社員、社会人 ・職種、仕事内容、部署 ・仕事が忙しい ・無職
112 収入	・年取、月取、収入が多い・少ない ・年金を～円もらっている
113 所属団体	・町内会の役員です ・町内会長です
114 経歴	・学歴 ・出身校 ・職歴 ・勤続年数
115 故郷	・故郷が懐かしい ・故郷に帰りたい ・故郷が嫌い ・故郷は遠きにありて思うもの ・郷土愛が強い
116 友人	・友人を大切にしている ・友人が多い・少ない ・～君と友達
117 恋人	・恋人がいる ・片思い中 ・～さんは私の恋人です
118 人間関係	・仲間意識が強い ・人間関係に疲れている ・顔が広い ・～の後輩です

2. 家庭

小項目名	例 示
201 家庭内の役割	<ul style="list-style-type: none"> ・夫、母、嫁、～の子供。 ・妊婦（もうすぐ母親になる） ・一人っ子、兄 ・～人兄弟の～番目 ・～家の一員 ・親父である ・世帯主 ・当主 ・扶養家族を持っている ・主婦
202 両親	<ul style="list-style-type: none"> ・両親とうまくいっている ・親孝行 ・親を大切にしない ・両親健在
203 父親	<ul style="list-style-type: none"> ・父親が好き ・父親とうまくいっていない ・父親がいない
204 母親	<ul style="list-style-type: none"> ・母親を尊敬している ・母親と仲が悪い
205 兄弟姉妹	<ul style="list-style-type: none"> ・弟思い ・兄弟のことがたまに気になる ・兄弟と仲が悪い ・～人兄弟
206 子供	<ul style="list-style-type: none"> ・子煩悩 ・自分の子供が嫌い ・子供が一人いる ・子供に厳しい
207 配偶者	<ul style="list-style-type: none"> ・良妻賢母の妻がいる ・夫とうまくいっていない ・夫と死別
208 祖父母	<ul style="list-style-type: none"> ・おばあちゃん子 ・祖父と仲が悪い ・祖父母は健在
209 孫	<ul style="list-style-type: none"> ・孫が可愛い ・孫はうるさい ・孫は元気だ
210 親戚・親族	<ul style="list-style-type: none"> ・叔父（叔母・姪・従兄弟）が好き ・姑とうまくいっていない ・あまり親戚付き合いはしてない

小項目名	例 示
211 家族・家庭	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭は安らぎの場 ・家族に冷たい ・～人家族
212 家系・家柄	<ul style="list-style-type: none"> ・～家の子孫 ・上流階級

3. 個 体

小項目名	例 示
301 容姿・体格	<ul style="list-style-type: none"> ・身長、体重 ・やせている ・太っている ・背が低い・高い ・中肉中背 ・体格が良い・悪い ・筋肉質 ・手足が短い ・容姿は人並 ・顔が大きい ・色黒 ・父親に似ている ・母親似
302 健康・体質	<ul style="list-style-type: none"> ・健康である・持病がある ・体力がある・ない ・目が悪い ・疲れやすい ・ひ弱、貧血 ・血液型 ・～体質（アレルギー体質） ・汗かき ・寒がり、暑がり ・利き手（左利き）
303 身体的能力	<ul style="list-style-type: none"> ・テニスが得意 ・運動神経が発達している ・スポーツマン ・器用・不器用 ・味覚が発達している ・音痴 ・歌が下手 ・リズム感 ・声が大きい ・腕力がある ・字が上手・下手・きれい・汚い

4. 能 力

小項目名	例 示
401 頭が良い	<ul style="list-style-type: none"> ・見通しがきく ・頭はまあまあ賢い ・頭は悪いわけではない ・IQ（知能指数）が高い ・頭の回転は速い方である
402 頭が悪い	<ul style="list-style-type: none"> ・知能が低い ・頭の回転が遅い
403 専門能力 がある	<ul style="list-style-type: none"> ・英語が得意 ・ピアノが得意 ・経営・営業能力がある
404 専門能力 がない	<ul style="list-style-type: none"> ・英語が不得意 ・経営・営業能力がない ・理数系が天敵である
405 対人能力 がある	<ul style="list-style-type: none"> ・指導力がある ・組織力がある ・説得力がある
406 対人能力 がない	<ul style="list-style-type: none"> ・指導力がない ・組織力がない ・説得力がない
407 一般能力 がある	<ul style="list-style-type: none"> ・勉強が得意 ・美的センスがある ・人の真似が上手
408 一般能力 がない	<ul style="list-style-type: none"> ・成績が悪い ・美的センスがない
409 博識・物知り	<ul style="list-style-type: none"> ・知識がある ・博識 ・物知り
410 資格・免許	<ul style="list-style-type: none"> ・運転免許を持っている ・英検2級を持っている ・剣道5段 ・書道3段

5. 情 意

小項目名	例 示
501 社交的	<ul style="list-style-type: none"> ・外向的 ・気さく ・愛想が良い ・親しみやすい ・人見知りしない ・気やすい ・同調的 ・協調性がある ・人付き合いがよい ・集団で何かするのが好き
502 開放的	<ul style="list-style-type: none"> ・秘密を持たない ・思ったことをすぐ顔に出す ・嘘が下手 ・嘘をついてもすぐばれる
503 明るい	<ul style="list-style-type: none"> ・明朗 ・陽気 ・快活 ・笑い上戸 ・おちゃめ
504 にぎやか	<ul style="list-style-type: none"> ・騒がしい ・面白い ・ひょうきん ・宴会要員
505 おしゃべり	<ul style="list-style-type: none"> ・口が軽い ・口数が多い ・話し上手 ・人前で話すのが得意 ・話題が豊富 ・人と話していてもネタのつきたことがない
506 ユーモア がある	<ul style="list-style-type: none"> ・ユーモアがある ・冗談が好き
507 温厚	<ul style="list-style-type: none"> ・寛容 ・鷹揚 ・おおらか ・温和 ・おだやか ・温かい
508 優しい	<ul style="list-style-type: none"> ・思いやりがある ・親切 ・気だてがよい

小項目名	例 示
509 世話好き	<ul style="list-style-type: none"> ・面倒見が良い ・人の相談にのるのが好き ・おせっかい ・気が利く ・よく気が付く
510 頼りがい がある	<ul style="list-style-type: none"> ・人から頼りにされる ・相談役・調整役になる ・包容力がある
511 お人好し	<ul style="list-style-type: none"> ・情にもろい ・同情しやすい ・涙もろい ・人が良い ・人を信じやすい
512 寂しがりや	<ul style="list-style-type: none"> ・一人でのいるのが嫌い
513 積極的	[例示なし]
514 行動的	<ul style="list-style-type: none"> ・実行型 ・じっと考えるのは嫌い ・行動しながら考える
515 活発	<ul style="list-style-type: none"> ・おてんば ・元気 ・エネルギーがある
516 おつちよこ ちよい	<ul style="list-style-type: none"> ・そそっかしい ・ドジ ・軽率 ・うっかり ・早のみこみをする ・あわてもの ・落ち着きがない
517 せつかち	<ul style="list-style-type: none"> ・気ぜわしい ・せかせかしている
518 お調子者	<ul style="list-style-type: none"> ・調子にのりやすい ・おせじによわい ・のせられやすい
519 好奇心旺盛	<ul style="list-style-type: none"> ・詮索好き ・野次馬 ・何事にも関心を持つ ・気が多い

小項目名	例示
520 柔軟性がある	<ul style="list-style-type: none"> ・融通がきく ・気分転換がうまい ・気持ちのきりかえが速い ・わりきりが速い ・適応性がある ・順応性がある
521 素直	<ul style="list-style-type: none"> ・従順
522 楽観的	<ul style="list-style-type: none"> ・物事にこだわらない ・物事を気軽に考える ・くよくよしない ・小事に拘らない ・さっぱりしている ・先のことは余り考えない ・これといった悩みがない
523 おおざっぱ	<ul style="list-style-type: none"> ・ずぼら ・ややこしいことが嫌い ・几帳面でない ・繊細さに欠ける
524 のんき	<ul style="list-style-type: none"> ・のんびりしている ・おっとりしている ・気が長い ・気長に待ってられる
525 抑鬱的	<ul style="list-style-type: none"> ・わけもなく落ち込むことがある ・一人でいたくなることがある
526 度胸がある	<ul style="list-style-type: none"> ・タフ ・気丈 ・芯が強い ・逆境に強い ・動揺しない ・大胆 ・あがらない ・勇敢 ・あまりびくびくしない
527 意志が強い	<ul style="list-style-type: none"> ・自制心が強い ・意志が強い
528 忍耐強い	<ul style="list-style-type: none"> ・根気がある ・我慢強い ・粘り強い ・根性がある ・やり通す

小項目名	例示
529 強情・頑固	<ul style="list-style-type: none"> ・融通がきかない ・切り替えが下手 ・順応性がない
530 努力家	<ul style="list-style-type: none"> ・頑張り家 ・地道 ・勤勉 ・働き者
531 主体性がある	<ul style="list-style-type: none"> ・しっかりしている ・自立心がある ・自分をちゃんと持っている
532 まじめ・誠実	<ul style="list-style-type: none"> ・フェア ・公正 ・陰口をきかない ・正直者 ・曲がったことは嫌い
533 責任感がある	<ul style="list-style-type: none"> ・義務を果たす ・義理堅い ・律儀
534 常識がある	<ul style="list-style-type: none"> ・常識家 ・礼儀を知っている
535 凝り性	<ul style="list-style-type: none"> ・一途 ・情熱家 ・物事に熱中しやすい
536 几帳面	<ul style="list-style-type: none"> ・やりかけたことを残すと気になる ・身の回りのものはきちんとしておく ・まめ ・きれい好き ・潔癖 ・掃除好き ・いつも部屋のなかをきれいにしている
537 約束を守る	<ul style="list-style-type: none"> ・パンクチュアル
538 慎重	<ul style="list-style-type: none"> ・じっくり腰を据えて考える ・用心深い ・無理なことはしない
539 追い込み型	<ul style="list-style-type: none"> ・スロースターター ・取り掛かるのが遅い

小項目名	例 示
540 のろま	<ul style="list-style-type: none"> ・のろい ・とろい ・ゆっくりしている
541 無神経	<ul style="list-style-type: none"> ・鈍感 ・にぶい ・無頓着 ・図々しい ・図太い ・ふてぶてしい ・あつかましい
542 非社会的	<ul style="list-style-type: none"> ・内向的 ・非社会的 ・自分の世界にこもりがち ・人付き合いが嫌い・下手 ・孤独が好き ・大勢でいるのが嫌い ・一人でいても平気 ・無愛想 ・とつつきにくい ・あいきようがない ・ぶつきらぼう
543 無口・口下手	<ul style="list-style-type: none"> ・口が堅い ・聞き役にまわる ・口数が少ない ・寡黙 ・無駄口は聞かない ・大勢で話しをするのは苦手 ・人前で話すのが苦手、下手 ・自分の考えをストレートに表せない ・自分自身を表現することが苦手
544 暗い	<ul style="list-style-type: none"> ・根暗 ・陰気
545 冷静	<ul style="list-style-type: none"> ・クール ・感情的にならない ・冷たい ・冷めている ・ニヒリスト ・非情

小項目名	例 示
546 無頓着	<ul style="list-style-type: none"> ・まわりを気にしない ・世間体を気にしない ・回りが気にならない ・世事に無関心 ・気が利かない ・他人に対する気配りに欠ける
547 感情を表さない	<ul style="list-style-type: none"> ・無表情 ・喜怒哀楽が顔に出ない
548 執着心がない	<ul style="list-style-type: none"> ・淡泊 ・熱中することがない ・欲がない ・野心がない ・物欲がない
549 ものぐさ	<ul style="list-style-type: none"> ・怠け者 ・面倒くさがり屋 ・横着 ・筆不精 ・ぐうたらしているのが好き ・じっとしているのが好き ・ぼんやりしている ・エネルギーがない ・無気力 ・ぼ一つとしている
550 思考的	<ul style="list-style-type: none"> ・一人で考えるのが好き ・行動より頭で考えるタイプ
551 理屈っぽい	<ul style="list-style-type: none"> ・理屈をこねるのが好き ・真理を追求する ・理論家 ・議論好き
552 細かいことが好き	[例示なし]
553 繊細	<ul style="list-style-type: none"> ・敏感 ・ナイーブ ・デリケート ・傷つきやすい ・感受性豊か
554 要領が良い	<ul style="list-style-type: none"> ・世渡りがうまい ・調子がよい

小項目名	例 示
555 要領が悪い	<ul style="list-style-type: none"> ・世渡りが下手 ・時間配分が悪い
556 経済観念がない	<ul style="list-style-type: none"> ・浪費的 ・衝動買いをしてしまう ・やりくりが下手 ・いつも赤字を出している
557 経済観念がある	<ul style="list-style-type: none"> ・節約的 ・やりくり上手 ・貯金がうまい
558 はっきりしている	<ul style="list-style-type: none"> ・思ったことをまっすぐに言う ・物事をはっきりさせる ・白黒をはっきりさせる
559 男らしさ・女らしさ	<ul style="list-style-type: none"> ・女らしい ・男っぽい ・男まさり
560 忘れっぽい	<ul style="list-style-type: none"> ・忘れものばかりしている ・健忘症気味
561 通俗的 性格類型	<ul style="list-style-type: none"> ・典型的な～型の性格。 ・典型的な長女タイプの性格 ・典型的なA型人間 ・(通俗的性格分類)
562 その他	(情意その他)

6. 力 動

小項目名	例 示
601 自己中心的	<ul style="list-style-type: none"> ・自分勝手 ・傍若無人 ・独断的 ・思いや里没有 ・わがまま ・身勝手
602 気分屋	<ul style="list-style-type: none"> ・気分に変がある ・今泣いた鳥がもう笑った
603 好き嫌いが激しい	<ul style="list-style-type: none"> ・人の好みははっきりしている
604 飽きっぽい	<ul style="list-style-type: none"> ・移り気 ・浮気っぽい ・熱しやすく冷めやすい ・根気がない ・諦めが早い ・粘りが没有 ・忍耐力がない ・持続性がない ・三日坊主
605 感情的	<ul style="list-style-type: none"> ・自制心がない ・衝動的 ・克己心がない ・感情が激しい ・感情を抑えられない ・うれしがり屋 ・泣き虫
606 短気	<ul style="list-style-type: none"> ・短気である ・怒りっぽい ・けんか早い
607 攻撃的	<ul style="list-style-type: none"> ・気が強い ・きつい ・強引 ・競争心が強い ・気が荒い ・けんかずき

小項目名	例 示
608 見栄っぱり	<ul style="list-style-type: none"> ・他人に良く見せようとする ・ええかつこしい ・人にかっこいいところをみせたがる ・自己主張が強い ・我が強い ・目だちたがり屋 ・派手好き
609 自信過剰	<ul style="list-style-type: none"> ・自惚れや ・自信をもちすぎる ・プライドが高い ・自信家 ・自尊心が強い ・人を見下す ・人をばかにする
610 野心的	<ul style="list-style-type: none"> ・向上心がある ・高望み ・理想が高い
611 負けず嫌い	<ul style="list-style-type: none"> ・勝気 ・くやしがりや ・人とはりあいたがる ・意地っぱり ・強がり ・すぐ意固地になるのは欠点
612 生意気	<ul style="list-style-type: none"> ・かわいげがない
613 子供っぽい	<ul style="list-style-type: none"> ・無邪気 ・考えが幼稚です ・甘えんぼう ・家にいると親に甘えてしまつて何もしない ・世間知らず ・考えが甘い
614 主体性がない	<ul style="list-style-type: none"> ・依存心が強い ・すぐ相談する ・自立心がない ・付和雷同 ・自主性がない ・人に左右されやすい ・優柔不断 ・ぐずぐずする傾向がある

小項目名	例 示
615 感情的	<ul style="list-style-type: none"> ・自己暗示にかかりやすい ・感情移入しやすい ・被暗示性 ・ロマンチスト ・ムード派 ・夢多き人 ・空想家 ・夢想家
616 責任感がない	<ul style="list-style-type: none"> ・いい加減 ・投げやり ・ルーズ ・だらしない ・責任転嫁しやすい
617 神経質	<ul style="list-style-type: none"> ・神経が細かい
618 心配症	<ul style="list-style-type: none"> ・くよくよ悩む ・すぐ気に悩む ・悩みが多い ・後悔ばかりしている ・物事を気にする ・不安を感じやすい ・出かけるときに戸締りがあれこれ気になる ・悲観的 ・何事も悪い方に考える傾向にある ・まわりを気にする ・相手の顔色を気にする ・世間体を気にする ・人の言うことを気にする ・気を使い過ぎる
619 小心者	<ul style="list-style-type: none"> ・気が弱い ・気が小さい ・意気地がない ・はつきり「ノー」と言えない ・臆病 ・小心 ・あがりやすい ・緊張しやすい ・焦る
620 恥しがり屋	<ul style="list-style-type: none"> ・照れ屋 ・はにかみ屋 ・人見知り

小項目名	例 示
621 目立ち たくない	<ul style="list-style-type: none"> ・おとなしい ・静か ・目立たない ・地味 ・我が強くない ・消極的 ・(積極性に欠ける) ・派手な事は嫌い ・自分をあまり飾りたてない方
622 ナルシスト	<ul style="list-style-type: none"> ・自意識が強い ・自分がかわいい
623 ひがみつばい	<ul style="list-style-type: none"> ・やきもちやき ・妬み深い ・うらやましがり屋 ・いじけやすい ・卑屈 ・疑い深い
624 意地悪	<ul style="list-style-type: none"> ・陰険 ・あげあしとり ・口が悪い ・皮肉屋 ・辛らつなことを言う ・人をすぐにとがめてしまう ・批判癖
625 しつこい	<ul style="list-style-type: none"> ・執念深い ・根にもつ ・未練がましい
626 物事に こだわる	[例示なし]
627 ずるい	<ul style="list-style-type: none"> ・悪知恵が働く
628 うそつき	<ul style="list-style-type: none"> ・ほらふき ・虚言癖がある
630 ～ぶる	<ul style="list-style-type: none"> ・かわい子ぶる ・ぶりっ子 ・真面目ぶる ・偽善的、偽悪的
630 あまのじゃく	<ul style="list-style-type: none"> ・素直でない ・ひねくれもの ・反発心が強い

小項目名	例 示
631 多重人格	<ul style="list-style-type: none"> ・明るいかど暗い ・優しさと厳しさが同居 ・積極的であるようできて引っ込み 思案です ・二重人格 ・人格が分裂している ・多重人格
632 恐怖症	<ul style="list-style-type: none"> ・高所恐怖症 ・赤面恐怖症 ・脅迫観念的

7. 指 向

小項目名	例 示
701 成長欲求	<ul style="list-style-type: none"> ・自分を成長させたい ・明日に向かって生きている ・アイデンティティを確立させていきたい ・目標に向かって努力する ・偉大な画家になりたい ・仕事で成功したい ・神の真理をみつけない ・自分について人間についてもっと知りたい
702 進学の希望	<ul style="list-style-type: none"> ・進学したい ・～大学に入りたい
703 就職の希望	<ul style="list-style-type: none"> ・～という職業に就きたい ・～という職業に就きたくない ・看護婦さんになりたい ・水商売はしたくない
704 結婚に 関する願望	<ul style="list-style-type: none"> ・結婚したい ・結婚生活に慣れる ・～と結婚したい
705 容姿に 対する意識	<ul style="list-style-type: none"> ・やせたい ・きれいになりたい ・もう少し身軽になりたい ・格好は気にしない ・髪をのぼそうと思う ・身だしなみを気にする ・ファッションに興味がある
706 健康に 対する意識	<ul style="list-style-type: none"> ・健康になりたい ・体力が欲しい ・健康を気にする ・健康のためジョギングしている
707 能力に 関する願望	<ul style="list-style-type: none"> ・歌がうまくなりたい ・スキーがうまくなりたい
708 性格を 変えたい	<ul style="list-style-type: none"> ・～な人間に成りたい ・機転が利く人間になりたい
709 逃避願望	<ul style="list-style-type: none"> ・蒸発したい ・消えたい ・家出したい ・大人になりたくない ・できるなら逃避したい

小項目名	例 示
710 非現実的願望	<ul style="list-style-type: none"> ・翼が欲しい ・猫になりたい
711 老後の希望	<ul style="list-style-type: none"> ・長寿でありたい ・老後はのんびり暮らしたい ・年をとっても老けたくない ・定年後は～したい
712 老いに 対する意識	<ul style="list-style-type: none"> ・年はとりたくない ・最近誕生日がきてても嬉しくない ・老いを感じる ・近ごろめつきり白髪が増えた ・鏡を見る度年を感じる
713 現在の欲求	<ul style="list-style-type: none"> ・ワープロを買いたい ・テニスがしたい ・(～がしたい・欲しい。) ・お金が欲しいなあ
714 将来	<ul style="list-style-type: none"> ・将来は外国で暮らしたい ・将来の希望はまだない ・10年後は母親になっているだろう ・未来への明確なビジョンはまだない
715 自分に満足	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の性格に満足 ・自分の性格が好き ・自分の生き方に満足している
716 自分は幸せ	<ul style="list-style-type: none"> ・人間に生まれてよかった ・日本人でよかった ・毎日が楽しい
717 自分に不満	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が嫌い ・自分の性格に不満 ・自分の性格が嫌い ・自分の生き方に不満がある ・私は欠点だらけです ・劣等感がある ・自分はまだ未熟
718 自分は不幸	<ul style="list-style-type: none"> ・生きているのは辛い ・なぜこんな時代に生まれたのだろう
719 将来性がある	<ul style="list-style-type: none"> ・可能性のある人 ・絶対大きくなる人 ・21世紀を背負う人

小項目名	例 示
720 平凡	<ul style="list-style-type: none"> ・平凡な生活 ・人畜無音 ・無難な人間 ・その他大勢
721 個性的	<ul style="list-style-type: none"> ・個性がある ・ユニーク ・人の真似が嫌い
722 自己と他者の 評価の違い	<ul style="list-style-type: none"> ・人から誤解されやすい ・他人に本当より良く思われている
723 もてる	[例示なし]
724 もてない	[例示なし]
725 硬派	[例示なし]
726 軟派	<ul style="list-style-type: none"> ・エッチ ・好色家
727 欲張り	<ul style="list-style-type: none"> ・けち ・セコい ・守銭奴
728 マイペース	<ul style="list-style-type: none"> ・独立自尊
729 生活目標・ 心がけ	<ul style="list-style-type: none"> ・余暇は有意義に過ごすべきだ ・毎日が充実するように生きる ・一日を大切にしたい ・ものを大切にする
730 現在の気分	<ul style="list-style-type: none"> ・気分良好 ・気分が安定している ・悩んでいる ・落ち込んでいる
731 日課・習慣	<ul style="list-style-type: none"> ・起床は6時 ・電話をよくする ・タバコを吸う ・ピアノを習っている ・掃除、洗濯に明け暮れています

小項目名	例 示
732 生活状態	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日忙しい ・犬を飼っている ・経済的に自立している ・アルバイト ・独身貴族 ・共働き ・その日暮し ・アパート暮らし ・寮生、下宿人 ・下町育ち ・山の上に住んでいる ・～と暮らしている ・独身、新婚、離婚 ・一人暮らし ・未婚、再婚 ・金婚式 ・別居中 ・単身赴任 ・未亡人 ・結婚～年
733 政治指向	<ul style="list-style-type: none"> ・政治に関心がある ・支持政党 ・政治家の～さんが好き、嫌い ・世の中すべて力
734 経済指向	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日必ず経済新聞を読む ・株に興味がある ・経済摩擦が気になる ・世の中すべて金
735 宗教指向	<ul style="list-style-type: none"> ・信仰は重んずるべきだ ・キリスト教の信者である ・浄土真宗である ・～を信じない ・神は存在する
736 社会指向	<ul style="list-style-type: none"> ・社会問題に興味がある ・社会の役に立ちたい
737 革新的	<ul style="list-style-type: none"> ・新しいもの好き ・革新的 ・常に流行の先端を行っている ・変化を好む
738 保守的	<ul style="list-style-type: none"> ・保守的 ・流行を追うのが嫌い

小項目名	例 示
739 審美指向	<ul style="list-style-type: none"> ・骨董品などに心を魅かれる ・絵をかくのが好き ・音楽が好き ・美しいものに憧れる ・星を見るのが好き ・茶道、華道、書道
740 飲食への指向	<ul style="list-style-type: none"> ・辛いものが好き ・甘党 ・食べるのが好き ・酒好き
741 スポーツ への指向	<ul style="list-style-type: none"> ・運動をするのが好き ・野球を観るのが好き ・好きなスポーツ
742 旅行への指向	<ul style="list-style-type: none"> ・旅行するのが好き ・趣味は旅行
743 ギャンブル への指向	<ul style="list-style-type: none"> ・賭事が好き ・麻雀はつきあい程度
744 勉強・学問 への指向	<ul style="list-style-type: none"> ・勉強が好き ・文系が嫌い ・哲学が好き
745 人の好き嫌い	<ul style="list-style-type: none"> ・タバコを吸う人とはつき合いたくない ・背の高い人が好き ・厚化粧の女は嫌い ・京都、東京の人が好き ・都会の人、田舎者が好き ・貧乏ゆすりをする人は嫌い
746 懐古的記述	<ul style="list-style-type: none"> ・よく昔の思い出にふける ・過去を省みることが多い
747 趣味	<ul style="list-style-type: none"> ・ドライブ、料理、映画が趣味 ・将棋が趣味 ・手芸、洋裁、読書が趣味 ・オーディオが好き ・カラオケが趣味

小項目名	例 示
748 好み	<ul style="list-style-type: none"> ・赤より白が好き ・山が好き ・子供が好き ・人混みが嫌い ・自然が好き
749 生死に対する 意識	<ul style="list-style-type: none"> ・死は美しい ・死を受け入れる ・生きることは素晴らしい ・死ぬのも運命です
750 運命観	<ul style="list-style-type: none"> ・運命を信じる ・運がいい ・占いを信じる
751 自然観	<ul style="list-style-type: none"> ・自然は偉大 ・地震が怖い
752 超自然	<ul style="list-style-type: none"> ・時の流れはとめられない ・四次元の世界はあるとおもう
753 私は私	<ul style="list-style-type: none"> ・私は私自身です ・私以外の何者でもない
754 私は誰	<ul style="list-style-type: none"> ・私はなんだろう ・私は...わからない ・どこからきてどこにいくのだろう ・何のために生きているのだろう
755 実存的記述	<ul style="list-style-type: none"> ・生きている ・存在する個体 ・私一人しかいない
756 人間	<ul style="list-style-type: none"> ・宇宙人、地球人 ・生物、人間 ・手が2本、足が2本
757 隠喩的な記述	<ul style="list-style-type: none"> ・私は花、私は象 ・はずれ者 ・変わり者 ・アホ、バカ、天才
758 その他	(指向その他)
759 戦争体験	<ul style="list-style-type: none"> ・東京大空襲で家を焼かれた ・戦争の時に集団疎開した ・終戦直後の混乱期を生き抜いた

8. その他

小項目名	例 示
801 WAIに 関する記述	(WAIに対する批判・感想)
802 無効回答	(ふざけて書かれた回答) (理解できない回答)

9. 無回答

小項目名	例 示
901 無回答	(全く書かれていない回答) (不完全で意味を成さない回答)

索引

あ

IQ (知能指数) が高い……401
 あいきょうがない……542
 愛想が良い……501
 相手の顔色を気にする……618
 アイデンティティを確立させたい……701
 赤より白が好き……748
 あがらない……526
 あがりやすい……619
 明るい……503
 明るいけど暗い……631
 飽きっぽい……604
 諦めが早い……604
 あげあしとり……624
 足が2本……756
 明日に向かって生きている……701
 汗かき……302
 焦る……619
 温かい……507
 頭が良い……401
 頭が悪い……402
 頭の回転が遅い……402
 頭の回転は速い方である……401
 頭はまあまあ賢い……401
 頭は悪いわけではない……401
 新しいもの好き……737
 あつかましい……541
 暑がり……302
 厚化粧の女は嫌い……745
 兄……201
 アパート暮らし……732
 アホ……757
 甘えんぼう……613
 甘党……740
 あまのじゃく……629
 あまりおこらない……507
 あまりびくびくしない……526
 アルバイト……732
 アレルギー体質……302
 あわてもの……516
 アングロサクソン人……108

い

いい加減……616
 家柄……212

家出したい……709
 家にいると親に甘えて何もしない……613
 生きている……755
 生きているのは辛い……718
 生きることは素晴らしい……749
 意気地がない……619
 意志が強い……527
 いじけやすい……623
 意地っぱり……611
 意地悪……624
 依存心が強い……614
 偉大な画家になりたい……701
 一途……535
 一日を大切にしたい……729
 一般能力がある……407
 一般能力がない……408
 いつも赤字を出している……556
 従兄弟が好き……210
 田舎者が好き……745
 犬年生まれ……105
 犬を飼っている……732
 今泣いた鳥がもう笑った……602
 色黒……301
 陰気……544
 陰険……624
 飲食への指向……740
 隠喩的な記述……757

う

WAI に関する記述……801
 WAI に対する批判・感想……801
 嘘が下手……502
 うそつき……628
 嘘をついてもすぐばれる……502
 疑い深い……623
 歌がうまくなりた……707
 歌が下手……303
 宇宙人……756
 うっかり……516
 美しいものに憧れる……739
 移り気……604
 自惚れや……609
 占いを信じる……750
 うらやましがり屋……623
 うれしがり屋……605
 浮気っぽい……604

運がいい……750
 運転免許を持っている……410
 運動神経が発達している……303
 運動をするのが好き……741
 運命観……750
 運命を信じる……750

え

映画が趣味……747
 営業能力がある……403
 営業能力がない……404
 英検2級を持っている……410
 英語が得意……403
 英語が不得意……404
 ええかつこしい……608
 エッチ……728
 江戸っ子……107
 エネルギーがある……515
 エネルギーがない……549
 絵をかくのが好き……739
 宴会要員……504

お

追い込み型……539
 老いに対する意識……712
 老いを感じる……712
 横着……549
 鷹揚……507
 おおざっぱ……523
 大勢でいるのが嫌い……542
 大勢で話しをするのは苦手……543
 おおらか……507
 お金が欲しいなあ……713
 臆病……619
 怒りっぽい……606
 叔父が好き……210
 おしゃべり……505
 おせじによわい……518
 おせつかい……509
 おだやか……507
 落ち込んでいる……730
 落ち着きがない……516
 おちゃめ……503
 お調子者……518
 おつちよこちよい……516
 夫……201
 夫とうまくいっていない……207

夫と死別……………207
 おっとりしている……………524
 オーディオが好き……………747
 おてんば……………515
 弟思い……………205
 男……………103
 男っぼい……………559
 男まさり……………559
 男らしさ……………559
 おとなしい……………621
 大人と子供の間……………104
 大人になりたくない……………709
 おばあちゃん子……………208
 叔母が好き……………210
 お人好し……………511
 思いやりがない……………601
 思いやりがある……………508
 面白い……………504
 思ったことをすぐ顔に出す……………502
 思ったことをまっすぐに言う……………558
 親孝行……………202
 親父である……………201
 親を大切にしない……………202
 音楽が好き……………739
 温厚……………507
 音痴……………303
 女……………103
 女らしい……………559
 女らしさ……………559
 温和……………507

か

快活……………503
 外向的……………501
 懐古的記述……………746
 会社員……………111
 会社でサークルに入っている……………110
 会社名……………111
 開放的……………502
 顔が大きい……………301
 顔が広い……………118
 我が強い……………608
 我が強くない……………621
 鏡を見る度年を感じる……………712
 革新的……………737
 学生……………109
 学生時代はラグビー部だった……………110
 学籍番号……………109
 学年……………109

学部……………109
 学問への指向……………744
 学歴……………114
 家系……………212
 陰口をきかない……………532
 賭事が好き……………743
 過去を省みることが多い……………746
 ～がしたい……………713
 家族……………211
 片思い中……………117
 勝気……………611
 学校……………109
 学校が好き……………109
 学校へ行きたくない……………109
 格好は気にしない……………705
 学校名……………109
 活発……………515
 家庭……………211
 家庭内の役割……………201
 家族に冷たい……………211
 家庭は安らぎの場……………211
 華道……………739
 可能性のある人……………719
 株に興味がある……………734
 ～が欲しい……………713
 我慢強い……………528
 神の真理をみつきたい……………701
 神は存在する……………735
 髪をのぼそうと思う……………705
 寡黙……………543
 辛いものが好き……………740
 カラオケが趣味……………747
 かわいげがない……………612
 かわい子ぶる……………630
 変わり者……………757
 考えが甘い……………613
 考えが幼稚です……………613
 頑固……………529
 看護婦さんになりたい……………703
 感受性豊か……………553
 感情移入しやすい……………615
 感情が激しい……………605
 感傷的……………615
 感情的……………605
 感情を表さない……………547
 感情を抑えられない……………605
 頑張り家……………530
 寛容……………507
 感情的にならない……………545

き

偽悪的……………630
 消えたい……………709
 気が荒い……………607
 気が多い……………519
 気が利かない……………546
 気が利く……………509
 気が小さい……………619
 気が強い……………607
 気が長い……………524
 気が弱い……………619
 利き手……………302
 聞き役にまわる……………543
 気さく……………501
 気丈……………526
 起床は6時……………731
 傷つきやすい……………553
 気ぜわしい……………517
 偽善的……………630
 気だてがよい……………508
 几張面……………536
 几張面でない……………523
 きつい……………607
 機転が利く人間になりたい……………708
 喜怒哀楽が顔に出ない……………547
 気長に待っている……………524
 気分が安定している……………730
 気分転換がうまい……………520
 気分には波がある……………602
 気分屋……………602
 気分良好……………730
 義務を果たす……………533
 気持ちのきりかえが速い……………520
 気やすい……………501
 逆境に強い……………526
 ギャンブルへの指向……………743
 器用……………303
 競争心が強い……………607
 兄弟姉妹……………205
 兄弟と仲が悪い……………205
 兄弟のことがたまに気になる……………205
 協調性がある……………501
 郷土愛が強い……………115
 京都、東京の人が好き……………745
 脅迫観念的……………632
 恐怖症……………632
 虚言癖がある……………628
 切り替えが下手……………529

義理堅い.....533
 キリスト教の信者である.....735
 きれい好き.....536
 きれいになりたい.....705
 議論好き.....551
 気を使い過ぎる.....618
 金婚式.....732
 勤続年数.....114
 緊張しやすい.....619
 筋肉質.....301
 勤勉.....530

く

空想家.....615
 ぐうたらしているのが好き.....549
 ぐずぐずする傾向がある.....614
 口が堅い.....543
 口が軽い.....505
 口数が多い.....505
 口数が少ない.....543
 口が悪い.....624
 口下手.....543
 くやしがりや.....611
 くよくよしない.....522
 くよくよ悩む.....618
 暗い.....544
 クラブ.....110
 クラブに青春をかけている.....110
 クール.....545
 ~君と友達.....116

け

経営がある.....403
 経済観念がある.....557
 経済観念がない.....556
 経済指向.....734
 経済的に自立している.....732
 経済摩擦が気になる.....734
 軽率.....516
 経営能力がない.....404
 経歴.....114
 下宿人.....732
 けち.....727
 血液型.....302
 結婚したい.....704
 結婚生活に憧れる.....704
 結婚に関する願望.....704
 結婚~年.....732
 月収が多い・少ない.....112

潔癖.....536
 ~家の一員.....201
 ~家の子孫.....212
 けんかずき.....607
 けんか早い.....606
 元気.....515
 健康.....302
 健康である.....302
 健康に対する意識.....706
 健康になりたい.....706
 健康のためジョギングしてい
 る.....706
 健康を気にする.....706
 現在の気分.....730
 現在の欲求.....713
 剣道5段.....410
 健忘症気味.....560

こ

恋人.....117
 恋人がいる.....117
 強引.....607
 後悔ばかりしている.....618
 好奇心旺盛.....519
 攻撃的.....607
 高校生活は面白かった.....109
 強情.....529
 向上心がある.....610
 高所恐怖症.....632
 好色家.....726
 公正.....532
 行動しながら考える.....514
 行動的.....514
 行動より頭で考えるタイプ.....550
 硬派.....725
 声大きい.....303
 故郷.....115
 故郷が嫌い.....115
 故郷が懐かしい.....115
 故郷に帰りたい.....115
 故郷は遠きにありて思うもの.....115
 国籍.....108
 国籍はアメリカ.....108
 心掛け.....729
 個性がある.....721
 個性的.....721
 克己心がない.....605
 骨董品などに心を魅かれる.....739
 孤独が好き.....542

子供.....206
 子供が好き.....748
 子供が一人いる.....206
 子供っぽい.....613
 子供に厳しい.....206
 好み.....748
 子煩悩.....206
 細かい事が好き.....552
 凝り性.....535
 これといった悩みがない.....522
 根気がある.....528
 根気がない.....604
 根性がある.....528

さ

最近誕生日がきても嬉しくな
 い.....712
 再婚.....732
 先のことは余り考えない.....522
 サークル.....110
 ~サークルの幽霊部員です.....110
 酒好き.....740
 さっぱりしている.....522
 茶道.....739
 寂しがりや.....512
 寒がり.....302
 冷めている.....545
 騒がしい.....504
 存在する個体.....755
 三十代.....104
 ~さんは私の恋人です.....117

し

自意識が強い.....622
 資格.....410
 字が上手・下手・きれい・汚
 い.....303
 時間配分が悪い.....555
 自己暗示にかかりやすい.....615
 指向その他.....758
 思考的.....550
 自己主張が強い.....608
 自己中心的.....601
 仕事が忙しい.....111
 自己と他者の評価の違い.....722
 仕事で成功したい.....701
 仕事内容.....111
 仕事に不熱心.....111
 支持政党.....733

- 自主性がない……………614
 思春期……………104
 自信家……………609
 地震が怖い……………751
 自信過剰……………609
 自信をもちすぎる……………609
 静か……………621
 自制心が強い……………527
 自制心がない……………605
 自然が好き……………748
 自然観……………751
 自然は偉大……………751
 持続性がない……………604
 自尊心が強い……………609
 親しみやすい……………501
 下町育ち……………732
 しっかりしている……………531
 じっくり腰を据えて考える……………538
 しつこい……………625
 実行型……………514
 実存的記述……………755
 じっと考えるのは嫌い……………514
 じっとしているのが好き……………549
 児童文化研究会に入っている……………110
 指導力がある……………405
 指導力がない……………406
 死ぬのも運命です……………749
 死は美しい……………749
 持病がある……………302
 自分がかわいい……………622
 自分が嫌い……………717
 自分勝手……………601
 自分自身を表現することが苦
 手……………543
 自分について人間について知
 りたい……………701
 自分に不満……………717
 自分に満足……………715
 自分の生き方に不満がある……………717
 自分の生き方に満足している……………715
 自分の考えをストレートに表
 せない……………543
 自分の子供が嫌い……………206
 自分の性格が嫌い……………717
 自分の性格が好き……………715
 自分の性格に不満……………717
 自分の性格に満足……………715
 自分の世界にこもりがち……………542
 自分は幸せ……………716
 自分は不幸……………718
 自分はまだ未熟……………717
 自分をあまり飾りたてない方……………621
 自分を成長させたい……………701
 自分をちゃんと持っている……………531
 地味……………621
 社会指向……………736
 社会人……………111
 社会の役に立ちたい……………736
 社会問題に興味がある……………736
 社交的……………501
 習慣……………731
 宗教指向……………735
 従順……………521
 住所……………106
 就職の希望……………703
 終戦直後の混乱期を生き抜い
 た……………759
 集団で何かするのが好き……………501
 執着心がない……………548
 姑とうまくいつていない……………210
 柔軟性がある……………520
 収入が多い・少ない……………112
 10年後は母親になっている
 だろう……………714
 執念深い……………625
 手芸が趣味……………747
 受験生……………109
 守銭奴……………727
 主体性がある……………531
 主体性がない……………614
 ～出身……………107
 出身校……………114
 収入……………112
 主婦……………201
 趣味……………747
 趣味は旅行……………742
 順応性がある……………520
 順応性がない……………529
 情意その他……………562
 将棋が趣味……………747
 消極的……………621
 常識家……………534
 常識がある……………534
 正直者……………532
 上司とうまく行っている……………111
 小事に拘らない……………522
 上司に恵まれていない……………111
 小心……………619
 小心者……………619
 冗談が好き……………506
 衝動買いをしてしまう……………556
 書道3段……………410
 衝動的……………605
 浄土真宗である……………735
 情にもろい……………511
 情熱家……………535
 蒸発したい……………709
 将来……………714
 将来性がある……………719
 将来の希望はまだない……………714
 将来は外国で暮らしたい……………714
 上流階級……………212
 昭和一術……………105
 職業……………111
 職種……………111
 職場……………111
 職歴……………114
 所属団体……………113
 書道……………739
 自立心がある……………531
 自立心がない……………614
 白黒をはつきりさせる……………558
 死を受け入れる……………749
 人格が分裂している……………631
 進学したい……………702
 進学の希望……………702
 芯が強い……………526
 神経が細かい……………617
 神経質……………617
 信仰は重んずるべきだ……………735
 新婚……………732
 人種……………108
 親戚……………210
 親戚付き合いはしてない……………210
 親切……………508
 親族……………210
 身体的能力……………303
 人畜無害……………720
 慎重……………538
 身長……………301
 心配性……………618
 審美指向……………739
 辛らつなことを言う……………624
 真理を追求する……………551
- す
- 図々しい……………541

定年後は～したい……………711
 ～で生まれた……………107
 出かけるときに戸締りが気に
 なる……………618
 手が2本……………758
 適応性がある……………520
 できるなら逃避したい……………709
 哲学が好き……………744
 テニスがしたい……………713
 テニス得意……………303
 デリケート……………553
 照れ屋……………620
 典型的なA型人間……………561
 典型的な～型の性格……………561
 典型的な長女タイプの性格……………561
 天才……………757
 電話をよくする……………731

と

～という職業に就きたい……………703
 ～という職業に就きたくない……………703
 東京大空襲で家を焼かれた……………759
 東京都民……………106
 当主……………201
 同情しやすい……………511
 同調的……………501
 逃避願望……………709
 動揺しない……………526
 東洋人……………108
 都会の人が好き……………745
 時の流れはとめられない……………752
 度胸がある……………526
 読書が趣味……………747
 独身……………732
 独身貴族……………732
 独断的……………601
 ～と暮らしている……………732
 独立自尊……………728
 ～と結婚したい……………704
 どこからきてどこにいくのだ
 ろう……………754
 ドジ……………516
 年はとりたくない……………712
 年をとっても老けたくない……………711
 とっつきにくい……………542
 共働き……………732
 ドライブが趣味……………747
 取り掛かるのが遅い……………539
 努力家……………530

とろい……………540
 鈍感……………541

な

内向的……………542
 ナイーブ……………553
 仲間意識が強い……………118
 泣き虫……………605
 投げやり……………616
 なぜこんな時代に生まれたの
 だろう……………718
 何事にも関心を持つ……………519
 何事も悪い方に考える傾向に
 ある……………618
 ～な人間に成りたい……………708
 生意気……………612
 名前……………101
 怠け者……………549
 涙もろい……………511
 悩が多い……………618
 悩んでいる……………730
 ナルシスト……………622
 何のために生きているのだろ
 う……………754
 軟派……………726

に

にぎやか……………504
 21世紀を背負う人……………719
 二重人格……………631
 日課……………731
 ニックネームは～です……………102
 ニヒリスト……………545
 にぶい……………541
 日本人……………108
 日本人でよかった……………716
 ～人家族……………211
 ～人兄弟……………205
 ～人兄弟の～番目……………201
 人間……………756
 人間関係……………118
 人間関係に疲れている……………118
 人間に生まれてよかった……………716
 忍耐強い……………528
 忍耐力が弱い……………604
 妊婦(もうすぐ母親になる)……………201

ね

根暗……………544

猫になりたい……………710
 妬み深い……………623
 熱しやすく冷めやすい……………604
 熱中することができない……………548
 根にもつ……………625
 粘りが弱い……………604
 粘り強い……………528
 年金を～円もらっている……………112
 年収が多い・少ない……………112
 年齢……………104

の

能力に関する願望……………707
 ～の後輩です……………118
 ～の子供……………201
 のせられやすい……………518
 のろい……………540
 のろま……………540
 のんき……………524
 のんびりしている……………524

は

配偶者……………207
 バカ……………757
 博識……………409
 恥しがり屋……………620
 はずれ者……………757
 働き者……………530
 はつきりしている……………558
 はつきり「ノー」と言えない……………619
 派手好き……………608
 派手な事は嫌い……………621
 話し上手……………505
 話しネタのつきたことがない……………505
 はにかみ屋……………620
 母……………201
 母親……………204
 母親と仲が悪い……………204
 母親似……………301
 母親を尊敬している……………204
 浜っ子……………107
 早のみこみをする……………516
 パンクチュアル……………537
 反発心が強い……………629

ひ

ピアノが得意……………403
 ピアノを習っている……………731
 被暗示性……………615

ひがみつばい……………623
 悲観的……………618
 卑屈……………623
 非現実的願望……………710
 非社会的……………542
 非情……………545
 左利き……………302
 美的センスがある……………407
 美的センスがない……………408
 人が良い……………511
 人から誤解されやすい……………722
 人から頼りにされる……………510
 人混みが嫌い……………748
 人付き合いが嫌い・下手……………542
 人付き合いがよい……………501
 人とはりあいたがる……………611
 人にかっこいいところをみせ
 たがる……………608
 人に左右されやすい……………614
 人の言うことを気にする……………618
 人の好みははっきりしている……………603
 人の好き嫌い……………745
 人の相談にのるのが好き……………509
 人の真似が嫌い……………721
 人の真似が上手……………407
 人前で話すのが得意……………505
 人前で話すのが苦手、下手……………543
 人見知りしない……………501
 人見知り……………820
 一人暮らし……………732
 一人っ子……………201
 一人でいたくなることがある……………525
 一人でいても平気……………542
 一人でいるのが嫌い……………512
 一人で考えるのが好き……………550
 人を信じやすい……………511
 人をすぐにとがめてしまう……………624
 人をばかにする……………609
 人を見下す……………609
 皮肉屋……………624
 ひねくれもの……………629
 批判癖……………624
 秘密を持たない……………502
 ひょうきん……………504
 ひ弱……………302
 敏感……………553
 貧血……………302
 貧乏ゆすりをする人は嫌い……………745

ふ

無愛想……………542
 ファッションに興味がある……………705
 不安を感じやすい……………618
 フェア……………532
 不完全で意味を成さない回答……………901
 不器用……………303
 ふざけて書かれた回答……………802
 部署……………111
 ぶっきらぼう……………542
 物欲がない……………548
 筆不精……………549
 ふてぶてしい……………541
 太っている……………301
 無難な人間……………720
 扶養家族を持っている……………201
 プライドが高い……………609
 ぶりっ子……………630
 ～ぶる……………630
 付和雷同……………614
 文系が嫌い……………744

へ

平凡……………720
 平凡な生活……………720
 別居中……………732
 部屋のなかをきれいにしてい
 る……………536
 変化を好む……………737
 勉強が好き……………744
 勉強が得意……………407
 勉強への指向……………744

ほ

傍若無人……………601
 包容力がある……………510
 保守的……………738
 星を見るのが好き……………739
 ほーつとしてしている……………549
 ほらふき……………628
 本籍は～……………107
 ほんやりしている……………549

ま

毎日忙しい……………732
 毎日が充実するように生きる……………729
 毎日が楽しい……………716
 毎日必ず経済新聞を読む……………734

マイペース……………728
 曲がったことは嫌い……………532
 負けず嫌い……………611
 孫……………209
 孫が可愛い……………209
 孫はうるさい……………209
 孫は元気だ……………209
 まじめ……………532
 真面目ぶる……………630
 麻雀はつきあい程度……………743
 全く書かれていない回答……………901
 まわりを気にしない……………546
 まめ……………536
 回りが気にならない……………546
 まわりを気にする……………618

み

見栄っ張り……………608
 味覚が発達している……………303
 身勝手……………601
 未既婚……………732
 水商売はしたくない……………703
 未成年……………104
 身だしなみを気にする……………705
 三日坊主……………604
 見通しがきく……………401
 身の回りのものはきちんとし
 ておく……………536
 未亡人……………732
 未来への明確なビジョンはま
 だない……………714
 未練がましい……………625

む

無回答……………901
 無気力……………549
 無口……………543
 無効回答……………802
 無邪気……………613
 無職……………111
 無神経……………541
 夢想家……………615
 無駄口は聞かない……………543
 ムード派……………815
 無頓着……………541
 無頓着……………546
 無表情……………547
 無理なことはしない……………538

め

姫が好き	210
明朗	503
目が悪い	302
目だたない	621
目だちたがり屋	608
目立ちたくない	621
免許	410
面倒くさがり屋	549
面倒見が良い	509

も

もう少し身軽になりたい	705
目標に向かって努力する	701
もてない	724
もてる	723
ものぐさ	549
物事にこだわらない	522
物事にこだわる	626
物事に熱中しやすい	535
物事を気軽に考える	522
物事を気にする	618
物事をはつきりさせる	558
物知り	409
ものを大切に	729

や

やきもちやき	623
野球を観るのが好き	741
約束を守る	537
優しい	508
優しさと厳しさが同居	631
野次馬	519
野心がない	548
野心的	610
やせたい	705
やせている	301
山が好き	748
山の上に住んでいる	732
ややこしいことが嫌い	523
やりかけたことを残すと気に なる	536
やりくりが下手	556
やりくり上手	557
やり通す	528

ゆ

勇敢	526
----	-----

優柔不断	614
友人	116
友人が多い・少ない	116
友人を大切にしている	116
融通がきかない	529
融通がきく	520
ゆっくりしている	540
ユニーク	721
夢多き人	615
ユーモアがある	506

よ

陽気	503
洋裁が趣味	747
容姿	301
容姿に対する意識	705
容姿は人並	301
用心深い	538
要領が良い	554
要領が悪い	555
余暇は有意義に過ごすべきだ	729
抑鬱的	525
欲がない	548
よく気が付く	509
欲張り	727
よく昔の思い出にふける	746
四次元の世界はあるとおもう	752
世の中すべて金	734
世の中すべて力	733
嫁	201
世渡りがうまい	554
世渡りが下手	555

ら

楽観的	522
-----	-----

り

理解できない回答	802
理屈っぽい	551
理屈をこねるのが好き	551
離婚	732
理数系が天敵である	404
リズム感	303
理想が高い	610
律儀	533
流行を追うのが嫌い	738
良妻賢母の妻がいる	207
両親	202
両親とうまくいっている	202

両親健在	202
寮生	732
料理が趣味	747
旅行するのが好き	742
旅行への指向	742
理論家	551

る

ルーズ	616
-----	-----

れ

礼儀を知っている	534
冷静	545
劣等感がある	717

ろ

老後の希望	711
老後はのんびり暮したい	711
浪人	109
浪費的	556
ロマンチスト	615

わ

わりきりが速い	520
わがまま	601
わけもなく落ち込むことがあ る	525
～を信じない	735
忘れっぽい	560
忘れものばかりしている	560
話題が豊富	505
私以外の何者でもない	753
私は欠点だらけです	717
私は象	757
私は誰	754
私はなんだろう	754
私は花	757
私一人しかいない	755
私は...わからない	754
私は私	753
私は私自身です	753
ワープロを買いたい	713
笑い上戸	503
悪知恵が働く	627
腕力がある	303

2. WAI 事例集

この事例集には、大学生から40代までの47事例を掲載した。掲載された事例には、その年齢において一般的なものと特殊例の両者が含まれるよう努めたが、適切な事例がない場合もあり、年齢・性別ごとの事例数には偏りがある。なお、小学生から高校生までの事例(事例1~事例48)については、「組織行動研究, No.16」に掲載されているので参照されたい。

事例の構成は以下のようになっている。

事例49~66	大学生	p. 97~104
事例67~76	20代	p.104~108
事例77~88	30代	p.109~114
事例89~95	40代	p.114~117

各事例は、被験者の反応を忠実に掲載しようと極力努めた。各回答は、回答番号をつけて1つずつ掲載しており、その回答に自分らしいものとして○が付けられている場合、回答番号を○で囲んである。また、1989年度版基準書で分類した際の小項目番号を、各回答の最後の()内に示してある。被験者の回答の中には、プライバシーの保護や印刷の都合からそのまま掲載できなかった部分もある。それについては以下のような変更を加えて掲載した。

- ① プライバシー保護の立場から、そのまま掲載することができない固有な名詞は、《 》の中に説明を入れて省略を行なった。
- ② 被験者自身が反応内容の訂正を行なっている部分は、■を用いてある。
- ③ 文字や文章が、各行の上や下から挿入されているものは、{ }の中に入れて印刷してある。
- ④ その他説明が必要なものについては、※を用いて回答の後に説明するか、あるいは、【注:】として反応の中で説明を加えた。

大学生

事例 49 男性 19才 7ヶ月 (大学2年生)

- 1 《大学名》文学部社会学科専攻の学生。(109)
- ② 陶芸倶楽部在籍、男。(110,103)
- 3 関東学生陶芸連盟。学陶委員。学陶展担当(110)
- ④ 酒弱し。特に弱し。キライ (302,740)
- ⑤ 煙草はすわない。大キライ。(731,740)
- ⑥ 落語。歌舞伎。演劇などに傾倒している。(747)
- ⑦ 古典派 特に モーツァルト ベートーヴェン、他にバッハが好きである (739)
- ⑧ 男が女よりすぐれていると信じる者 (758)
- ⑨ まだ若い 19才 (104)
- 10 女性に関していうと、日本的で和服の似合う首の若冠長い人が良い (745)
- ⑩ 例としては岩下志麻のファン (745)
- ⑪ ロマン・ロランと ベートーヴェンをこよなく愛している者 (739)
- ⑫ 趣味は多彩 (731)
- 14 ちゃらんぽらんで、うすつぺらな女性を特に嫌う (745)
- ⑬ コミュニケーション に特に興味がある。(744)
- 16 現在。うわさは あるが、特定の女性はなし (732)
- ⑭ 陶芸が好きである (739)
- ⑮ 好きな陶芸家は、浜田庄司、荒川豊蔵、河井寛次郎、富本憲吉。(739)
- ⑯ 小磯良平 の絵が 特に好きな男 (739)
- 20 わりとプライドが高い (609)

主にデモグラフィックな属性と陶芸をはじめとする審美的な指向についての記述で構成されている。審美的な指向が被験者にとって重要な意味を持つことが、この反応から感じられる。

事例 50 男性 20才 2ヶ月 (大学生2年生)

- 1 嫌いな人間が多い (603)
- 2 利己主義者 (601)

- ③ 自分よりも恵まれている人間に対する しつと心が強い (623)
- ④ 自分よりも恵まれていない人間に対する 同情心も強い (511)
- ⑤ 理性よりも感情に左右される (605)
- 6 精神的に 大人になりきれない (613)
- 7 他人に対して偏見を抱きやすく、いつまでもそれに縛られる (625)
- 8 いつも、ありもしない理想を 求めている (615)
- 9 現実には 失望している (718)
- ⑩ 心が狭く 他人や社会の欠点を許容することができない (624)
- ⑪ 気が弱いくせに 強者に反発したがる (619,624)
- ⑫ 物事に 感動しやすく、喜怒哀楽が 極端である (553,605)
- 13 いつも 誰かに 頼っていたい と思っている (614)
- 14 好きな人間には 自分の弱さを見せて 理解してほしいと思う (118)
- 15 表面上は 交際上手を 装っている (630)
- 16 友人は多い方だと言う (116)
- 17 自分は 恵まれているのか そうでないのか わからない (758)
- ⑬ 嫌いな人間は徹底的に嫌い、良さを認めようとしない (603)
- 19 理屈で考えている事と 感情との食い違いに悩む (758)
- 20 僕にとって 友人は 自分より劣った者でなければならぬのかも知れない (116)

自分の性格を中心に記述しているが、自己に対する洞察を自分なりの言葉を用いて表現している。ある意味では過剰な自意識も感じられるが、これはこの年齢の被験者の反応の特徴でもある。

事例 51 男性 21才 9ヶ月 (大学3年生)

- 1 私は これまで21年間 たいしたことも無く平凡に生きて来た。(720)
- 2 私は 1957年の夏 愛知県の暑い日の昼 誕

生した。(105)

- 3 私の心の中には さまざまなcomplexがありトラウマがあるようだ (717)
- ④ 私はあまり活動的なほうではなく ナマケモノのほうである。(549)
- 5 私は、いつも目先のことにアクセクしたりしている自分や他の者が嫌になる。(717,745)
- 6 私は 身長165cm. 体重55kg で ますます健康な人間だ。(301,302)
- 7 私は一般に悲観的にものごとを考えておく、それは失敗のショックをやわらげるためである (618)
- ⑧ 私は、規則正しい生活が出来ない。(731)
- 9 私の家は大学から 1時間ほどかかる。(731)
- ⑩ 私は 長男で 性格的には おっとりしている。(201,524)
- 11 私は 過去には 天文学や文学にこったことがある。(744)
- 12 私は、政治的関心は強いほうではないが体制は批判すべきだと考える (733)
- 13 私は、大学新聞会やゼミに所属している。(110,110)
- 14 私は、何か自分の生きがいになるような仕事をしたい。(701)
- 15 私は、マイホーム主義はあまり好ましいものとは考えていない。(758)
- 16 私は、才能はあまりない人間だから努力しなくてはならない。(720,729)
- 17 私は、もっと生きいきとした人間になりたいと思っている (708)
- 18 私は、勉強のための勉強は 良くないと常に思っている (758)
- 19 私は長生きは したくないが、健康ならそれも良い。(711)
- 20 私は、あまりとりえのない 人間だ。(720)

自己や外界に対する批判が多く、懐古的な記述がある点もこの事例の特徴である。これは否定的な自己評価を反映したものと思われる。また、この年齢はで懐古的な記述が現れることは珍しい。

事例 52 男性 22才 3ヶ月 (大学4年生)

- 1 私は人間です。(756)
- 2 私は大学生です(109)
- 3 " 健康です(302)
- 4 " 小事に関わるのが嫌いです。(523)
- 5 " 長男です(201)
- 6 " 冷たい面があります(545)
- ⑦ " 不思議なものが好きです(748)
- 8 " 人見知りをすることがあります(620)
- 9 " 役者です。(仮面をかぶることが可能です)(630)
- ⑩ " 固定しまったものがきらいです。(737)
- 11 " 興味ということ信じません。(758)
- ⑫ " 運命論者です。(750)
- ⑬ " 計算高い男です。(554)
- 14 " 人との接触がにがてです。(542)
- 15 " まじめです(532)
- 16 " 説明不可能です(758)
- 17 " とかげではありません(757)
- 18 " 酒が好きです(740)
- ⑭ " 考えてしまいます(801)
- 20 " まともです。(534)

個々の回答は大学生において標準的なものである。内容が多岐にわたっている点は、大学生の反応の特徴の1つである。

事例 53 男性 22才 5ヶ月(大学4年生)

- 1 男(103)
- 2 22才(104)
- 3 神奈川県民(107)
- 4 南足柄市民(107)
- ⑤ 《学校名》出身(114)
- ⑥ 長男(201)
- 7 人間科学専攻。(109)
- 8 文学部生。(109)
- ⑨ 《ゼミ名》ゼミ(110)
- 10 大田区在住(106)
- ⑪ 映画好き(747)

- ⑫ 《姓名》(101)
- 13 アーム・レスラー(303)
- 14 《大学名》生。(109)
- ⑬ 日本人。(108)
- 16 地球人(756)
- 17 生物(756)
- ⑭ スキーヤー(303)
- 19 車好き(747)
- 20 普通の人(720)

個々の回答は標準的なものであるが、全体的に見ると性格や内面の記述は見られない。また、回答がほとんど1つの単語で構成されていることも特徴的である。

事例 54 男性 23才 10ヶ月(大学生)

- ① 私はポール マッカートニーです。(902)
- 2 私はジョン レノンです。(902)
- 3 私はジョージ ハリソンです。(902)
- 4 私はリンゴ スターです。(902)
- 5 私はドンヘイリーです。(902)
- 6 私はリチャード カーペンターです。(902)
- 7 私はカレン カーペンターです。(902)
- 8 私はミック ジャガーです。(902)
- ⑨ 私はステイングです。(902)
- 10 私はフレディ マーキュリーです。(902)
- 11 私はジーン シモンズです。(902)
- 12 私はフィル コリンズです。(902)
- 13 私はジョン デンバーです。(902)
- 14 私はグレン フライです。(902)
- 15 私はポール サイモンです。(902)
- 16 私はアート ガーファンクルです。(902)
- 17 私はダニー オズモンドです。(902)
- 18 私はポール ヤングです。(902)
- 19 私はヒューイ ルイスです。(902)
- 20 私はブルース スプリングスティンです。(902)

回答のすべてが人名であり、これは施行時の被験者の態度に問題のある事例である。しかし、これらはすべて音楽関係の人名であり、被験者のキ

ャセクションがうかがえる。

事例 55 男性 23才 10ヶ月 (大学4年生)

- 1 私は人間です。
 - 2 今年の夏頃には、就職が決まっているだろう学生です。(714,109)
 - 3 4年間あまり真面目に勉強しなかった学生です。(109)
 - 4 自分の将来をけっこう楽しみにしている男です。(714)
 - 5 割と要領のいい面と、悪い面が同居している。(631)
 - 6 自信家です。(609)
 - 7 割と頭のいい人間です。(401)
 - 8 相手の考えが判ったり、こまかい素振りに気付いたりして、それを少し気にする所があります。
- ※8,9で1回答(618)
- 10 日本人です。(108)
 - 11 《姓名》です。(101)
 - 12 男です。(103)
 - 13 友人、先輩、後輩がたくさんいる幸せ者です(116,118,716)
- ※14~20は無回答(901)

13答しか記述されていないが、内容から見て施行時の被験者の態度に問題はない。現在と将来の自己が中心に記述されており、この被験者の自己評価が高いこともうかがえる。

事例 56 男性 23才 10ヶ月 (大学4年生)

- 1 男です。(103)
- 2 学生です。(109)
- 3 夢、多き青年です。(615)
- 4 一人子です。(201)
- 5 特別な人間です。(757)
- 6 東京都民です。(106)
- 7 渋谷区民です。(106)
- 8 著者です。(757)
- 9 ギタリストです。(739)

- 10 芸術家です。(739)
- 11 ピーターパンです。(757)
- 12 心の旅人です。(757)
- 13 社会になじみにくい人です。(529)
- 14 観念先向型(観念論者)です。(615)
- 15 1人が好きであり、淋しがり屋でもある。(542,512)
- 16 宇宙の傍観者です。(757)
- 17 二面性の多い人間です。(631)
- 18 乱筆家です。(303)
- 19 文学者です。(739)
- 20 変わっています。(757)

メタファーを用いた記述が多く見られるが、おそらくこれは自分の指向を誇張したものと思われる。このような表現の仕方は男子高校生に多く見られる。

事例 57 男性 24才 10ヶ月 (大学4年生)

- 1 人間です (756)
- 2 大学生です (109)
- 3 日本人です (108)
- 4 千葉県人です (106)
- 5 松戸市民です (106)
- 6 《姓》です (101)
- 7 誰でもいいじゃないか。(801)
- 8 店員やってます。(732)
- 9 きのう雑誌を買った者です。(732)
- 10 わかってるはずだ。(801)
- 11 メガネの方の《姓》です。(301,101)
- 12 教えてあげない (801)
- 13 男です (103)
- 14 女性ではありません (103)
- 15 老人ではない (104)
- 16 病人ではありません。(302)
- 17 24です。(104)
- 18 地球人です。(756)
- 19 作業に時間のかかる私です あとひとつ (540,801)
- 20 '62生まれです。

デモグラフィックな属性が中心で、部分的にWAIに対する批判的な態度も認められる。このような事例は高校生の男子には見られるが、大学生ではあまり見られない。

事例 58 女性 19才 0ヶ月 (短大1年生)

- ① 私は、人間だ。(756)
- ② 私は、大人である。(104)
- 3 私は、悲しい。(730)
- 4 私は、優しい。(508)
- ⑤ 私は、思う。(757)
- 6 私は、小さい。(301)
- 7 私は、わからない。(754)
- 8 私は、考える。(757)
- ⑨ 私は、走りたい。(757)
- 10 私は、見るができない。(757)
- 11 私は、夢をもっている。(815)
- 12 私は、泣きたいし、怒りたい。(757)
- 13 私は、冷たい。しかし直せない。(545)
- 14 私は、赤や青や黄や黒や緑でもある。(757)
- ⑮ 私は、楽しみたい。(713)
- 16 私は、いつも欲しい、でも手に入らない方がいい。(727)
- 17 私は、気むずかしいし、不器用でもあるが、そんな自分を気に入っている。(606,303,715)
- ⑯ 私は、疲れる、でもその方がいいのかもしれない。(302)
- 19 私は、常に空想の中にでも生きている。(815)
- 20 私は、恵まれている？ (716)

名詞によるメタファーは時折見られるが、このような表現はあまり見られない。部分的には理解可能であるが、全体的に見ると難解な反応と言える。

事例 59 女性 (大学1年生)

- 1 かなりの自己中心主義者 (601)
- 2 周囲のこともつい気になって 自己中心に徹することは出来ない人間 (618)
- 3 良いにつけ悪いにつけ徹底していることに価値

- を感じる人間 (558)
- 4 自分が良いと思う方へ率直に進めず、ためらうことが多い人間 (614)
- ⑤ あいまいさに甘んじている部分と、あいまいさを嫌う部分とが同居している人間 (631)
- 6 劣等感と自己嫌惡の塊。(717)
- 7 物事の基準を高くとりすぎて、上ばかり眺めている人間 (610)
- 8 そのうち本当の自分になれるだろうと、「いつか」ばかり考えている人間 (701)
- ⑨ 思うことが先ぼしりしすぎて その瞬^{ときどき}間ををおろそかにすることが多い人間 (517)
- ⑩ ささいなことに自分にしか価値のないような意味合を持たせては喜ぶ人間 (609)
- 11 本心を3割だけしか入れて書かないような詩人
- ⑫ 抽象的なことに 抽象的な分析をしてかつ結果を出せない人間 (550)
- ⑬ 寂しかったり、ハングリーだったりする時だけに甘えかかるような猫型人間。(613)
- 14 物事の判断、決定がたいへん遅い人間。(614)
- ⑮ 自分の感情になかなか素直になれない人間。(629)
- ⑯ 必要以上の抑制をして、自分で自分を縛りつけしまう人間。(618)
- 17 自分以外のものからの抑圧等には、たいへん反発を感じる人間。(629)
- 18 欲しいものが手に入るまで、それに執着するが手に入ると熱が冷める。(604)
- 19 何でも うらやましがることが多い人間。(623)
- ⑰ 典型的文系人。(561)

自己の性格を中心に深く洞察を行なっており、被験者の知的水準が高いことがうかがえる。ただし、内容は否定的なものが多く、力動的な不安定さが感じられる。

事例 60 女性 19才 6ヶ月 (大学2年生)

- ① 人間です。(756)
- 2 《姓名》です。(101)
- ③ 学生です。(109)
- 4 日本人です。(108)

- 5 生き物です。(756)
- 6 子供です。(104)
- 7 地球人です。(756)
- ⑧ 《姓》家の次女です。(201)
- 9 女性です。(103)
- 10 アジア人です。(108)
- ⑨ 北海道人です。(107)
- 12 旭川市民です。(107)
- ※13~20は無回答(901)

デモグラフィックな属性の記述に終始しており、性格や内面についての記述はない。また、回答も13しかない。このような事例は小学生に多く、大学生では珍しい。

事例 61 女性 19才 7ヶ月 (大学2年生)

- 1 私は 夏目漱石という作家と 彼の作品を愛する者です。(739)
- 2 私は 3才ごろ、生死の間をさまよったことのある者です。(749)
- 3 私は 高校の時、カトリックの教育を受け、非常な影響をうけました。(109,735)
- 4 私は、簡素な美しさが好きです。(739)
- 5 私は スポーツが 苦手です。(303)
- 6 私は、目立つことがあまり好きではありません。(621)
- 7 私は、雑踏の中に長い間いると、感性が鈍る気がします。(542)
- 8 私は、いつも 余裕を持っていたい。(729)
- 9 私は 書道 や 華道をたしなんだことがあります。(739)
- 10 私は 高校時代、部長などをして、さかんにクラブ活動をしました。(110)
- 11 私は、マリア様を理想の女性としている者です。(739)
- 12 私は、“悩む”という行為を厭います。(522)
- 13 私は、真言宗の檀家に生まれたことを幸いに思っています。(735,716)
- 14 私は、現在の地に住んでいるのを、非常な幸福と思っています。(106,716)
- 15 私は、文章を書くのが好きです。(747)

- 16 私は、芸術作品に接することが好きです。(739)
- 17 私は、自分の外側の世界について、いつも淡泊でありたい。(729)
- 18 私は 自殺・安楽死には反対です。(749)
- 19 私は、 イヌ・ネコと一緒に暮らすのが好きです。(748)
- 20 私は、絶えず 活動的でありたい。(729)

指向的な側面について記述が多く、被験者の審美的な指向や、宗教や生命に対する態度などが理解できる。それに対し、デモグラフィックな属性についての記述がほとんどないことも特徴的である。

事例 62 女性 19才 7ヶ月 (短大1年生)

- ① 私は《姓名》です。(101)
- ② 私は《姓》家の長女です。(201)
- ③ 私は《姓名》の姉です。(205,201)
- 4 私は 今 スキーにこっています。(741)
- 5 私は 日本に住んでいる日本人です。(108)
- 6 私は アメリカ人ではありません。(108)
- 7 私は 女です。(103)
- 8 私は まだ結婚していません。(732)
- 9 私は 学生です。(109)
- 10 私は 車の免許を持っています。(410)
- 11 私は 少しわがままです。(601)
- 12 私は あまり頭が良くありません。(402)
- 13 私は 安達町の町民です。(106)
- 14 私は 健康です。(302)
- 15 私は 人にたのまれたらいやとは言えません。(509)
- 16 私は スポーツが好きです。(741)
- 17 私は テニスができます。(303)
- 18 私は 涙もろいです。(511)
- 19 私は 彼がいます。(117)
- 20 私は つまらない人かもしれませんが (717)

家族、デモグラフィックな属性、性格、趣味と多岐にわたって記述してあるが、それぞれの内容は、内面的な豊かさを感じさせるものとは言えない

い。これは、精神的な発達の不十分さが反応にも反映しているためと思われる。

事例 63 女性 19才 10ヶ月 (短大2年生)

- 1 私は気が小さい (619)
- ② 私は 空想好きである (615)
- 3 私は 根性がない (604)
- ④ 私は 人のすることが気になる (618)
- ⑤ 私は お菓子作りが趣味である (747)
- ⑥ 私は 涙もろい (511)
- ⑦ 私は 人の目を気にするほうである (618)
- ⑧ 私はよく肉親に相談する (211)
- ⑨ 私は人と話すことが好きである (505)
- ⑩ 私は人に物事を説明することが得意である (407)
- 11 私は めんどろなことが嫌い だ (549)
- 12 私はどちらかといえば友達の中で判断を下す役目である (116,531)
- 13 私はアドベンチャーロマンのような映画が好きである (748)
- 14 私は 東京に憧れている (748)
- ⑮ 私は 感動しやすいほうである (605)
- 16 私は くよくよ悩むが すぐ忘れてしまう (618,522)
- 17 私は だらしのないほうかもしれない (523)
- 18 私は やさしい感じの服が好きだ (705)
- ⑰ 私は オッチョコチョイである (516)
- ⑱ 私は 事後 に悩むことがよくある (618)

性格を中心に記述されている。女子大生の性格記述としては標準的なものと言って良い。ただし、一般的には、性格記述だけでなく、より多様な反応が現れることが多い。

事例 64 女性 21才 3ヶ月 (大学2年生)

- 1 私って生物は 一応 人間という高等動物に属するらしい。(756)
- 2 私は 只今 《大学名》の二年生。(109)
- ③ 何故か今まで自分の存在を否定したことがない 図々しい人間です。(755,541)

- ④ だから “僕って何” なんて質問されると答えに窮する浅薄な人間。(801,543)
- 5 家族の中では 堂々と長女の座を占めているのであります。(201)
- ⑥ 家族内において 疎外感なんぞ感じた事のない 鈍感な人間です。(211,541)
- ⑦ 私自身 あまり ベタつく人間関係を嫌う女の子だと思ってます。(118)
- 8 だから 若干 希薄な関係でも物足りなさを感じない女の子なんです。(118)
- 9 孤独を嫌って生きているわけでもないから。幸運なのかもしれません。(542,716)
- ⑩ 今だかつて徹底的な孤独を味わった事のない 甘ちゃんだと思う。(732,613)
- 11 私の回りには 客観的に見て 一応友人と呼べる人が常にいます。(116)
- ⑪ 以前 友人に「空気みたいな感じ」と言われ 納得してる人間です。(758)
- 13 考えてみると ふうわりふうわりと生きてきている様な気がする。(757)
- 14 何だかんだと頑張っても 結局 自分のしている事は苦痛とは ほど遠い。(716)
- 15 人生一度だけだからと 緊張する事もあります。(701)
- 16 平凡な女の子だなあと つくづく思いながら 奮っているのです。(720)
- ⑫ 正直言って 私は 平凡である事に 最近 全然 不満を覚えない。(715)
- 18 平凡である事だって むずかしいのだと 居直っているのです。(715)
- 19 こうして見ると 我ながら 幸福な人間だと内 心思っている人間です。(716)
- ⑬ ふわふわしていて 他人に左右されやすい面が多分にあります。(614)

反応内容は分析的であり、ユーモアも感じられる。また、非常に肯定的な生活感情が読み取れる。これは知的水準が高く、力動的に安定した被験者の事例と言える。

事例 65 女性 21才 5ヶ月 (短大2年生)

- 1 地球に住んでいます。(756)
- 2 人間です。(756)
- 3 女です。(103)
- 4 苦勞ばかりしています。(718)
- 5 他人の目が気にかかります。(618)
- 6 プライドが高いです。(609)
- 7 夢をおい続けています (701)
- 8 だせいで生きています (758)
- 9 現実と理想のギャップにいつも悩まされています (718)
- 10 調和を求めています (758)
- 11 あらゆることをこなせる人間になりたいと思っています (708)
- 12 家を出て一人暮らしがしたいです。(713)
- 13 他人に干渉されるのがいやです。(542)
- 14 バカさわぎして何もかも忘れたいです (713)
- 15 時々、生きているのがいやになります (718)
- 16 自分の存在がなんなのかわからなくなります (754)
- 17 生きていて楽しいことがみつかりません (718)
- ㉑ 偉くなって他人をみかえしてやりたいです (701)
- 19 他人が私のことを認めてくれない (718)
- ㉒ あとどのくらい生きているのだろう (749)

否定的な自己評価、生活感情は高校生や大学生の反応に見られるが、このように反応全体に現れている事例は珍しい。

事例 66 女性 22才 9ヶ月 (大学4年生)

- ① 女 (103)
- ② 大人 (104)
- ③ 子供 (104)
- 4 空気 (757)
- 5 身体 (756)
- 6 生身の人間 (756)
- 7 嘘 (757)
- ⑧ 真実 (757)

- ⑨ 虚飾 (757)
- ⑩ 肉体 (756)
- 11 結合 (757)
- 12 分離 (757)
- 13 不安 (618)
- 14 自信 (719)
- 15 顕示 (808)
- 16 熱がある (302)
- 17 胃腸が弱い (302)
- 18 生きる望みに輝いている (701)
- 19 明日が明るい (522)
- 20 1人しかいたくない (755)

単語1つによるメタファーが多く、意味を理解できないものも多い。このような形で自己を表現しようとする者は、高校生から大学生にかけて時々見られる。

20代

事例 67 男性 23才 8ヶ月 (会社員)

- 1 私は、男である (103)
- 2 私は、23才である (104)
- 3 私は、静岡県出身である (107)
- 4 私は、今、一人で暮らしています (732)
- 5 私の家族は、5人います (211)
- 6 私には、姉一人と妹一人います (205)
- 7 私の仕事は、コンピュータのオペレーションです (111)
- 8 私は、この仕事が好きです (111)
- 9 私は、積任感が強いです (533)
- 10 私は、おとなしいです (621)
- 11 私は、おっとりしています (524)
- 12 私は、真面目です (532)
- 13 私は、素直です (521)
- 14 私は、健康です (302)
- 15 私は、やさしいです (508)
- 16 私は、元気です (302)
- 17 私は、スポーツが好きです (741)
- 18 私は、ドライブが好きです (747)
- 19 私は、自分が好きです (715)

20 私は、この会社に入ってよかったと思います (111)

内容はデモグラフィックな属性、家族、仕事、性格、好みなど多岐にわたっている。また、自己や外界に対する肯定的な態度も感じ取れる。ただ、内面性の豊かさは感じられない。

事例 68 男性 26才 (会社員)

- 1 私は 二男 であります。(201)
- 2 私は 東京にすんでいるが 生れは 群馬 である (106,107)
- 3 私は 現在 26 歳になったばかりである (104)
- ④ 私は、色々違った場所に住んでみたい。(714)
- ⑤ 私は 春 よりも 秋が 好きである (748)
- ⑥ 私は 一人である時間 を大切に してゆきたいと考えている。(729)
- ⑦ 私は 言葉の使い方、内容には 以外と神経質だ。(536)
- 8 私は 日常は睡眠時間は少ないが、多くとつてもやはり眠い (731)
- ⑨ 私は ある程度時間を かけて何かをするのが好きだ。(735)
- ⑩ 私は次から次と、やってみたいことが思い浮び、迷うことがある。(519)
- 11 私は 近ごろふりりぎみなので、食べてもふとらないようになりたい (705)
- 12 私は 野菜類は余り食べないが、肉類は比較的多く食べる (740)
- 13 私は 昔はスポーツが好きで、見たり、自分でもしたが 今はあまりしない (741)
- ⑭ 私は 田舎に長く住んでいたの、都市に住みたいと子頃よく考えた (714)
- ⑮ 私は 早く30代になりたいと思っている。行動に自信を持っている人が多い。(708)
- ⑯ 私は 穏厚な人間になる前に一度は戦闘的になつてみたい (708)
- ⑰ 私は 日常緊張することが少ないことは 精神的に人間を弱くすると思う。(729)

⑱ 私は 強い信念は持つべきだと思うが、自分の年齢により変わると思う。(729)

19 私は 富士山へ一度は登ってみたい。(713)

⑳ 私は 雨の降る日は 家の中にいるのが とても楽しい (748)

誤字がいくつか見られるが、願望や自分の態度、信念、考え方について明解に記述している。態度、信念、考え方などは、社会人の中年男性によく見られるが、この年齢ではあまり見られない。

事例 69 男性 26才 11ヶ月 (会社員)

- 1 両親と私の三人家族です。(202,211)
- 2 現在、身長181cm、体重78kgで ややふとり気味です。(301)
- 3 得意ではありませんが、スポーツが好きで、今はテニスに凝っています。(741)
- 4 出身は沼津市ですが、東京生活はもう20年以上になります。(107,106)
- 5 読書は好きですが、今は読む暇がないのが不満です。(747,732)
- 6 趣味といえるほどのものは、持っていません。(732)
- 7 高校時代に野球をやっていました。今ではいい思い出です。(110)
- 8 大学時代を無為にすごしたことを少々不満です。(111)
- 9 今の仕事が忙しいので、少々不満です。(732)
- 10 人とつき合うのはあまり得意ではありません。努力はしていますが。(542,729)
- 11 一人である時間が他人よりも多いでしょうか。(732)
- 12 他人の目がひどく気になる性質のようです。(618)
- 13 議論とか、争いごとはあまり好みません。(621)
- 14 ひとりっ子であることが、大きなハンディキャップであるように思います。(201)
- 15 自尊心はかなり高い方だと思います。特に出身大学について。(609,114)
- 16 それでいて、自信家ではありません。(621)

- 17 人ごみは嫌いです。(748)
- 18 本質的に怠け者だと思います。(549)
- 19 将来、大物になるとか、大きな仕事をしてみたいと思います。(701)
- 20 時々、現実から逃避したくなることがあります。(709)

家族、身体、生活史、性格など幅広い内容が記述されている。特に、性格については分析的で客観的に記述されている。また、力動的な不安定さも若干見られる。

事例 70 男性 29才 10ヶ月 (会社員)

- 1 僕って、男です。(103)
- 2 夫です。(201)
- 3 父です。(201)
- 4 会社員です。(111)
- 5 合気道初段です。(410)
- 6 旅が好きです。(742)
- 7 せっかちです。(517)
- 8 大阪っ子です。(107)
- 9 歌が好きです。(747)
- 10 陽気です。(503)
- 11 要領の良い方です。(554)
- 12 人づき合いの良い方です。(501)
- 13 次男です。(201)
- 14 体を動かすことが好きです。(741)
- 15 6回も引っ越しをしました。(732)
- 16 4人兄妹です。(205)
- 17 親バカ子煩惱です。(206)
- 18 165cm、57kgです。(301)
- 19 健康です。(302)
- 20 生きてます。(755)

この被験者は、回答の3を見てもわかるように既婚者である。既婚者の反応には、この反応のように家族についての記述が多く含まれる傾向がある。

事例 71 女性 21才 0ヶ月 (会社員)

- 1 人間です。(756)
- 2 女の子です。(103)
- 3 社会人です。(111)
- 4 5人家族の次女です。(211,201)
- 5 日本人です。(108)
- 6 《会社名》の社員です。(111)
- 7 横浜市戸塚区の住民です。(106)
- 8 《学校名》の卒業生です。(114)
- 9 明るいです。(503)
- 10 自動車教習所の生徒です。(732)
- 11 会社でお花をならっています。(110)
- 12 バドミントンをやっています。(741)
- 13 バレーボールをやっていました。(741)
- 14 スポーツが好きです (741)
- 15 ネコといつしよに住んでいます (732)
- 16 少し太っています。(301)
- 17 食べることが好きです。(740)
- 18 友人がいます (116)
- 19 仕事でワードプロセッサを使っています (111)
- 20 サッパリした性格です (522)

日常生活についての記述が多く、また、仕事についての記述もいくつか含まれている。一方、性格についての記述がほとんどなく、若干幼さを感じさせる事例と言える。

事例 72 女性 22才 4ヶ月

- 1 私は《姓名》といいます。(101)
- ② 私は《大学名》を今年卒業しました (114)
- ③ 私は スポーツが大好きです (741)
- ④ 私は 人間関係を大切にしたいと思っています (118)
- 5 私は 小さなことをあまり気にしません。(522)
- 6 私は 細かいことに気がききません。(523)
- ⑦ 私は 物事を柔軟に考えたいと思っています (729)
- 8 私は 考えを押しつけられることがきらいです (728)
- 9 私は いろいろなスポーツに挑戦してみた

- いと思っています (741)
- 10 私は 動物が 大好きです (748)
- 11 私は 人に対して やさしくありたいと 思っ
ています (729)
- 12 私は 神経質で はありません (522)
- 13 私は 後悔する ことが きれいです (522)
- 14 私は 人前で 話すことが 苦手です (543)
- 15 私は いつも感性 を 大切に 思っています
(553)
- 16 私は クラブで 忍耐力を 得ました (110,
528)
- ⑰ 私は人を 疑うことがきれいです. (511)
- 18 私は 良い友達をたくさんもっています (116)
- ⑱ 私は あまり人に 怒る ということをしません
(507)
- ⑳ 私は 違った環境の中でも 順応してしまうほ
うです (520)

デモグラフィックな属性についての記述が少
なく、好みや性格についての記述が多い。全体的に
対人指向的で、活動的な感じがするが、自分の性
格も客観的に見ている。

事例 73 女性 23才 0ヶ月

- ① 私は人間です (756)
- ② " 女性です (103)
- ③ " O Lです. (111)
- ④ " 《会社名》の社員です (111)
- 5 " 新入社員です (111)
- ⑥ " 《姓名》です (101)
- ⑦ " 《姓名》の娘です (203,201)
- ⑧ " 《姓》家の長女です (201)
- ⑨ " 妹です (201)
- ⑩ " 姉です (201)
- 11 " 23才の青年です (104)
- ⑫ " 《大学名》の卒業生です (114)
- 13 " 江戸川区の住民です (106)
- 14 " 営業企画室の一員です (111)
- 15 " 成人です (104)
- 16 " 五月荘の住民です (732)
- 17 " 学生ではありません (111)

- 18 " 中央区で働いている者です (111)
- 19 " 国鉄の利用者です (731)
- 20 " 日本人です (108)

ほとんどの反応がデモグラフィックな属性や家
族についての記述であり、性格や好みなどに
ついての記述は一切ない。このような事例は女性では
非常に珍しい。

事例 74 女性 24才 1ヶ月 (会社員)

- 1 地球の 1 住人である (756)
- 2 日本人 で—" (108)
- 3 独身の 女性で—" (732)
- ④ 冒険心旺盛である。(519)
- 5 内心は臆病者である (619)
- ⑥ 空想好きだが 夢想家 ではない (615)
- 7 世間一般の常識に 欠けている 人間だ (546)
- 8 物事に対する執着心 が薄い -" (548)
- ⑨ 自称、超常現象研究者である。(752)
- 10 意志は固く、強い方だが、頑迷固陋 という程
ではない (527)
- ⑩ 厄介事は回避し 安逸を 好む傾向がある人間
だ。(554)
- 12 “戦争を知らない子供達”の1人であった。
(105)
- 13 今は昭島市の住民である。(106)
- 14 片道、1時間40分かかって通勤している会社員
である。(731,111)
- 15 頼まれると 断り切れない性格の持ち主である。
(509)
- ⑮ 数学は 大嫌いである (744)
- 17 英語は 学校で習うだけでは身につかないと思
っている。(758)
- 18 テニス以外のスポーツは好きである。(741)
- ⑰ お酒を飲むと陽気になる。(302)
- 20 他人 の心を気遣い過ぎるところがある (618)

広い範囲の内容が含まれており、全体的には標
準的な事例と言える。この年齢にしては大人とし
ての落ち着きや安定感が感じられる。

事例 75 女性 28才 1ヶ月 (会社員)

- 1 《会社名》の人事部で、入社6年目に入り、給与・福利 全般的なことをしています。(111)
- 2 生まれてから、27年間 《姓》という姓でしたが 家庭の事情で今は《姓》です。(101,211)
- 3 自主性がなく、どうにかなるだろうと 思いながら過ごしてきました。(614)
- 4 身体を動かすことが 大好きで、たまに、テニスをしたり今は水泳を 習ってます。(741)
- 5 涙もろく テレビを見てるだけで 泣いてしまいます。(511)
- 6 明るくて 笑いは、鈍やさないと 思います。(503)
- 7 初めての人でも、如才なく話せますが、なかなか自分自身を 出せません。(543)
- 8 犬が大好きですが 8年前に死んだ犬が忘れられず 今は飼っていません。(732)
- 9 小さい時から 芸事が好きで、高校時代は 演劇部に入っていました。(747,110)
- 10 悩み ごとがある時は、友人よりも 姉に 話す方が多いです。(205)
- 11 自分がされたくないの、人の心の中へは 深入りしません。(729)
- 12 自分の部屋にいる時は カセットかレコードをつけ、音楽が流れてます。(731)
- 13 積極的であるようでいて、引っ込み思案です。(513,621)
- 14 食べ物の好き嫌いは 全然ありません。(740)
- 15 外国の本よりも、日本の作家の本の方が好きです。(739)
- 16 今のんびりと景色を眺めながら 電車の 旅をしたいです。(744)
- 17 家族は 両親と兄姉で二人とも結婚していますが 兄姉がいて良かったと {思います。} (202, 206)
- 18 身近な人のことは、厳しすぎる目で 見てしまいます。(624)
- 19 人の気持ちばかり気にかけてしまい、別のところで抜けてしまいます。(618)
- 20 陽気ですが、人が話すのを 聞く方が 好きです。(503,543)

ひとつひとつの回答が長く、内容も内面的なものが多い。性格についての記述からは、自分自身を客観的に見ているが、不安定さも感じられる。

事例 76 女性 29才 3ヶ月 (主婦)

- ① 私は、常に子供や夫、そして 身内の健康や幸福を願っている。(206,207,211)
- ② 私は 動物や草花が好きで将来大きな庭をもち花を沢山咲かせることが夢である。(748,714)
- 3 私は、すぐ子供をしかりつけてしまうが しかったあと大きな後悔がいつも残る。(206)
- ④ 私は、料理よりも そうじ洗濯が大好きである。(748)
- 5 私は 子供の寝顔を見ると 安らぎや、幸せを感じる。(206,716)
- 6 私はなによりも健康が第一であると思っている(706)
- 7 私は小さい頃から背が低い事に対して劣等感を持っていた。(705)
- 8 私は 時間的にルーズな人、だらしない人は嫌いである (745)
- ⑨ 私は 少し自分でもいい子ブリッコ主義だと思ふところもある (630)
- 10 私は 貧しくてもいいから 人並の生活が出来ればいいと思う (729)
- ⑩ 私は 自分自身が好きである。(715)
- 12 私は 与えられた仕事に対し迅速にかつ正確さをモットーにして処理したい。(729)
- 13 私は誰からも好かれ信頼される人間になりたい。(708)
- 14 私は 子供の頃から少々怒りっぽいところがあった。(606)
- ⑮ 私は人から手先が器用だと良く言われ自分自身も洋裁や細かい事を (するのが) すきです (303,552)
- 16 私は姉妹のうちどちらかと言うといつも相談事をされる方です (205,510)
- 17 私は家族のものから結婚してから性格が変わったネとよく言われます (758)
- 18 私は自分でも又他の人から 家庭と仕事の両立

をよくやっているとほめられます (715)

- 19 私は仕事をする癖になってから一日一日が充実してきたと感じる。(111,716)
- 20 私は人類みな平和で幸福で平等でなければならないと思う (736)

この被験者の人柄や、家族、特に子供に対する態度がよく現れている事例である。男性の場合も、既婚の場合、家族・家庭についての記述が現れるが、大部分は「夫」、「父」などの役割についてのもので、感情も含めた記述は女性に多い。

30代

事例 77 男性 30才 7ヶ月 (会社員)

- 1 私は カモメ。(757)
- ② あなたです。(757)
- ③ 私です。(753)
- 4 人間です。(756)
- ⑤ 私は《姓名》です。(101)
- 6 私は 社員 です。(111)
- 7 私は 小さいものです。(757)
- 8 私は 父の子です。(203,201)
- 9 私は 太陽の子です。(757)
- 10 私は 海の子 です。(757)
- 11 いったい 私は だれでしょう。(754)
- 12 私は 小さい虫 です。(757)
- ⑩ 私にもわかりません。(754)
- 14 そういうキミは ダレだ。(801)
- 15 私は 地球 です。(757)
- ⑪ 私は 原子 です。(757)
- 17 私は 本当に 生きているのでしょうか。(755)
- 18 私は 本当に存在しているのでしょうか。(755)
- 19 私は、まぼろし です。(757)
- 20 私は 夢です。(757)

メタファーによる自己規定が多く、その意味するところは理解し難い。このような反応は高校生の男子で時々見られるが、社会人の男性では非常

に珍しい。

事例 78 男性 30才 1ヶ月 (会社員)

- 1 最近芥川賞に 入選した 小説の題名(?)。(801)
- ② 自問自答して、自縛自縛する存在。(757)
- 3 長くて白い尾 を引きながら 細長い軌道を飛んで行く意識。(757)
- ④ 問いかけた「私」を無限に追いかける鏡の部屋。(757)
- ⑤ 10才を過ぎた頃から、つい最近まで まとわりついたもう1人の「私」。(757)
- 6 「席」について初めて 存在を確かめられる人。(757)
- 7 子供であり、夫であり、父となった「私」。(201)
- 8 気がついたときには、同一でない者。(755)
- ⑨ 「関係」づけて初めて 確認できる者。(755)
- ⑩ 今 かくあるようにしか あり得ない「私」。(755)
- 11 私の子供である 双子の「僕」は、まだ 自分自身を対象化していない「僕」。(757)
- 12 多少の ワガママを許してやりたい「私」。(758)
- 13 もっとも親しく、もっとも不可解な「私」。(755)
- 14 仮面が 真顔であるイロニカルな 存在。(755)
- ⑫ このように問わなくても良いような世界を求める「私」。(758)
- 16 知覚を持続できない不出来な「私」。(408)
- 17 社会内存在でありながら、社会からとび出そうとする意識のかたまり。(755)
- ⑬ 「僕」と云う発声をもって ようやく統一されたかに見える非存在。(755)
- 19 心と肉体 と そして 名付けられた呼称のすべて。(755)
- ⑭ 定められた時間と量を こなして ホットする「私」。(801)

メタファーや哲学的な記述で構成されている珍しい事例である。この被験者は、おそらく普段か

らこのような思索をしているものと思われる。このような反応は大学生の男子に見られることがあるが、社会人ではほとんど見られることはない。

事例 79 男性 34才 11ヶ月 (会社員)

- 1 30台中頃 独身、1人息子、資産ほとんどない、やや肥満型 (104,732,201,301)
- 2 愛媛県宇和島市出身、幼少より高校卒業まで大阪市に住む。(107)
- 3 《高校名》→《大学・学部名》→《会社名》の経歴を歩んでいる。(114)
- 4 色弱の為 理学部志望を断念せざるを得なかった。(302,702)
- 5 一人っ子の為 ワガママである。(201,601)
- ⑥ かつては、文学青年でありかつスポーツマンであった。(739,303)
- 7 時と場所に依じて表面的態度を変えることは苦痛ではない。(520)
- 8 日常生活においては、習慣・伝統に忠実である。(738)
- 9 本質的には、ニヒリストで 結局はなるようにしかならないという思いが強い。(545)
- 10 正義派で、センチメンタルであるが、人にそのように思われることには、抵抗が強い。(532,615)
- ⑩ 感情を素直に出すことは恥づかしいことだと、意識している。(621)
- ⑪ 気の合う友達とは夜遅くまで飲み歩き、馬鹿さわぎをしている。(116)
- 13 人から見た私が私であって 真の「私」というものはない。(753)
- 14 私は一体誰なんでしょう。少年じゃあるまいしあまりに青くさいと思います (801)
- 15 観念の世界では 自由に羽を伸ばせて たのしむことができる。(615)
- 16 如才ないので、年寄りには 人気がある。(554,723)
- ⑰ リアリストであり かつ ロマンチスト である。(545,615)
- 18 独りの時は、文学・演劇・映画に対して感懐はスムーズに流れる。(739)

19 こういう間を少年時代には、根をつめて考えたものだ。(753)

⑱ どうにか30近くになり、現実と ナレアウことが出来るようになった。(758)

自分の性格やものの考え方を中心に淡々と語っている。内容も表層的なものではなく、かなり深い内容も含まれている。大人の落ち着きが感じられる同時に、少年時代への憧憬もあるように思われる。

事例 80 男性 38才 11ヶ月 (会社員)

- 1 僕は S.22年生まれ。団塊の世代の一人。(104)
- 2 僕は 九州・若松に生まれ育ち、19才の時上京した。(107)
- 3 僕は 高校時代から広い世界にあこがれ、大学では外国語を専攻。(114)
- 4 僕は 学生時代はほとんど勉強しなかったが、幸いにも就職できた。(111)
- ⑤ 僕は 細かい事が嫌い。大きな枠組みを作ることが好き。(523,748)
- ⑥ 僕は 身体的活動を伴う仕事が好き。スポーツはもちろん。(111,741)
- 7 僕は 26才で結婚。“予定”通り1男1女の父となり満足。(732,206,201)
- ⑧ 僕は 7才の時から両親と別居してきたので独立心は旺盛。(202,531)
- ⑨ 僕は 他人から指示されて動くのは嫌い。その逆は好き。(629)
- 10 僕は できるだけ多くの国を訪れ、旅行記を書きたい。(744,714)
- 11 僕は 子供とはできるだけ距離を置いた父親でありたい。(206,201)
- ⑫ 僕は 国際人を目指したい。(701)
- ⑬ 僕は 親としての責任が終われば 妻と二人で余生を楽しみたい。(201,207,711)
- ⑭ 僕は 会社ではできれば役員ポストにつきたい。(703)
- 15 僕は 今の生活に特に不満はない。欲を言えばきりがいいから。(716)

- 16 僕は 眞の友人は一生のうち2人いれば良いと思っ
ている。(116)
- ⑩ 僕は 何であれ燃える時とそうでない時の落差
はかなり大きい。(525)
- 18 僕は 小中学生の頃はプロ野球の選手になりた
かった。(703)
- 19 僕は 政治の世界も多少関心がある。(733)
- 20 僕は 最低73才まで生きたいと思っ
ている。(711)

肯定的な生活感情を読み取ることのできる事例
である。この被験者の場合、仕事と家庭の両者に
ついて現状に満足しており、それが反応に反映し
ている。

事例 81 女性 33才 10ヶ月 (主婦)

- ① 私は 洋裁が好きだ。(747)
- ② 私は、小説、詩、思想書をいつでも読んでいた
い。(739,745)
- ③ 私は、二人の男児の母親■で、子供を愛してい
る。(206,201)
- 4 私は、夫に精神的に支えられて 幸せだ。
(207,716)
- 5 私は、一人で過ごす時間が好きだ。(542)
- 6 私は、いいかげんな 言動が 出来にくい。
(532)
- ⑦ 私は、いつも何かを追い求めていないと生きら
れない。(701)
- 8 私は、情もろい 部分も 多い。(511)
- 9 私は、男性的な 性質も 一面 強い。(559)
- 10 私は、感受性が 激しい。(553)
- 11 私は、宗教団体、政治団体など団体が嫌いだ。
(748)
- ⑫ 私は、神のゆるしを 信じている。(735)
- 13 私は、物質に こだわりを 置かない。(758)
- 14 私は、人を愛する気持ちを大切に
する。(729)
- 15 私は 花木や自然(海、山)の中
にいるのが好きだ。(748)
- 16 私は、親友には何でも腹を割って
いく性格だ。(502)
- ⑬ 私は、人生に本物が 欲しい。
(701)

- 18 私は、表面的な言動や人物を信じない。
(758)
- 19 私は、何事にも 流行に 流されたく
ない。(738)
- 20 私は、かわいい女性になりたい。
(708)

性格と態度や好みなどの指向的な側面について
の記述が多くを占めている。このように内面的な
関心が強い一方で、社会的な関心の弱さを感じる。

事例 82 女性 34才 4ヶ月 (スナック勤務)

- ① 父と母の間に生まれた 3女 (203,204,201)
- ② 《姓名》という名の34才の独身女性 (101,
104,732,103)
- ③ この世の中に 私という人間が一人しか存在し
ない (755)
- ④ 感覚が男みたいな女 (559)
- ⑤ 気のつよい女 (607)
- 6 変にわがままな女 (601)
- 7 八方美人 (554)
- ⑧ 人の面倒見がいい方 (509)
- 9 冷たい部分も持っている(かなり) (545)
- ⑩ 安うけあいをする (554)
- 11 思考力散漫 (604)
- ⑫ 人間より動物の方が好き (748)
- 13 自分の考えが一番正しいと思っ
ている 人間 (715)
- 14 他人の目を気にする方 (618)
- ⑬ 常識的な人間 (534)
- 16 見栄っぱりな女 (608)
- ⑭ 音楽からはなれられない女 (739)
- ⑮ お金が大好きな女 (734)
- 19 相手次第で■変わる人間 (520)
- ⑯ 女であるから男が 好き (726)

性格、特に力動的な側面についての記述が多い。
また、「女」という単語で体言止めになっている
回答も目につき、自分の性別をかなり意識してい
ることがうかがえる。

事例 83 女性 34才 8ヶ月 (幼稚園教諭)

- 1 私は主婦です (201)
- 2 幼稚園に勤めています (111)
- 3 毎日車で 30 分かかり通勤しています (731)
- ④ よく太っています (301)
- ⑤ よくおしゃべりを します (731)
- 6 毎日 幼稚園の子どもたちとたのしくあそんでいます。(111)
- 7 家では手芸をすることが 好きです。(747)
- 8 家庭菜園をすることが好きです。(747)
- 9 2人の子どもの母親です。(206,201)
- ⑩ 身長は 157cm です (301)
- ⑪ 体重は 63kg です。(301)
- 12 好きな色は赤です。(748)
- 13 好きな食べ物は、くだもんです。(740)
- 14 頭の髪は みじかいです (301)
- 15 色はくろいです (301)
- 16 コーヒーが好きで 1日 4はい ほどのみます (740)
- ⑫ よく笑います (503)
- ⑬ よく食べます (740)
- 19 字がきたないのが悩みです。(303)
- 20 めがねをかけています。(301)

日常生活と身体に関する記述が多く、性格についてはほとんど触れられていない。しかし、これらの記述からも被験者の明るい人柄が想像できる。

事例 84 女性 35才 2ヶ月 (主婦)

- 1 私は、今北海道へ行きたい。(744)
- 2 私は、北海道へ行って おいしいものを食べたい。(740)
- 3 私は、北海道 を、車でドライブしたい。(744)
- 4 私は、北海道 の 高原で、のんびり空を見たい。(713)
- 5 私は、雲に乗って旅に出たい。(710)
- 6 私は、雲に乗って日本一周したい。(710)
- 7 私は、各地の雲の様子を見たい。(710)
- 8 私は、雲の上から 山 を見たい。(710)
- 9 私は、庭の広い家へ住みたい。(713)
- 10 私は、海に見える 家へ住みたい。(713)

- 11 私は、シバフが有って 木を多沢 移えたい。(713)
- 12 私は、シバフの有る庭で、コーヒーをのみたい。(713)
- 13 私は、芝に 横になって 空を見たい。(713)
- 14 私は、芝の庭で、犬と、たわむれたい。(713)
- 15 私は、庭から、ヨットを見たい。(713)
- 16 私は、ヨットに 乗って、■夜空を見たい。(713)
- 17 私は、潮風 の 中で、星を、見たい。(713)
- 18 私は、ヨットに 乗って遠くへ行きたい。(713)
- 19 私は、ヨットで友達と、、パーティを、したい。(713)
- 20 私は、ヨット■が、ほしい。(713)

すべての回答が願望であるという非常に珍しい事例である。願望の内容も現実的なものではなく、夢に近いものである。この女性が35才であることを考えると、特殊な事例と言えるであろう。

事例 85 女性 36才 6ヶ月 (会社員)

- 1 あきっぽい性格なのでしつこくするようにしている。(604,708)
- ② 温厚で小さい子供なら たいていなかよくなる。(507)
- 3 人と付き合うのに深く付き合うことはしない。(542)
- 4 とつてもめだちたがり、だけど一歩うしろにさがってしまう。(608,621)
- 5 人の意見に左右されやすい。(614)
- 6 1日 中 口 を きかなくてもいられる。(543)
- 7 暗示にかかりやすい。(615)
- ⑧ 本読んだり映画を見たりして涙をながす。(615)
- 9 戸締りなどなんども確認して外に出てテレビが気になって {もどるかというそのまま出かけてしまう} (618,523)
- 10 着る洋服の色が年々かわって 今年ピンク去年は紺 その前は黄色… (705)
- 11 本を 読み出すと 読みおわるまでねむれない。

(747)

- 12 このごろテニスをしていて手ヌキをすることをおぼえた。(741)
- 13 ボーリングが昔とくいだったので今やるとヘタではがゆい。(303)
- 14 しばらく旅行をしていない。こんどはアメリカ本国へ行きたい。(744)
- 15 野球のためにテレビや小さいラジオをかった。(741)
- ⑩ 巨人がまげたり 読んだ本がおもしろくなかったりすると気げんがわるくなる。(602)
- 17 配置にかんしてのバランス感覚はあるけど色彩感覚がとぼしい。(407,408)
- 18 料理はつくることより あとかたづけの方が得意 (407)
- 19 人のすききらいがあるけど かくしてしまう。(603,621)
- 20 いつも年長 の人とつきあうというか対話しているので くだびれる。(118)

これは独身女性の事例である。デモグラフィックな属性や家族についての記述はなく、性格と日常生活についての記述が中心となっている。この年齢でデモグラフィック属性や家族についての記述がないものは、比較的少ない。

事例 86 女性 36才 11ヶ月 (主婦)

- 1 私はデパートになりたい。
- 2 私は時計。
- 3 私は セロテープ
- 4 私は 水道
- 5 私は バック
- 6 私は 月。
- 7 私は クモ
- 8 私は バラ
- 9 私は 柿の木
- 10 私は 輪ゴム
- 11 私は 絵
- 12 私は カーテン
- 13 私は ハンガー
- 14 私は タンス

- 15 私は 扇風機
- 16 私は 机
- 17 私は 電車
- 18 私は グローブ
- 19 私は みかん
- 20 私は 信号。

メタファーだけで構成されている反応であるが、ここに挙げられている物からだけでは、被験者がどのようなself-imageを持っているのかよく理解できない。ただし、これらの物から被験者の日常生活がある程度浮かんでくる。

事例 87 女性 39才 (保母)

- 1 私は人間です。(756)
- 2 昭和20年4月12日 山形県米沢市舘山十六軒町に生まれました。(105,107)
- 3 名前は《姓名》でした。(101)
- 4 結婚して《姓名》になりました。現住所は 昭島市玉川町《番地》です (101,106)
- 5 夫の名前は《姓名》です。(207)
- 6 子どもが 3人 います。(206)
- ⑪ 私は 保母として働いています。(111)
- 8 園の近くに住んでいます。(732)
- 9 担当クラスは きく組です。(111)
- 10 私の父は《姓名》 母は《姓名》といます。(203,204)
- 11 兄妹は、兄が4人 姉が一人 弟が3人 います。(205)
- 12 私は 上から 6番目 下 から 4番目になります。(201)
- ⑫ 小学校から現在まで健康に過ごしています。(302)
- 14 戦場で 子どもと接している 時が楽しい。(111)
- 15 物事をあまり人に相談しないで 自分で決断することが多い。(531)
- 16 友達との交流も多く、人にたよられる事が多い(116,510)
- 17 スポーツが好きであるが 水泳は 不得意である。(741,303)

18 人と話をしたり、一緒に行動する事を好む。

(501)

19 手先の活動が好きで 描いたり、編んだり、作ったりよくする。(552)

20 食べることが大好きな人間である。(740)

前半はデモグラフィックな属性と家族についての記述で占められており、後半は性格や好みが多い。全体的に、安定感を感じる事例である。

事例 88 女性 39才 5ヶ月 (パートタイマー)

- 1 私は白です。(757)
- 2 水色でもあります。(757)
- 3 緑にもなります。(757)
- 4 赤でもあります。(757)
- 5 黒にもなります。(757)
- 6 黄では ありません。(757)
- 7 土色 には なりません。(757)
- 8 私はイルカです。(757)
- 9 私は ハワイです。(757)
- 10 私は 沖縄 です。(757)
- 11 私は クマ です。(757)
- 12 私は 10円です。(757)
- 13 私は 針です。(757)
- 14 私は ヨーヨーです。(757)
- 15 私は ウメです。(757)
- 16 私は ケシゴムです。(757)
- 17 私は 温泉です。(757)
- 18 私は イヨウです。(757)
- 19 私は カップです。(757)
- 20 私は やきそばです。(757)

すべての反応がメタファーによる自己規定になっているが、むしろ思いつくものを羅列しただけでも考えられる。部分的には、自分自身を被験者なりに表現したものも含まれているかも知れないが、全体的には拒否的な反応と見るべきであろう。

40 代

事例 89 男性 41才 7ヶ月 (会社員)

① 裾野市稲荷に住む《姓名》です。(106,101)

② 《姓名》の夫です (207,201)

③ 《姓名》と《名》の父親です。(208,201)

4 41歳の男性です。(104,103)

5 スポーツマンです。(303)

6 本を読むことと散歩が好きです。(748)

7 《会社名》に勤務しています。(111)

8 父母は健在で近所に住んでいます。(202)

9 子供の頃から静岡県に住んでいます。(107)

10 出生地は鹿児島県ですが、覚えていません。(107)

11 美しいものが好きです。(739)

12 粘り強い性格です。(528)

13 手先きは不器用です。(303)

14 背が高く、やせています。(301)

15 兄弟は五人で、上から二番目です。(205,201)

16 動物が好きです。(748)

17 人との付き合いは好きですが得意ではありません。(501,542)

18 安定志向です。(758)

19 家族旅行が好きです。(744,211)

20 血液型はO型です。

反応内容はどれも一般的なものであるが、全体的に見ると、性格についての記述が少なく、家族について記述が多い。これは、家族に対する関心の強さが反応に反映されているものと思われる。

事例 90 男性 41才 1ヶ月 (会社員)

1 短気な男 (806,103)

2 栃木県人 (106)

3 中肉中背。(301)

4 とちらかという誠実な方である。(532)

5 41才の男 (104,103)

6 《会社名》社員 (111)

7 健康で 運動好き (302,741)

※8~20は無回答(901)

7つの回答しか書かれておらず、積極的にWAIに反応しているとは考えられない。しかし、性

格、デモグラフィックな属性、身体などについては一応は言及されている。

事例 91 男性 42才 3ヶ月 (出版物の編集)

- ① 嘘つきです (628)
 - ② 「神こそ嘘の極北だ」と■ {公} 言■■ {してはばからない} 有神論者である (735)
 - ③ 袋小路の風です (757)
 - ④ アル中一歩手前です。万歳! (302)
 - ⑤ 平等主義者です (733)
 - ⑥ 辛い存在です。言い換えれば、マジメです。(532)
 - ⑦ 職人の息子です。Tokyo下町生まれです。(203, 107)
 - ⑧ あんにやもんにやです (757)
 - ⑨ 非暴力のアナキストです (733)
 - ⑩ 落語ファンです。特に、志ん生。(748)
 - ⑪ 祈るしか能のない人です。その位置に {ずっと} いる人です (757)
 - ⑫ メタファの信奉者です (757)
 - ⑬ 大田省吾■「水の駅」に 100% 重なる者です (758)
 - ⑭ “現在形の過去”をたどる人です (757)
- ※「現在」と「過去」が○で囲まれており、両者が矢印で結ばれ、「イレカエ」という指示が付けられている。
- ⑮ 不思議な人間です (757)
 - ⑯ 見人^{けんしや}です。少なくともそれを願う {しかない} 者です。(407)
 - ⑰ アンチ・グルメです (象徴的に言って) (757)
 - ⑱ 抽象癖と分析癖の所有者です (551)
 - ⑲ たぶん、子供たちの人気者です (118)
 - ⑳ すてきなレディの恋人です (117)

本人も述べている通りメタファーが多用されており、この年齢の男性の反応としては極めて稀な事例である。これには被験者の職業も大きく影響しているとも考えられる。

事例 92 男性 46才 3ヶ月

- 1 私は福島県の会津若松市出身で昭和35年から首都圏に出てきております。(107,732)
- 2 私の家庭は妻と娘2人の4人家族です。(207, 206,211)
- 3 私は、入社以来営業畑にりましたが、昭和56年に総務・人事を担当し、昨年からは現職に就いています。(111)
- 4 私の趣味は、読書で、それも戦国時代を書いた歴史小説が好きです。(747)
- 5 私は将来、ひまが出来たら、「やきもの」を試してみたいと考えております。(714,739)
- ⑥ 私は、少年時代、ボーイ・スカウトに入隊しており、その時の経験は役に立っております。(113)
- 7 私は気が向くと、料理をしますが、得意なものは揚げ物、煮物です。(747)
- 8 私の通勤時間は長いので電車の中で読書を読みますが、その時は推理小説等の軽いものです。(731)
- 9 私は、スポーツが好きです。するのはあまりうまくないのですが、みるのはどんなスポーツでも好きです。(741)
- 10 私は、プロ野球の監督では、三原さんが好きでした。奇想天外な発想に興味がかれました。(748)
- 11 私は長男ですので、礼儀正しくといったように育てられた反動が、このようなことになったと思います。(211)
- ⑫ 私は、人より決断は早い方だと思いますが、あとからよりよい発想が出てくやまれることがあります。(514)
- ⑬ 私は、子供の教育は一貫性のある方が望ましいと考え、中学・高校が連続している私立に入れました。(206)
- 14 私は 先輩諸兄から「人の上に立つものは笑顔をやさずに」といわれたので、その通りと思いい実行するように {しています。} (729)
- ⑮ 私は、人の意見はよく聞きたいと思っていますが、しばしば全部を聞き終らぬうちに話をしてしまいます。(729,517)
- 16 私は、現在の仕事に就いてから皆の話をよく聞いて、志気の高揚をはかりたいと考えています。(111)

- 17 私は人に仕事を頼んでも、返事がない時は自分でしてしまいます。(111)
- 18 私は、定年になったら出身地に帰りたいと思っていますが、家族のことを考えると思ったようにはいかないようです。(711,211)
- 19 私は昨年父をなくし、母が1人で元気に商売をしておりますが、母の意欲のある限り続けさせてやりたいと思います。(203,204)
- ㊦ 私は、このようなものとか感想文等は期日が迫らないととりかからず、しばしば提出が遅れます。(539)

それぞれの反応が長く、生活史や家族、職業、日常生活について詳しく記述されており、しかも言葉遣いもていねいである。これは反応を読む人間を強く意識した模範回答と見ることもできる。

事例 93 男性 48才 8ヶ月

- 1 私は誰でしょう？ 改めて考いたことはない
難しい質問だ (801)
- 2 私は人間だ、もつとも地球全体の動物が認めている訳ではないが！ (756)
- 3 自分では考いることが出来る。(本能以外の行動をする) =狭い (756)
- 4 文字を書く。(訳の分からないことを、ゴチャゴチャ書く) =理解出来ない (756)
- 5 生まれて、このかた人生を無意味に、すごしてしまつた =焦り有り (717)
- 6 " " 無事に過ごした
=安堵 (716)
- 7 こん後の人生を穏やかに送れるだろうか
=心配 (714)
- 8 大きな仕事をして見たい =野心 (701)
- 9 苦勞などせず のんびり暮らして行きたい
=怠け心 (714)
- 10 他人より リッチな生活をしたい =見栄 (713)
- 11 自分のことを他人は、どう思って、いるのだろうか？ =猜疑心 (618)
- 12 自分が中心になるような生活(世の中)がしたい =欲望 (601)

- 13 嬉しい時にはニコニコ、可笑しい時には大笑い
=感情 (605)
- 14 書いていると自分にも色々な欲望 感情があるものだ。(758)
- 15 たゞ、大きな喜び、深い悲しみ、憤り、今ふり返つて見ると大した起伏の人生では無い (720)
- 16 私は、やはり人間だ (756)
- ※17~20は無回答(901)

「私は誰でしょう？」という問いに対し、内観しながら反応しているようである。反応内容も分析的な自己洞察という印象を受ける。「人間」ということ以外、デモグラフィックな属性には一切触れられていない稀な事例である。

事例 94 女性 40才 3ヶ月 (主婦)

- 1 神経質です。(617)
- 2 努力家です。(530)
- 3 口下手です。(543)
- ㊦ 正義感が強いです。(532)
- 5 やさしいです。(509)
- 6 女らしいです。(559)
- 7 外出するのが好きです。(748)
- ㊦ 家で手仕事をするのが好きです。(748)
- ㊦ 記憶力がよいです。(407)
- ㊦ おつちよこちよいのところがあります。
- 11 努力はするがどこかぬけているところがあります。(530,516)
- 12 やつたことに対し必ず後悔しています。(618)
- 13 計算が苦手です。(408)
- 14 近所付き合いが上手です。(118)
- ㊦ きれい好きです。(536)
- 16 高所恐怖症です。(632)
- 17 まじめです。(532)
- ㊦ 心配症です (618)
- 19 世話好きです。(509)
- 20 お人好しです。(511)

ほとんどすべての反応が性格についての記述で占められているが、このような事例は主婦では稀

である。性格記述そのものは常套句で構成されていて、内面性を感じさせるものではない。

事例 95 女性 48才 3ヶ月

- 1 私は一つ年上の主人がおります。(207)
- 2 かつ、三人の子供の母です。長男21才 長女18才 {次女11才} (206)
- 3 私は、長女に生まれたせいか姉御肌です。(201,510)
- 4 すぐ感情的になり喜怒哀楽が激しいです。(605)
- 5 涙 もろく、情は、厚い方だと思います。(511)
- 6 人と話すのが大好きで相手の心が知りたいです。(501)
- 7 今、一番の楽しみは、昔の仲間とおしゃべりする事 (116,505)
- 8 姑、との生活に葛藤、しています。(210)
- 9 姑、との暮らしは自分に与えられた人生の課題です。(210)
- 10 いつも向上心に燃え、自分を、叱咤しております。(701)
- 11 だんだん女でなくなってしまう様で恐ろしい。(712)
- 12 最後まで女であることを守りたい、努力 もする。(729)
- 13 健康が幸福の源、心を明るく、人を愛したい。(729)
- 14 夫婦仲良く、子供達と仲良く、人と仲良くしたい。(207,206,118)
- 15 早く出来上がった人間よりいつまで苦しみ悩む人間で良い (701)
- 16 私の趣味は読書と、音楽です。(747,739)
- 17 血液型は 典型的な O型です。(561)
- 18 仕事と子供と、家事に追われて夢中で生活して来た。(111,206,732)
- 19 子離れして、ゆとりがもてたら好きな事一つでもやりたい (711)
- 20 欠点をできるだけおさえて自分らしい生き方をしたいです。(701)

家庭についての記述が多く、その中での人間関係にまで言及されている。また、自分のこれまでの生きざまやこれからの展望についても述べられている。決して広範囲の内容を含むものではないが、深く掘り下げられた反応と言える。